



III 平城宮跡等の調査概要

表25 2013・2014年度 都城発掘調査部(平城地区) 発掘調査一覧

調査次数	調査地区	道 路	調査期間	面 積	調査地	担当者	調査要因	測量員
(2013年度)								
520次	6ABQ-H	平城宮第一次大極殿院広場	2014.1.7～2014.3.18	476m ²	奈良市佐紀町	海野 哲	学術調査	142
522次	6AFJ-Q-P-R	平城京左京三条一坊一坪	2013.12.16～2014.2.28	1,953m ²	奈良市二条大路南	山本祥隆	住宅建設	160
523次	6SNY	中山瓦窯	2014.1.21～2014.2.10	135m ²	奈良市中山町	石田由紀子、川畠 純	建設建設	168
524次	6BFK-E	平城京左京二条二坊十四坪	2014.2.3～2014.2.18	48m ²	奈良市法華寺町	青木 敏	宅地造成	176
525次	6BKA-C	海龍王旧境内	2014.2.19～2014.2.28	30m ²	奈良市法華寺町	青木 敏	建設建設	184
526次	6BFO-C-D	法華寺旧境内	2014.3.6～2014.3.18	30m ²	奈良市法華寺町	青木 敏	住宅建設	187
(2014年度)								
527次	6ABA-E	平城宮内裏北方官衙地区	2014.4.1～2014.4.7	133m ²	奈良市佐紀町	番 光	住宅建設	140
528次	6ABN-B	平城宮内裏職地区北方	2014.4.1～2014.4.7	45m ²	奈良市佐紀町	庄田慎矢	住宅建設	140
529次	6BFO-E・F	平城京左京一條二坊十坪	2014.4.9～2014.4.11	10m ²	奈良市法華寺町	庄田慎矢	住宅建設	140
530次	6AGC-I	平城京右京一条二坊四坪・ 二条一坊一坪・一條南大路	2014.4.14～2015.2.18	3,591m ²	奈良市二条町	小田裕樹、鈴木智大、 神野 恵	学術調査	191
531次	6ANN-C	平城宮跡(市庭古墳)	2014.4.16～2014.4.24	32m ²	奈良市佐紀町	庄田慎矢	住宅建設	140
532次	6BPK-1	法華寺旧境内	2014.4.22～2014.5.30	210m ²	奈良市法華寺町	庄田慎矢	宅地造成	187
533次	6AFF-D・E	平城京左京二条二坊十一坪	2014.7.2～2014.8.22	270m ²	奈良市法華寺町	石田由紀子	住宅建設	195
534次	6AFJ-E・F	平城京左京三条一坊十五五坪	2014.6.3～2014.7.24	400m ²	奈良市二条大路南	庄田慎矢、番 光	店舗建設	201
535次	6AJF-O	平城京右京三条一坊十五五坪	2014.7.1～2014.7.2	6m ²	奈良市二条大路南	石田由紀子	住宅建設	140
536次	6BYS	薬師寺寺町	2014.7.8～2015.4.22	3142m ²	奈良市西ノ京町	馬場 基	学術調査	204
537次	6BFK-1	法華寺旧境内	2014.8.5～2014.8.6	12m ²	奈良市法華寺町	馬場 基	宅地造成	140
538次	6ASB-L	平城宮北方	2014.8.25～2014.8.28	40m ²	奈良市佐紀町	石田由紀子	店舗建設	140
539次	6AED-E	興福寺寺境内	2014.9.16～2014.10.2	50m ²	奈良市東向中町	石田由紀子	店舗建設	205
540次	6BKF-L・M	興福寺寺境内	2014.9.29～2015.1.16	45m ²	奈良市登大路町	芝原次郎	学術調査	212
541次	6BKF	興福寺寺境内	2014.10.7～2015.2.12	270m ²	奈良市登大路町	山本祥隆	防災工事	212
542次	6ALO-M・N	平城宮内裏北方官衙地区	2014.10.14～2014.11.27	272m ²	奈良市法華寺町	渡辺晃宏	史跡整備	151
543次	6ABA-E	平城宮内裏北方官衙地区	2014.12.15～2014.12.23	14m ²	奈良市佐紀町	渡辺晃宏	住宅増築	140
544次	6AFO-D	法華寺旧境内	2015.1.13～2015.2.6	126m ²	奈良市法華寺町	渡辺晃宏	住宅建設	140
545次	6AFB-J	法華寺旧境内	2015.2.4～2015.2.12	24m ²	奈良市法華寺町	小田裕樹	住宅建設	140

表26 2014年度 都城発掘調査部(平城地区) 小規模調査等の概要

調査次数	道 路	調査 の 概 要
527次 平城宮跡内裏東方官衙地区		
		住宅建設にともなう事前調査。調査区は東区と西区の2ヵ所設定し、いざれも地面上で遺構を検出した。地山はもっとも浅い部分で現地表下10cm(標高75.40m)で確認したが、いずれの調査区も現地表下0.5～0.6mまで近現代の土成により削平される。東区では中近世の南北溝の重冠を検出した。西区は顯著な遺構はみられなかった。
528次 平城宮跡大膳職地区北方		住宅建設にともなう事前調査。現地表面より最大で19mまで掘削したが、調査区全体を昭和の公衆浴場の煙突の基礎で壊壊していたため、近代以前の遺構は検出されなかつた。
529次 平城京左京一條二坊十坪		住宅建設にともなう事前調査。調査区は東西2m、南北5m、地面上面(標高72.00m)で遺構検出をおこなつた。調査区内には近世以前の遺構は確認されなかつた。
531次 平城宮跡(市庭古墳)		住宅建設にともなう事前調査。現地表下0.6～0.7m(標高74.2～3m)で遺構面を確認した。上層で平城宮の造営と関係する整地堆を確認したが、建物などの遺構は検出されなかつた。下層では市庭古墳の東南部の柱根より一層あらかじめなった。
535次 平城京右京三条一坊十五五坪		住宅建設にともなう事前調査。調査の結果、調査区全体が自然道路の中にあることが判明した。遺構は自然路を埋め立てた整地土の上面で検出している。遺構面の標高は78.3m、奈良時代の可能性がある土坑を1基検出した。
537次 法華寺旧境内		住宅建設にともなう事前調査。現地表面下35～55cmで地山(標高64.9～65.1m)を確認した。近世以降の土坑1基を確認した。ほかは遺構は確認できず、中世以降の大規模な造成で古代の遺構は削除されたとみられる。
538次 平城宮北方		店舗新築にともなう調査。調査区は東西と東北の2ヵ所設定し、いざれも地面上で遺構を検出した。地山の標高は、西区で78.3m、東北で78.4m。今回の調査では、西区で柱根などを検出した他は顯著な遺構は認められなかつた。調査区は周辺よりも一段低く、後述の水田開発等で古代の遺構面は削平されている可能性が高い。
543次 平城宮跡内裏北方官衙地区		住宅増築にともなう事前調査。東西2m、南北7mの44m ² 。現地表下0.5～0.7mの市庭古墳周囲の埋立・整地土面で約10mの穴を確認したが、性格や時期は不詳。また一部で鉄出雲から約185cmで周囲底の青灰土シルトの地山面とその直上に堆積する有機質(径10cmの大型木片・木棺(木目がく)を多く含む灰黑色土層)を約20cmで確認した。
544次 法華寺旧境内		法華寺引内北端にあたる場所で、共同住宅建設にともない東西9m、南北14mの126m ² の発掘調査を実施。現地表下40～60cmの地山面で、奈良時代と考るられる東西廻廊・南北廻廊各1条東西各1条のほか、中世から近代に至る遺構を検出した。遺構は奈良時代の瓦・土器のほか、近世染付が出土。詳細は「紀要 2016」で報告予定。
545次 法華寺旧境内		共同住宅建設にともなう事前調査で、東西6m、南北4mの調査区を設定した。現地表下約0.5～0.7m(標高63.2～63.5m)で遺構面を確認した。奈良時代の整地土層および14～15世紀代の井戸1基と時期不明の小穴群を確認した。遺物包含層からは奈良時代の瓦・土器が多量に出土した。

表27 2014年度 都城発掘調査部(平城地区) 現場編制・終期当

番	夏	秋	冬
庄田 慎矢(考古第一)	尾野 善裕(考古第二)	幸芝 次郎(考古第一)	幸神野 恵(考古第一)
弟小田 裕樹(考古第二)	石田由紀子(考古第三)	青木 敏(考古第二)	川畠 純(考古第三)
今井 見樹(考古第三)	馬場 基(史 料)	山本 祥隆(史 料)	渡辺 晃宏(史 料)
番 光(道 構)	幸 翁(道 構)	崎崎 和久(道 構)	松下 通生(道 構)
	浦 容子(考古第一：研修)	大澤 正吾(考古第二：藤原)	
	金 宇大(考古第二：藤原)	清野 陽一(考古第三：研修)	
執括：副所長 小野 健吉		写真担当：企画調整部写真室	

III - 1 平城宮の調査

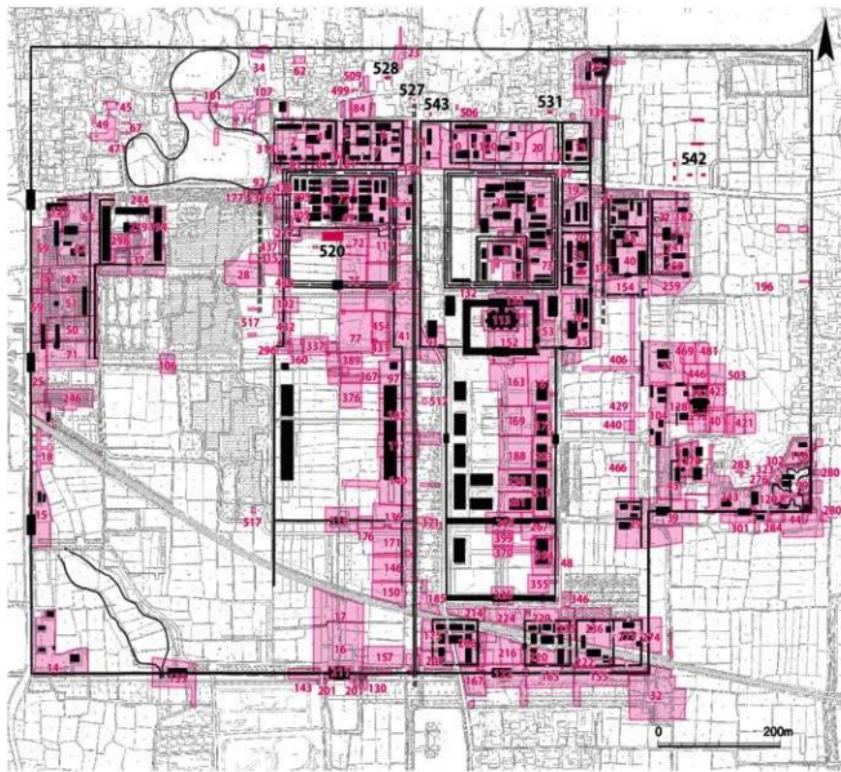


図186 平城宮発掘調査位置図 1:8000

平城宮第一次大極殿院広場の調査

—第520次

1はじめに

奈文研では、第2次調査（1959年）以来、第一次大極殿院の区画東半および回廊部分を中心に、継続的に調査をおこなってきた。既往調査により、主にⅠ期（奈良時代前半）、Ⅱ期（奈良時代後半）、Ⅲ期（平安時代初頭）の3時期の遺構変遷があきらかとなっている（『平城報告XVII』）。

今回の調査は、第72次調査（1971年）で検出した、棟敷風の遺構と解釈されているSB7141（Ⅲ期）、Ⅰ期の第一次大極殿院の南北通路の東側溝と目される南北溝SD7142の中軸線を挟んだ対称位置における西側溝の確認を主な目的とし、区画の中軸および上記の遺構の西対称位置を含む範囲に調査区を設定した（図187）。調査区は第72次調査と第217次調査（1990年）の両調査区に挟まれる。調査面積は東西34m、南北14mの476m²である。調査は2014年1月7日に開始し、3月18日に終了した。なお、概要是『紀要2014』で報告している。

2地形と基本層序

第一次大極殿院地区は、奈良山丘陵の尾根筋に位置し、北から南へならかに傾斜する。今回の調査区は、磚積擁壁SX6600の南方約20mの中軸線付近に位置し、2010年の大極殿復原にともなう整備によって、現況の調査前の地形も緩やかに南に傾斜していた。

基本層序は、地表から整備にともなう盛土、旧地表面、耕作土、底土、包含層、Ⅱ期棟敷層、Ⅱ期の整備にともなう整地土、Ⅰ期棟敷層、地山の順である。部分的にⅠ期造成前の地形を均すための整地土が地山上にみられる。遺構検出は包含層を取り除いたⅡ期棟敷層でおこない、一部これを掘り下げ、Ⅰ期棟敷層および整地面で検出した。なお、第一次大極殿院の中軸付近では、大正期の石積み護岸の溝（以下、大正水路とする）によって深く掘削されているため、この範囲では、地山あるいはⅠ期造成前の整地面で検出をおこなった。

3検出遺構

今回の調査では、主にⅡ・Ⅲ期の遺構を中心に検出し、

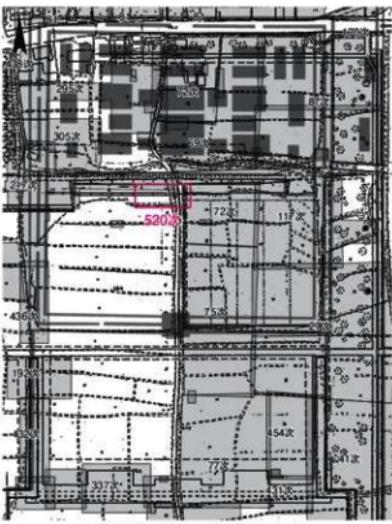


図187 第520次調査区位置図 1:3000

一部、Ⅰ期およびそれ以前の遺構を確認している。以下、古い時期の遺構から順に記す。

I期以前の遺構

南北溝SD19749 調査区の西北部の排水溝および調査区南端のサブトレーナーの断面で確認した素掘りの南北溝。地山あるいはⅠ期の造成以前の整地土の上面から掘り込んでおり、Ⅰ期の棟敷広場SH6603Aに覆われる。第一次大極殿院の造営にともなう遺構の可能性がある。

I期の遺構

棟敷広場SH6603A 磚積擁壁から第一次大極殿院の南面築地回廊まで広がる棟敷広場。今回の調査区では、主に排水溝や断面調査の断面で確認し、第一次大極殿院の中軸付近で、部分的にⅡ期の棟敷をはずして検出した（図190）。調査区の大半で、元の地形の上に直接、径約3～5cmの棟を敷いており、一部、元の地形の窪む部分では整地が確認できる。棟敷は良好に遺存するところで、約10cmの厚さが確認できるが、失われている部分も多い。調査区全体で、南に向かって緩やかに傾斜し、南に向けて排水したと考えられる。

南北通路SF19751・南北通路西側溝SD19750 SD19750は調査区西北部の排水溝の断面および東西溝SD7132の底面で確認した素掘りの南北溝（図191・192）。幅約1.5m、深さ約15cm。第一次大極殿院の区画中軸を挟んだ対称の

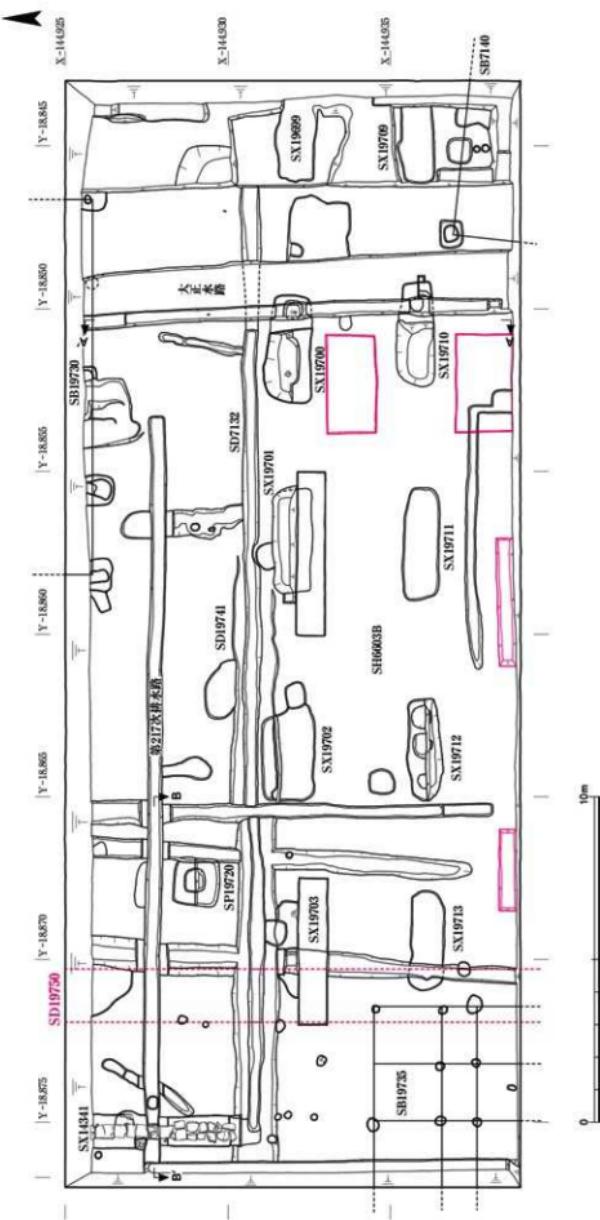


图188 第520次调查区遗构图 1:150

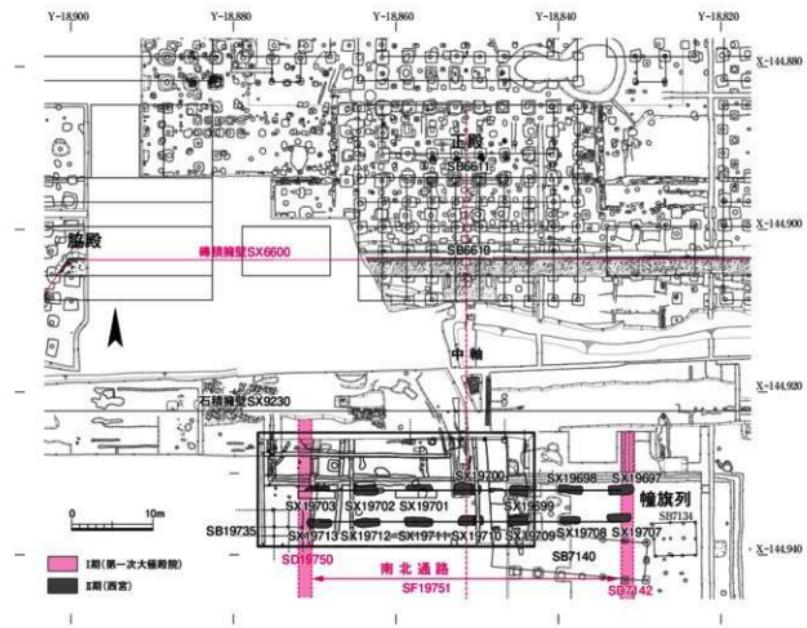


図189 第520次調査区と周辺の遺構 1:600



図190 I期礎敷広場SH6603Aの平面検出(西から)



図191 西側溝SD19750(北から)

位置で、同様の南北溝SD7142を検出してお（第72次調査）、これを第一次大極殿院南門から大極殿へ至る幅約38mの南北通路の東側溝と想定していた。今回、検出したSD19750は西側溝にあたり、両側溝を検出したことで、南北通路SF19751の存在が確認された。南北通路の幅は約38.5m (130尺)。SD19750は礎敷広場SH6603Aの礎敷の上面から掘り込んでおり、通路部分とそれ以外の部分で舗装の違いは確認できない。またII期の整地上が溝埋土の直上にあることから、I期の間は存続していたと考えられる。なおSD19750は磚積擁壁の斜路南端部よりも北方で確認しており、この点は大極殿院の中軸および磚積擁壁の上下の動線を示す重要な知見である。

II期の遺構

礎敷広場SH6603B 石積擁壁SX9230から西宮の南面築地回廊SC3810まで広がる礎敷で、調査区全体で良好

に遺存する（図194）。調査区の大部分で、I期の礎敷上に、厚さ約5cmの整地を施し、その上にさらに径5cm程度の礎を約5~15cmの厚さで敷く。調査区西部の一部では、I期の礎敷上に、II期の礎敷が直接敷かれる。南に向かって緩やかに傾斜しており、南に向けて排水したと考えられる。なお、III期の礎敷は確認できず、II期のものを踏襲したと推察される。

権旗柱穴SX19697~19703・19707~19713 調査区のはば中央で検出した、東西5基、南北2列に並ぶ柱穴列（図194）。第72次調査とあわせて、各列7基ずつであることが確定した。柱間寸法はともに約5.9m (20尺) 等間で、南北の柱穴列の間隔は、約38m (13尺)。7基の中央にあたる柱穴SX19700・19710は、ほぼ区画の中軸線上に位置する（図189）。

柱掘方は東西に細長い楕円形で、大きさは北側の柱穴

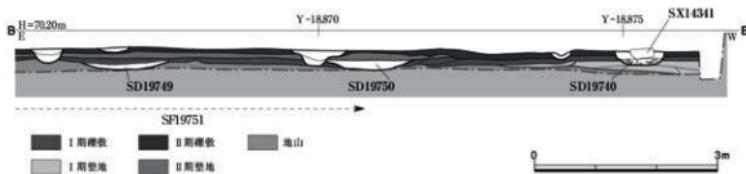


図192 第217次排水溝南壁土層図 1:80

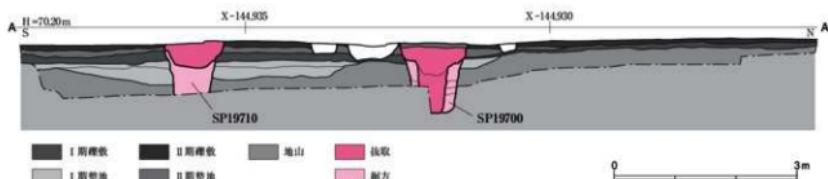


図193 大正水路西壁土層図 1:80



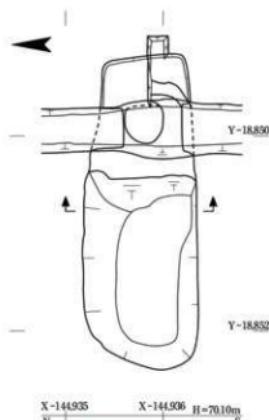
図194 権旗柱穴列とII期耕牧広場SH-16603B(東から)



図195 権旗柱穴SX19700断面(東から)



図196 権旗柱穴SX19710断面(西から)



X-144,935 X-144,930 H=70.10m
N S



図197 権旗柱穴SX19700断面(北から)



図198 権旗柱穴SX19700断面(北東から)

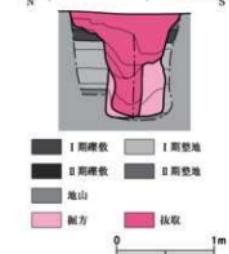


図199 権旗柱穴SX19700断面 1:50

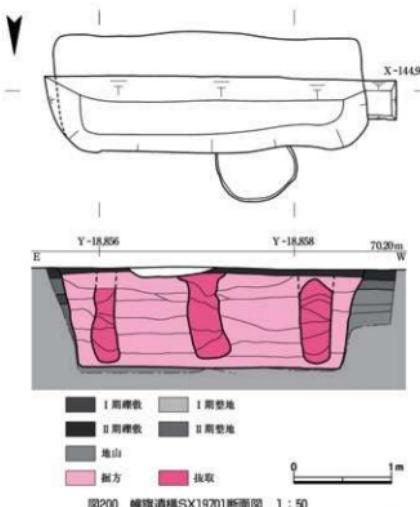


図200 権旗遺構SX19701断面図 1:50

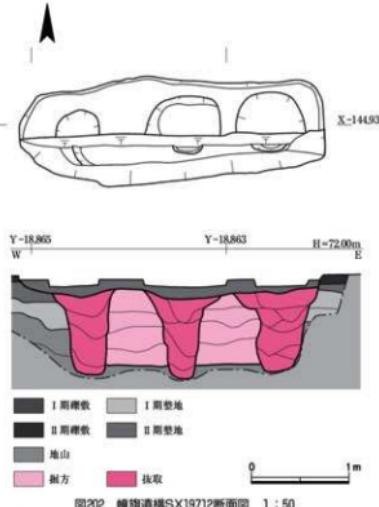


図202 権旗遺構SX19712断面図 1:50



図201 権旗遺構SX19701断面（北東から）



図203 権旗遺構SX19712断面写真（南から）

列で東西約3.0m、南北約1.2m、南側の柱穴列で東西約3.0m、南北約1.0mを測る。断層調査から、掘方の深さは約1.0mで、各柱穴の柱掘方の底面がほぼ掘り下（図199・200・202）。各柱掘方は3つの抜取穴を有し、それぞれの抜取穴の間隔は約1.0m、柱抜取穴から想定される柱径は約25~30cmである。掘方部分・抜取部分とともに、礫敷の上面から約5cmの深さまで埋め戻し、これより上は礫で埋めており、再舗装と考えられる。なおSX19697~19703・19707~19713のいずれの柱穴においても、複数回の掘方・抜取穴は確認できない。

南北の柱穴で掘方の埋土に違いがみられ、北側の柱穴SX19700・19701では、掘方の埋土が砂質であるのに対し、抜取穴の埋土には、径約5cmの礫が多く詰まる。一方、南側の柱穴SX19710・19712の抜取穴には、柱穴SX19700・19701と同様に径約5cmの礫が多く詰まるが、掘方は粘性の高い埋土である。

また掘方と柱位置の関係にも特徴の違いがみられる。南側のSX19710では、掘方の北壁や東西の壁に接する位置に柱を立てるが、北側のSX19700では掘方の壁から離して柱を立てている（図195・196）。

また柱穴SX19700では掘方内の西脇柱部分に段が確認でき、これは構築物の設置のために設けられた作業場の可能性がある（図197・198）。

これまで、南北2列の柱穴SX19697~19703・19707~19713を一連の遺構と考え、棟敷状の遺構SB7141と解釈してきたが、上記のように、南北の柱穴列は特徴を異にする点も多く、一連の遺構ではなく、後述するように、これらは、元日朝賀において立てられた3本の宝幡と四神旗、計7本の幡と旗（幡）（以下、幡旗）の遺構の可能性が極めて高い。

なお幡旗柱穴SX19697~19703・19707~19713は同じII期の礫敷面から掘り込んでおり、両者の先後関係は不



図204 柱穴SP19720断面図 1:50

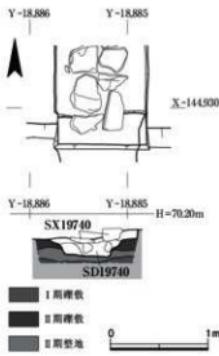


図205 石敷列SX14341・南北溝SD19740断面図 1:50



図206 石敷列SX14341と南北溝SD19740 (南から)

明で、年代指標となりうる遺物も出土していない。

柱穴SP19720 調査区の西北部で検出した掘立柱の柱穴。柱掘方は一辺約1.5mの隅丸方形で、深さは約30cm。柱の部分のみ約80cmの深さとする(図204)。現状、これと組み合う柱穴を検出しておらず、区画中軸線を挟んだ対称位置においても、同様の遺構は確認できない。幢旗など単独の柱による構築物の可能性も推察されるが、その詳細は不明である。

Ⅲ期の遺構

石敷列SX14341 調査区の西北部で検出した凝灰岩の切石の石敷列で、今回の調査区で約4m分を検出し、第217次調査とあわせ、総長5.4mとなった(図205・206)。凝灰岩の幅は約50cmで、二上山産と春日山地獄谷産と推定される。一部の凝灰岩には、石敷列には不必要的欠き込みがあり、基壇の羽目石などを転用した可能性がある。

区画の中軸を挟んだ対象の位置で、安山岩の石敷列SD7133を検出しており、「平城報告X-I」・「平城報告X-VII」では、これを東側溝・SX14341を西側溝、両溝間を内庭中央通路SF14342と解釈し、遺存する凝灰岩や安山岩は石組溝の底石で、側石は失われているとしてきた。しかし、Ⅱ期の礫敷広場SH6603BよりもSX14341の凝灰岩上面の標高がやや高いこと、Ⅱ期の礫敷上にⅢ期の礫敷の舗装が確認できること、据付掘方に凝灰岩粉がほとんどみられないことから、側石をともなう石組溝の底石の可能性は考え難い。

また後述の南北溝SD19740と関連し、溝の蓋石の可能性も想起しうるが、SX14341の据付掘方がSD19740を壊しており、南端から約2m部分は幅約20cmの凝灰岩が2列に並び、かつ下層の溝のほうが凝灰岩より幅が広いことから、蓋石の機能を果たし難く、この可能性も考えにくく(図205・206)。このほか、区画や中央通路を示すため

の設備などの可能性もあるが、いずれも決め手に欠く。

南北溝SD19740 調査区の北西部、石敷列SX14341の下層に幅約40cm、深さ約15cmの素掘りの南北溝を確認した(図205・206)。調査区の北方へ延びると推定される。径3~5cmの礫が詰まる状況が確認できるが、Ⅱ期の礫敷との区別は明瞭ではないため、人為的に礫を詰めた礫詰暗渠であるのか、素掘りの開渠に礫が入り込んだのかについては判然としない。

東西溝SD7132・7141 調査区のほぼ中央で、第72次調査で検出した素掘りの東西溝の延長を約33mにわたって検出した。幅約40cm、深さ約15cm。南北溝SD19740と接続する可能性がある。SD19741の直上に、幅約1.4m、深さ約10cmの素掘りの東西溝SD7132が位置する。調査区東半のSD7132付近の包含層から、幅約50cmの凝灰岩の切石が出土しており、凝灰岩の据付溝とみられる遺構が一部確認できることから、SD7132上の石敷列SX14341と同様、凝灰岩が敷かれていた可能性も考えうる。

掘立柱建物SB7140 第72次調査で桁行6間分を検出していた東西棟掘立柱建物の延長を、調査区の東南部で検出した。柱間寸法は桁行約2.7m(9尺)等間、梁行約2.4m(8尺)等間。今回の調査で北西隅の柱穴を検出し、建物規模が桁行7間、梁行2間と確定した。

掘立柱建物SB19735 調査区の西南部で検出した東西3間以上、南北2間以上の掘立柱建物。柱間寸法は均一ではなく、柱穴は径約30cmの小さい円形で、浅く、仮設建物と考えられる。中軸を挟んだほぼ対称の位置で、同様の仮設とみられる掘立柱建物SB7134を検出している。

掘立柱建物SB19730 調査区の東北部で検出した東西4間の掘立柱建物。柱間寸法は約3.0m(10尺)等間。調査区の北方に展開すると推定されるが、塀の可能性もある。

(海野聰)



図207 第520次調査出土火打金 2:3

4 出土遺物

遺物包含層から鉄製の火打金1点、鉄角釘2点、耕作溝から鉄角釘1点が出土した。鉄角釘はいずれも頭部が欠損する。図207は火打金と考えられ、薄い鉄板を台形状に整形する。左側面がやや内縫みだが、錯彫りにより判然としない。幅4.7cm、高さ3.0cm、厚さ0.3cm。平城宮および京での火打金の類例は、内裏東方の基幹排水路SD2700（「昭和61年度 平城概報」）や西一坊訪問路西側溝SD920¹¹⁾にある。（芝原次郎）

土器・土製品は、整理用コンテナ2箱分の土器が出土した。奈良時代の須恵器・土師器と中世の土師器・瓦器が大半である。各遺構からは須恵器・土師器の細片が少量出土したのみで図示し得るものはない。耕作溝からは瓦器や土師器小皿が出土しており、中世には耕地化していたことがうかがえる。（青木 敬・小田裕樹）

瓦筒類・凝灰岩が少量出土したが、特筆すべきものはみられない。（今井晃樹）

5 帰旗の遺構について

SX19697～19703・19707～19713については、第72次調査から『平城報告XVII』までの解釈と異なる知見を得たため、これまでの解釈の概略を述べ、今回、新たに帰旗の遺構と判断するに至った論拠を提示したい。

既往の遺構解釈

第72次調査において、東西に長い楕円形の遺構が東西に3基、南北2列並ぶことが確認された。当時は他に類似した発掘事例がなく、2列の柱穴が組み合った棟敷風の遺構SB7141と解釈し、時期もⅡ期・Ⅲ期のいずれとも決め難いとしつつ（『平城報告XII』）、Ⅲ期の南北溝SD7231および東西溝SD7132に開まれることから、これらを一連の遺構と解釈し、Ⅲ期としてきた。

今回の調査により、SD7132が石数列SX14341より西に延びず、SD7131・7132が柱穴列SX19697～19703・19707～19713を取り囲まないことが確認され、これらの遺構を一連と捉えることに対し、再考の必要が生じた。加えて、東西溝SD7132（Ⅲ期）と柱穴SX19697～19703の間隔が約0.4mと非常に近く、同時併存の蓋然性が低いことからも、時期を異にすると考えられ、SX19697～19703・

表28 第520次調査出土瓦類一覧

軒丸瓦	軒平瓦	その他
型式	種類	点数
型式不明(奈良)	C	1
軒丸瓦計	軒平瓦計	その他の計
重量 点数	6.35kg 421	27.624kg 35
軒丸瓦	甲瓦	凝灰岩
重さ	20.08kg	1
点数	421	1

19707～19713はⅡ期の遺構と解釈するのが妥当である。

文献資料・絵画資料による確旗

『延喜式』によると、元日朝賀には、大極殿からみて、中央に鳥形の轍、左（東）側に日像の轍、さらに朱雀・青龍の旗、右（西）側に月像の轍、さらに白虎・玄武の旗、合計7本の轍旗を立てるとされる。また轍旗の柱の相互間隔は「二丈許」（約6m）と定められる。これらの『延喜式』に記された轍旗の数、相互の間隔は、SX19697～19703・19707～19713と一致する。このほか、『続日本紀』にも大宝元年（701）の元日朝賀の際に藤原宮で同様の7本の轍と轍（旗）を立てたという記述が確認でき、8世紀には元日朝賀において轍や轍（旗）を立てる儀式が成立していたと考えられる。

また、院政期の儀式の様子を反映していると考えられる『文安御即位調度図』（図208）には、中央の柱と2本の脇柱を持つ構造の轍旗が描かれ、高さは「三丈」（約9m）と伝える。この3本の柱をもつという特徴も、SX19701・19712で確認された、3つの抜取穴と対応する。

2時期の轍旗遺構

以上のことから、SX19697～19703・19707～19713は、文献や絵画資料の轍旗に関する記述や描写と一致する点が多く、2時期分の轍旗の遺構の可能性が極めて高い。また元日朝賀は大極殿で執りおこなうのが通例であるが、『続日本紀』によると、西宮において、天平神護元年（765）には称徳天皇が朝賀を受けており、神護景雲3年（769）には法王道鏡が大臣以下の拝賀を受けたことが確認できる。もちろん、これらの2回の儀式がSX19697～19703・19707～19713に直接、対応すると即断はできないが、西宮においても、元日朝賀がおこなわれたことを示している。

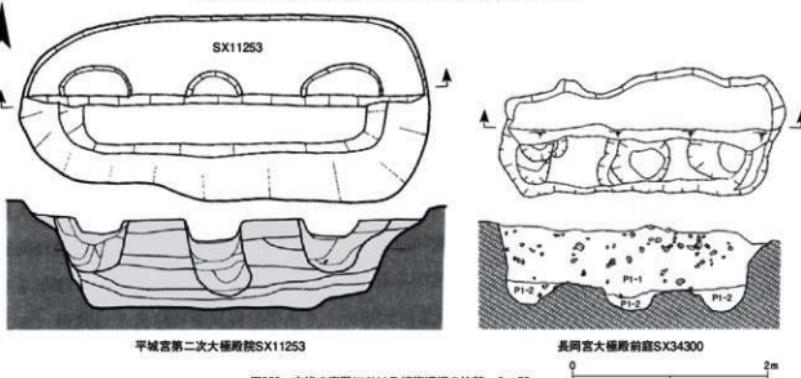
ただし、①西宮の概発掘調査区でSX19697～19703・19707～19713以外にⅡ期の轍旗の遺構が確認できないこと、②複数回の掘方や抜取穴が確認できないこと、③西宮における元日朝賀が特殊であり、それゆえ『続日本紀』に記載された可能性が考えられること、以上の3点を鑑みると、SX19697～19703・19707～19713は、『続日本紀』に記された2回の正月儀式に対応する可能性が高いと考えられる。

他の轍旗の遺構との比較

古代宮都における轍旗の遺構は、平城宮第二次大極



図208 宝幢・四神旗(帷旗)の姿(神宮文庫蔵「文安御部位圖度之図」による)



平城宮第二次大極殿柱穴SX11253

長岡宮大極殿前庭SX34300

図209 古代の宮殿における幡旗遺構の比較 1:50

殿院や長岡宮大極殿前庭で検出されている。それぞれの特徴を述べつつ、幡旗柱穴SX19697～19703・19707～19713との比較を試みたい。

平城宮第二次大極殿院(図209左) SX9151・9168・11259・11260・SX11252～11258が幡旗の遺構とされ、前者は第二次大極殿の四隅に位置し、光仁天皇の即位式にともなうもの、後者は大極殿の前に東西に並び、桓武天皇の即位式にともなうものとする。SX19697～19703・19707～19713は後者と特徴を一にするため、これを比較対象とする。SX11252～11258は、大極殿の基壇南端から23.6m(80尺)に位置する。柱掘方の規模は東西約4.0m、南北約2.0mで、相互の柱穴の間隔は一定ではなく、7.1m(24尺)～7.7m(26尺)。1つの掘方に3つの抜取穴が確認できる。断面観察によると柱穴ごとに掘方の深さが異なり、中央柱のみやや深い。中央の柱と脇柱の間隔は約1.25mである。また、ともに掘方の底面まで抜取穴が延びず、掘方底面に直接柱を立てた形跡はみられない。

長岡宮大極殿前庭²⁾(図209右) 大極殿の基壇南端から29.5mに位置する。柱掘方の規模は東西約3.0m、南北約1.1mで、相互の柱穴の間隔は約6.0m(20尺)等間。確認された掘方の深さは約60cmで、掘方の底面は平坦ではな

く、柱位置のみ窪んでいる。掘方の大半に礫が詰まっている。抜取穴は掘方の底面でのみ確認したと報告されており、掘方に詰まる礫は礫敷のものと判断している。中央柱と脇柱の間隔は約1.0～1.2m。また幡旗が複数回立てられた痕跡はうかがえないとする。

比較 平城宮第二次大極殿院の遺構は、即位に関わる一時的・仮設的なもの、長岡宮の遺構は、元日朝賀にともなうと解釈されている。いずれの幡旗の遺構においても、複数回の幡旗柱穴の掘削は確認できない。

今回の調査で検出した2時期の幡旗遺構SX19697～19703・19707～19713は、西宮という場所の特殊性を考慮する必要はあるが、元日朝賀などの儀式にともなうものと考えられる。位置を逆えて2ヶ所に設置しており、また抜取穴より復元される柱径が約25～30cmと細いことから、幡旗を支える常設の構築物の設置は考え難い。

一方、長岡宮の遺構では、個別の柱の抜取穴がみえず、掘方の底部にのみわずかに残る。この点から、中央柱・両脇柱を個別に抜き取ったのではなく、3本セットで柱を抜き取った可能性、あるいは幡旗を固定するための常設の構築物を抜き取った可能性が考えられる。



図210 第520次調査区全貌（南から）

幢旗の施工に関する一考察

幢旗柱穴SX19697～19703・19707～19713の遺構の特徴をもとに、幢旗の施工について一考を案じたい。まず、柱穴を布振りとする点は、中央の柱と脇柱の間隔を一定とし、東西方向の誤差に対応させる目的が考えられる。すなわち、3本の柱の間隔は、柱を相互に繋ぐ横枠材によって定まっており、これを調整した上で、掘方が埋められたと推察できる。また抜取穴から想定される中央柱の間隔は約5.9m(20尺)等間で、その施工精度は高い。

次に柱穴の底面の標高を揃える点は、地表からの掘削深度を一定とすることで、柱の下部の高さ調整を省力化し、幢旗の頂部の高さを揃えるための工夫と考えられる。3本の柱が横枠材などにより固定された状況の場合、柱の底部の高さ調整は特に困難であり、柱穴の底面の標高を揃えることは有効な方法であろう。

また南側の柱穴SX19710・19712をみると、掘方の壁に接して柱を立てるが、これは南北・東西方向の柱位置調整の省力化と柱位置の限定による掘削範囲の縮小のための工夫と考えられる。さらに南北の柱穴列で、中央柱と脇柱の間隔、柱穴の掘削深度がほぼ等しい状況から、同じ幢旗を使用した可能性や幢旗の形状が定型化していた可能性も想定できる。なお、第二次大極殿院と西宮の遺構で中央柱と脇柱の間隔が異なるが、第二次大極殿の遺構の抜取穴は大きいため、西宮と同じ幢旗を使用したとしても、遺構解釈に齟齬は生じない。また抜取後の再舗装の範囲は掘方とほぼ位置を違えていない。ここから掘方の掘削から抜取・再舗装までの時間的近接、すなわち幢旗の仮設性・一時性がうかがえる。加えて裸敷の再

舗装は広場の裸敷舗装に対する維持・復旧に対する配慮の表れであろう。

6まとめ

今回の調査によって得られた主な知見は、Ⅰ期（第一次大極殿院）の南北通路とその西側溝、Ⅱ期（西宮）の大規模な造成、Ⅱ期（西宮）の幢旗の遺構の3点である。

Ⅰ期における南北通路の発見は、大極殿の区画における中軸線や大極殿と大極殿院南門までの動線を考える上で、重要な知見である。加えて、宮城における中軸線の重要性を示すものと考えられる。また古代宮殿の元日朝賀に関わる幢旗の遺構は、長岡宮大極殿前庭において確認されてきたが、今回の調査において西宮の区画で検出したことにより、大極殿院以外の場所で元日朝賀がおこなわれたことが考古学的に示された。さらに検出した遺構が『延喜式』に記載される柱間寸法と一致し、「文安御即位調度図」に描かれた中央柱と2本の脇柱を有する構造と特徴を同じくしていた。なお、今回あきらかとなった幢旗の様相は、あくまで奈良時代後半のものであり、奈良時代前半以前の様相については、藤原宮中枢部の発掘成果に期待したい。

（海野）

註

- 1) 奈文研『平城京右京八条一坊十一坪 発掘調査報告書』1984.
- 2) 財団法人向日市埋蔵文化財センター『長岡宮「北苑」・宝幢遺構』2005。

図版出典

- 図209左図：『平城報告 XIV』、50頁、Fig.24。
右図：注2) 前掲書、100頁、第56図。

平城宮東北官衙地区の調査

—第542次

は計272m²となる。調査期間は2014年10月14日から11月27日までである。なお、調査の目的に鑑み、排水溝部分などを除き、断面調査は必要最小限にとどめた。

1 はじめに

この調査は、国土交通省による平城宮跡歴史公園工事関連施設（平城宮第一次大極殿跡地回廊の復原整備のための工事ヤード）造成・建設にともなうものである。

同施設は、旧耕土とその上面の表土が露出した現地表面に1～1.5mに及ぶ盛土造成をおこなった上で建設される予定であるが、平城宮東張り出し部北半（仮に東北官衙と呼ぶ）、ことに今回の予定地を含む県道谷田・奈良線より北側の内裏東大溝SD2700から東面大垣までの広大な空間については、調査事例がほとんどない。隣接する造酒司の存在からみて官衙ブロックが展開していたとみられるこの地域は、水上池のすぐ南に位置し、内裏・第二次大極殿院・東区朝堂院がのる尾根と東院・法華寺の位置する尾根に挟まれた谷筋の源頭部分にあたり、複雑に遺構が展開することが予測された。

このため約10,000m²の予定地のうち、木材保管庫と調整池予定部分の一部について、遺構面の高さなど遺跡の状況確認のための発掘調査が必要と判断された。調査はA区からF区までの6つの調査区を設けて実施した（図211）。A区とB区はそれぞれ東西20m南北4mの80m²、C区とD区はそれぞれ東西7m南北4mの28m²、E区とF区はそれぞれ東西4m南北7mの28m²で、総発掘面積

2 基本層序

今回の調査区における現地表面から奈良時代の遺構面までの深さは、平城宮跡における一般的な状況に比べて総じて浅く、遺物包含層もごく薄い。A・B・C・D区では、橙褐色礫土の地山面で遺構を検出した。E区では一部に整地土の黄褐色粘土が残る。これに対し、敷地西南隅のF区のみは様相が大きく異なる。遺物包含層が厚く残る上に、全面に整地土とみられる橙褐色粘土の整地土が堆積する。以下、調査区ごとに概要を述べる。

A区 表土・耕土・床土直下に薄い遺物包含層があり、その下の現地表面から約25～35cmの深さで橙褐色礫土（地山）の奈良時代の遺構面となる。遺構面の標高は、70.10～70.20mである。

B区 表土・耕土・床土直下に薄い遺物包含層があり、その下の現地表面から約25～40cmの深さで、橙褐色礫土（地山）の奈良時代の遺構面となる。遺構面の標高は、69.70～69.90mである。なお、調査区中央には水田境界にともなうとみられる南北方向の約20cmの段差がある。

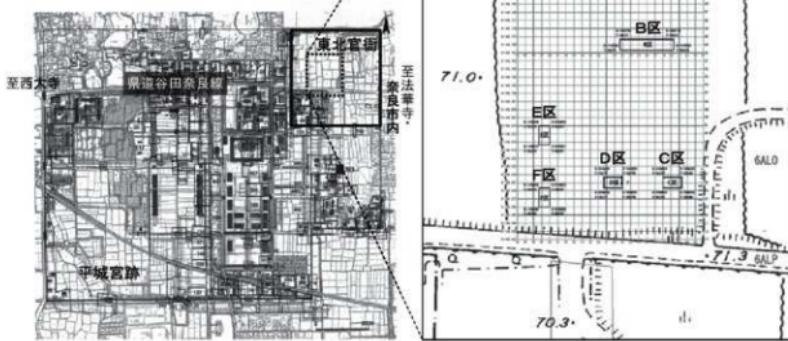


図211 第542次調査区位置図

C 区 表土・耕土・床土直下に薄い遺物包含層があり、その直下の現地表面から約30cmの深さで、橙茶褐色粘土（地山）の奈良時代の遺構面となる。遺構面の標高は約69.35mである。

D 区 表土・耕土・床土直下に薄い遺物包含層があり、その下の現地表面から約30~40cmの深さで、橙褐色礫土（地山）の奈良時代の遺構面となる。遺構面の標高は約69.35mである。

E 区 表土・耕土・床土直下に薄い遺物包含層があり、その下の現地表面から約35~50cmの深さで、黄褐色粘土（整地土）または橙褐色礫土（地山）の奈良時代の遺構面となる。遺構面の標高は約69.40mである。

F 区 表土・耕土・床土の下に、奈良時代の土器を多量に含む遺物包含層（厚さ約20cm）があり、その下の現地表面から約0.6~0.7mの深さで、橙褐色粘土（整地土。厚さ約20cm）に達し、その下が灰色礫土（地山）となる。奈良時代の遺構は橙褐色粘土（整地土）上面（標高69.10~69.20m）で検出したが、一部遺構の稀薄な北から約2.5m分については、灰色礫土（地山）の面まで掘り下げて、下層の遺構の存在を確認した。下層遺構の検出面の標高は約68.95mである。

3 検出遺構

A 区

主な検出遺構には、柱穴8基、南北溝1条、性格不詳の土坑1基がある（図214・217）。また、排水溝の断面でSP19773・SP19793（図212）など柱穴の可能性のある落ち込みを6ヵ所で確認した。柱穴と認識している穴と組み合ひそうなものもあるが、いずれも一部のみの検出で大きさや位置を確定しがたいため、建物と認めるには至らなかった。遺存する深さは0.6mに達するものもあったが、確認できる柱穴の多くは30~40cm程度であり（一辺1m近い柱穴でも同様）、遺存する深さの2倍以上あったものが削平を受けた可能性を考える必要があろう。

土坑SK19755 調査区東端で検出した、一辺約1.5mの隅丸方形の性格不詳の土坑。断面の結果、約20cmで地山面を確認し、浅い皿状を呈することがあきらかになった。

柱穴SP19773 調査区北端西寄りで一部を検出した柱穴で、柱は抜き取られている。掘方は一辺1mを越える規模をもつ。抜取から軒丸瓦6282Baが1点出土した。

南北溝SD19775 調査区西寄りで検出した奈良時代と考えられる溝で、幅約0.7m、深さは約20cm遺存していた。第一次大極殿創建時の軒丸瓦6284Cが1点出土した。

B 区

主な検出遺構は、掘立柱建物2棟、掘立柱塀1条、斜行溝1条、性格不明の土坑などである（図215・218）。

掘立柱建物SB19795 調査区東北隅で検出したもので、近代の溝により輪郭を失っているが、一辺約1mの方形の掘方をもつとみられる。柱間約2.7m（9尺）で並ぶ2基の柱穴を確認し、これより西へは続かない。棟の方向は決めがたいものの、一応建物の西南隅部分と考えておく。掘方の遺存する深さは検出面から約30cmと浅い。東側の柱穴の抜取から、軒丸瓦6282Baが1点出土した。

東西櫛掘立柱建物SB19800 調査区中央から西に続く柱穴列で、5基4間分を検出した。掘方は南北約1.5m、東西約1.2~1.5mに及ぶ、全体としてやや南北に長い隅丸方形で、柱間は約3m（10尺）等間。柱はすべて抜き取られている。深さは検出面から約0.8mで、上部40~50cm程度の削平を受けているとみられる（図213）。東側で検出したSP19803と一連の可能性があるが、柱間がやや広く、また南にずれるので、4間分とみておく。また、建物のどの部分かは厳密には特定できないが、水田の段差なども考慮して、一応北側へ展開すると考えておく。距離からみて、SB19795とは併存しないとみられる。

東西溝SA19810 SB19800の柱穴の東にこれと並ぶようく検出した柱穴列。水田の境を限る東西溝SD19801の底で、3基2間分を検出した。柱間は約3m（10尺）で、南北約0.6m、東西約0.5mのやや南北に長い掘方をもつ。掘方の規模の割りに柱間が広く、東西方向の塀とみておく。SD19801によって壊されているため、さらに西に延びていた可能性も充分考えられ、SB19800にともなう足場穴などの機能を想定することも可能であろう。

性格不詳遺構SX19796 調査区東端で検出した性格不詳の土坑状の遺構。東西約0.9m以上、南北約1.5m以上、深さは検出面から約25cm遺存する。

性格不詳遺構SX19830 調査区西南隅で検出した性格不詳の土坑状の遺構。東西約1.1m以上、南北約1.7m以上、深さは検出面から約25cm遺存する。

斜行溝SD19809 調査区中央を北東から南西方向に横切る溝。重複関係からみて奈良時代よりも古い時期の遺

構の可能性がある。幅約40cm、遺存する深さは約15cm。
東西溝SD19801 調査区を東西に縱断する溝。水田境界の段差の下面に沿って延びる近世以降のものであろう。幅約40~60cm、遺存する深さは約30~50cm。

東西溝SD19802 調査区北端を縱断し西端は北に折れる可能性のある近代の溝。西で北にやや振れている。法面を確保せず直に掘り込んでおり、掘り込み面から0.8m以上、遺構検出面からでもさらに40~50cmまで達することを確認したが、周辺の遺構保全を考えて完掘を避けたため性格は不詳。礎混じり土で堅く突き固めている部分と耕土を無造作に入れている部分とがある。電気系統など、何らかの埋設用の掘方か。

C 区

主な検出遺構は、掘立柱の柱穴とみられる遺構3基、土器廃棄土坑1基で、ほかに小穴多数を検出したが、いずれもまとまらない(図216・220)。遺構の状況や、奈良時代の遺構検出面で耕作溝をあわせて検出している状況から考えると、奈良時代の遺構はかなりの削平を受けているとみられる。なお、排水溝での断面観察によると、遺構検出面の下位において、東院中枢部の調査(第401次調査など)でも確認された細かな竪状の堆積がみられ、版塗土の可能性も考慮したが、地山の自然堆積と判断した。東院中枢との類似は、少なくともC区が谷筋からやや東に外れた位置にあることを意味しよう。

柱穴SP19840 調査区東部で検出した柱穴。掘方は東西約0.6m、南北約0.8m。柱は抜き取られている。

柱穴SP19850 調査区北部中央で検出した柱穴。掘方は東西約0.6m、南北約0.8mで、柱は抜き取られている。掘方は揃わないが、抜取はSP19840と約2.7m(9尺)の間隔で東西に並ぶため、一連の建物の可能性もある。

柱穴SP19860 調査区西南部で検出した大型の柱穴。東西約1.1m、南北約1.3mの南北にやや長い方形の掘方をもつ。柱は抜き取られているとみられる。

土坑SK19855 調査区南辺で確認した土坑で、東西約1m、南北は1m以上で調査区外に展開する。遺存する深さは約10cmと浅い。

D 区

主な検出遺構は、掘立柱建物1棟、単独の柱穴2基で、ほかに四周の排水溝の断面で、柱穴の可能性のある落ち込みを4ヵ所確認している(図221・224)。

掘立柱建物SB19870 南側柱筋または南廂の東南隅部分とみられる柱穴2基を検出した掘立柱建物。後述のように、東面にSD19871、南面にSD19872がめぐることから、建物と判断した。溝までの距離は東面の方が長く、どちらかといえば南北棟の可能性が高いが、SD19872の南限が確定できないため、溝心位置が決められず、東西棟の可能性も否定はできない。掘方は一辺約1.3mの隅丸方形で、柱はいずれも抜き取られている。西排水溝での断面観察によれば、遺存する深さは約0.6mで、本來の深さの半分程度の削平を受けているとみられる(図219)。

南北溝SD19871 SB19870の東雨落溝と考えられる素掘りの南北溝。幅約0.6~0.7m、深さ5~10cm程度が遺存する。SB19870東端から溝心までの距離は約1.5m。調査区南端で東西溝SD19872に接続するが、T字に接続してさらに南に延びる可能性もある。

東西溝SD19872 SB19870の南雨落溝と考えられる東西溝。南限は調査区外となり、幅約1.1m以上、深さ約10cmが遺存する。東端はSD19871と接続する。

柱穴SP19873 調査区東北隅で検出した柱穴、掘方は一辺約80cmの方形。柱は抜き取られている。

柱穴SP19875 調査区西南隅のSD19872の底で検出した柱穴。調査区外に続く。掘方は一辺約0.7m以上の方形。遺存する深さは約20cmで、底面の標高はSB19870の柱穴より約40cm浅い。柱は抜き取られているとみられる。

E 区

主な検出遺構は掘立柱建物1棟で、ほかに北面の排水溝の断面で、柱穴1基を確認している(図222・226)。

総柱掘立柱建物SB19890 調査区南半で検出した総柱の掘立柱建物。方形に並ぶ柱穴4基を検出した。掘方は一辺約1mの不整方形で、柱はすべて抜き取られているとみられる。深さは約0.6~0.7m遺存する(図225)。柱間は東西方向が約2.1m(7尺)、南北方向は約1.95m(6.5尺)で、南、および東西(またはそのいずれか)に展開し、倉庫の可能性がある建物の北端の一部と考えられる。

F 区

橙褐色粘土の整地土面で検出した主な遺構としては、溝1条と、調査区南西隅部分に集中する4基の掘立柱の柱穴があるが、近接しており建物としてはまとまらない(図223・227)。

東西溝SD19921 調査区中央で検出した東西溝。幅約

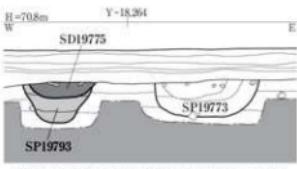


図212 第542次調査A区北壁土層図(部分) 1:50

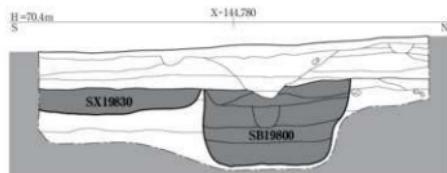


図213 第542次調査B区西壁土層図 1:50



図214 第542次調査A区全景(東から)



図215 第542次調査B区全景(西から)



図216 第542次調査C区全景(東から)

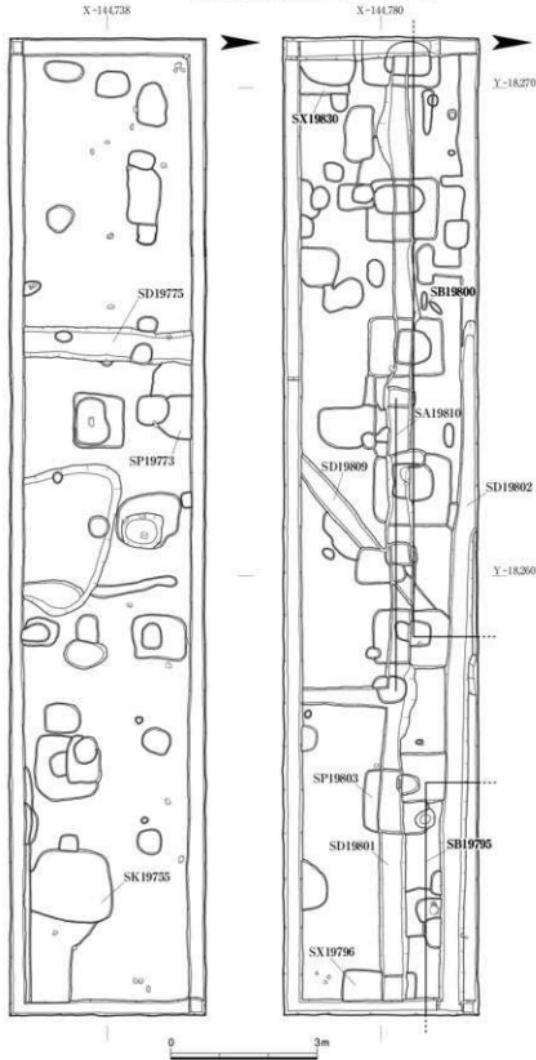


図217 第542次調査A区遺構図 1:100

図218 第542次調査B区遺構図 1:100

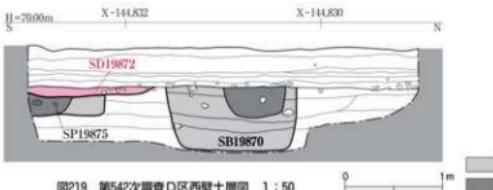


図219 第542次調査D区西壁土層図 1:50

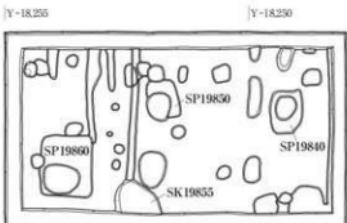


図220 第542次調査C区遺構図 1:100

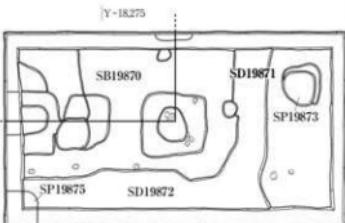


図221 第542次調査D区遺構図 1:100

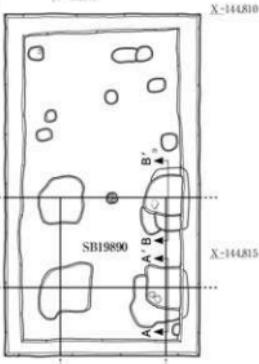


図222 第542次調査E区遺構図 1:100

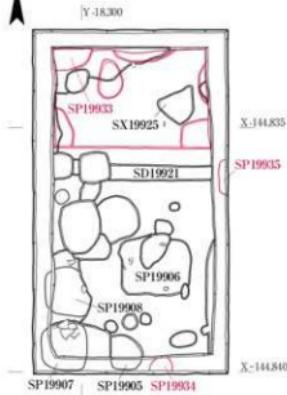


図223 第542次調査F区遺構図 1:100



図224 第542次調査F区全景(東から)

A X-144.816 H=69.60m A'

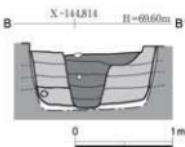


図225 第542次調査E区柱穴断面図



図226 第542次調査E区全景(東から)



図227 第542次調査F区下層掘り下げ後の全景(北から)

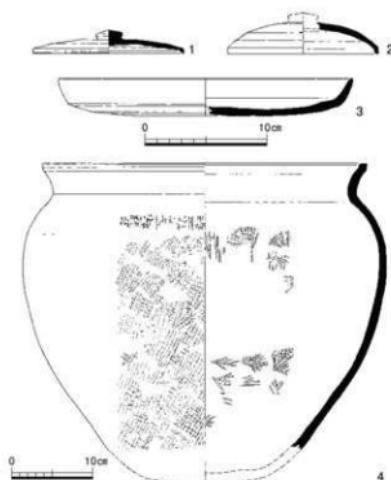


図228 第542次調査出土土器 1:4 (4は1:6)

30cm、遺存する深さは約5cm。

柱穴SP19905 調査区南辺中央で検出した一辺約0.7mの不整形方形の掘方をもつ柱穴。遺存する深さは約0.5m。

柱穴SP19906 調査区南部中央で検出したもので、東西約1.4m、南北約1.2mの掘方をもつ。

柱穴SP19907 調査区西南隅で検出した。掘方は一辺約1mの隅丸方形。深さは約0.6m遺存する。抜取に多量の甕の破片や軒平瓦6721Cが1点投棄されていた。

柱穴SP19908 SP19907の北に隣接する一辺約1mの不整形方の掘方をもつ柱穴。遺存する深さは約0.5m。

次に、地山の灰色礫土の面で検出した下層の遺構には、柱穴の可能性のある穴3基（うち2基は排水溝とその断面で確認）のほか、凹み状の落ち込み多数がある。下層部分の調査面積が狭小であるため、遺構としてまとまるものは確認できなかった（図223）。
（渡辺晃宏）

4 出土遺物

土器・土製品 整理用コンテナ10箱分の土器が出土した。奈良時代から近世までの土器が出土したが、大半は奈良時代の須恵器・土師器である。特に須恵器甕類の破片が多く出土している点が特徴といえる。また、各遺構・遺物包含層からは奈良時代前半から末頃までの土器片が出土しており、奈良時代を通じて調査区周辺が利用されていたことを示唆する。この他、本調査区からは墨書き土器2点、蹄脚円面鏡の脚部1点、須恵器杯B蓋転用鏡11点、甕転用鏡1点が出土した。図228の1・2はB区の掘立柱建物SB1980東南隅の柱穴出土の須恵器杯B蓋。

表29 第542次調査出土瓦磚類一覧

軒丸瓦		軒平瓦		その他	
型式	種類	点数	型式	種類	点数
6225	A	1	6721	C	3
6282	Ba	2	型式不明		1
6284	C	1			
軒丸瓦計		軒平瓦計		その他	
丸瓦	平瓦	磚		凝灰岩	レンガ
重量	23.475kg	62.166kg	0	0	0
点数	222	786	0	0	0

頂部から緩やかに口縁部が降り、口縁端部を丁寧に折り曲げる。奈良時代前半から中頃までに位置付けられる。

3はF区遺物包含層出土の皿A。精良な胎土で灰白色の色調を呈する。内外面に火拂痕が残る。底部外面に墨書きがある。4はF区の柱穴SP19907から出土した須恵器甕B。軟質の焼成で、内面に放射状の刻線を施した当時の痕跡が残る。F区からは遺物包含層も含めて多くの須恵器甕片が出土した。
（小田裕樹）

瓦磚類 概要は表29に示す通りである。軒瓦7点はいずれも奈良時代のもので、出土地点の内訳は、A区の柱穴SP19773抜取とB区の掘立柱建物SB19795の東側の柱穴抜取から6282Baが各1点、A区の南北溝SD19775から6284Cが1点、A区遺物包含層とF区西南隅の柱穴SP19907（抜取）から6721Cが各1点、F区の遺物包含層から6225Aと型式不明の軒平瓦各1点となる。ヘラ書き平瓦はF区の性格不詳遺構SX19925出土。「×」ないし「+」とみられる記号状のもの。
（今井晃樹）

5 まとめ

内裏北外郭官衙から平城宮東北隅に至るこの地域では、從来ほとんど調査事例がなかった。この地域は平城宮の東張り出し部北半北寄りを占め、官衙施設が想定されていた（東北官衙）が、今回の調査成果はこれを裏付けるものとなった。なかでも、甕など土器の多さは今回の調査区の南に位置する造酒司との関連を想起させるものがある。小面積の部分的な調査であったが、この地域の様相を解明する大きな手がかりが得られたといえる。

この地域は水上池のすぐ南にあたり、現地形から考えても第二次大極殿院・中央区朝堂院と東院に挟まれた東方官衙の谷筋の源頭にあたるとみられていた。しかし、基本層序の観察によると、東院西辺の谷筋から尾根筋に上がる部分の状況と酷似しており、谷筋とはいひ難いことが判明した。その中では南西隅に設けたF区に分厚い包含層がみられることや、検出面の標高がもっとも低いことから考えると、谷筋は今回の調査区の西に位置する可能性が高いとみられる。また、この地域の奈良時代の遺構面が予想以上に浅いことがあきらかになったのも、今回の調査の大変な成果の一つである。
（渡辺晃宏）

平城宮東方官衙地区SK19189 出土の動物遺存体

—第440次

1はじめに

平城宮東方官衙地区の調査（第440次）で検出した土坑SK19189の堆積土壤を水洗選別したなかに、ウニ類や海産貝類を確認したので報告する。

2出土遺構の概要

これまでの報告から、動物遺存体が出土した土坑SK19189の概要をまとめておく^{1・2)}。

平城宮東方官衙地区は、第二次大極殿、東区朝堂院、東区朝集殿院の東側に位置する。第440次調査で検出された土坑SK19189は、東西約11m、南北約7mの不整形を呈しており、多量の木簡、削削、木製品、土器、瓦などが廃棄された深さ約1mの大土坑である。下からⅠ：木屑層、Ⅱ：粘性の強い混合層、Ⅲ：礫と粗砂の混合層、Ⅳ：粗砂が堆積していた。Ⅰの木屑層は、大きく3つの単位に分けられ、東側へ2度穴を拡張していたことがあきらかとなった。埋没後には、掘立柱建物SB19175が建てられている。

Iの木屑層からは宝亀2年（771）や宝亀3年（772）の木簡が集中し、上層であるⅢの礫と粗砂の混合層からは宝亀8年（777）の木簡が出土しており、時期は奈良時代後半と考えられる。微化石や木簡の所見から、この廃棄土坑は短期間で埋没した可能性が指摘されている。

出土した木簡の内容は衛府に関わるものが多い。宝亀3年（772）の2月16日には、内豊省や外衛府が廃止され、

その舍人が近衛・中衛・左右兵衛府に分けて配置されており³⁾、こうした衛府の改編にともなう建て替えの際に廃棄された可能性が指摘されている。また、この廃棄土坑には炭を多く含む堆積物が認められ、廃棄後に焼却処理をした痕跡と考えられる。

3同定・記載

動物遺存体は、I：木屑層の堆積土壤を水洗選別した際にみつかったものである。同定は現生標本との比較によりおこない、比較標本には環境考古学研究室と千葉県立中央博物館の所蔵標本を用いた。貝類の同定に関しては、千葉県立中央博物館の黒住耐二氏より多くのご教示をいただいた。

ウニ綱は、殻板の破片が1点出土した。残存長は最大で16.5mmである。棘や口器の骨は認めらなかった。

貝類は、巻貝の貝殻片2点と蓋12点が出土した。貝殻片の残存状態は、非常に悪かった。1点は殻頂部である。殻頂の螺塔が直線的ではなく、やや丸みを帯びていることから「クボガイあるいはコシダカガニガラ」と同定した。もう1点は、種が不明だが、巻貝の螺塔片である。蓋12点のうち、石灰質が残存する蓋が1点で、残りは角質のみであった。石灰質が残存する蓋は、小さな棘状が密生しており、サザエの蓋である。角質の蓋は、千葉県立中央博物館所蔵の現生標本を検討した結果、蓋の形態、大きさ、巻の強さが同定に有効な部分であった。出土した蓋は、すべて直径0.5～1cm程度の円形を呈しており、巻の強さで多旋型（曲線幅0.3～0.5mm程度）と少旋型（曲線幅1.3～1.5mm程度）に分けられた。多旋型は同心円状の輪紋、少旋型は螺旋状の輪紋がみられる。こうした

表30 SK19189から出土した動物遺存体

遺構・層位	分類群	部位	点数
SK19189 1木屑層	ウニ綱 <i>Echinoidae</i> sp.	殻板	1
	サザエ <i>Turbo cornutus</i>	蓋（石灰質+角質）	1
	クボガイあるいはコシダカガニガラ属 <i>Chlorostoma</i> sp.- <i>Omphalius</i> sp.	蓋（角質）	4
	クボガイあるいはコシダカガニガラ <i>Chlorostoma lischihi</i> - <i>Omphalius rusticus</i>	殻頂	1
	スガイ? <i>Turbo coreensis</i> ?	蓋（角質）	6
	貝類種不明（巻貝）	螺塔片	1
	貝類種不明	蓋（角質）	1

蓋の形態的特徴から、多旋型の蓋は「クボガイ属あるいはコシダカガンガラ属」であり、少旋型の蓋はスガイの可能性が高い（「スガイ？」と記載）と考えられた。スガイには石灰質の蓋もあるが、石灰質の蓋は分解して、角質の蓋のみが残存したものと考えられる。

4 文字資料との比較

平城宮から出土した動物遺存体と文字資料⁴⁾を比較する。ウニ類は「棘甲巣」や「棘甲巣」と記載されていたと考えられ、木簡も平城宮・京で出土している。殻板の破片が出土しており、殻付の状態でウニが運ばれることもあったことがわかる。

サザエは「螺」と記される貝類が該当すると考えられており、「出雲国風土記」では島根郡や秋鹿郡の海で獲れることが記されている。長屋王木簡や二条大路木簡にも認められている。石灰質の蓋が出土したことから、蓋のついた状態で持ち込まれたことが確認できた。

クボガイ、クボガイ属、コシダカガンガラ、コシダカガンガラ属、スガイと同定した分類群は、すべて岩礁域に生息する小型の巻貝である。文献では「シタダメ（細螺など）」と呼ばれる貝類が該当する可能性が高く、平城宮・京で木簡も出土している。殻頂部や蓋が出土してお

り、貝殻ごと持ち込まれる場合もあったことがわかる。

なお、本研究の一部は、科学研究費補助金・若手研究（B）「古代における食生活の復元に関する環境考古学的研究」（課題番号26870928）の成果によるものである。

（山崎 健）

註

- 1) 今井晃樹・神野恵・国武真克・渡辺見宏・大林潤「東方官衙地区の調査—第429・440次」「紀要 2009」。
- 2) 今井晃樹「平城宮東方官衙地区SK19189の自然化学分析—第440次」「紀要 2011」。
- 3) 「日本後紀」宝亀3年2月丁卯条。
- 4) 同定した分類群に該当する文字資料の記載については、岡根真隆「奈良朝食生活の研究」吉川弘文館、1969を参考とした。

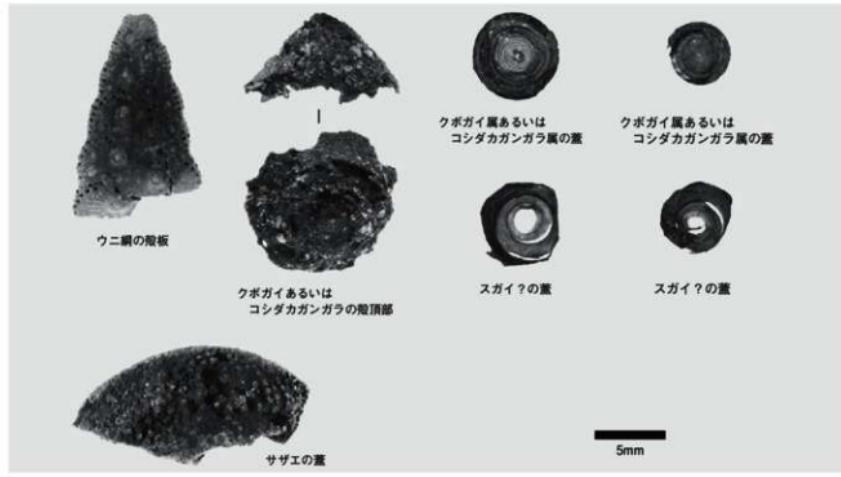


図229 SK19189から出土した動物遺存体

III - 2 平城京と寺院等の調査

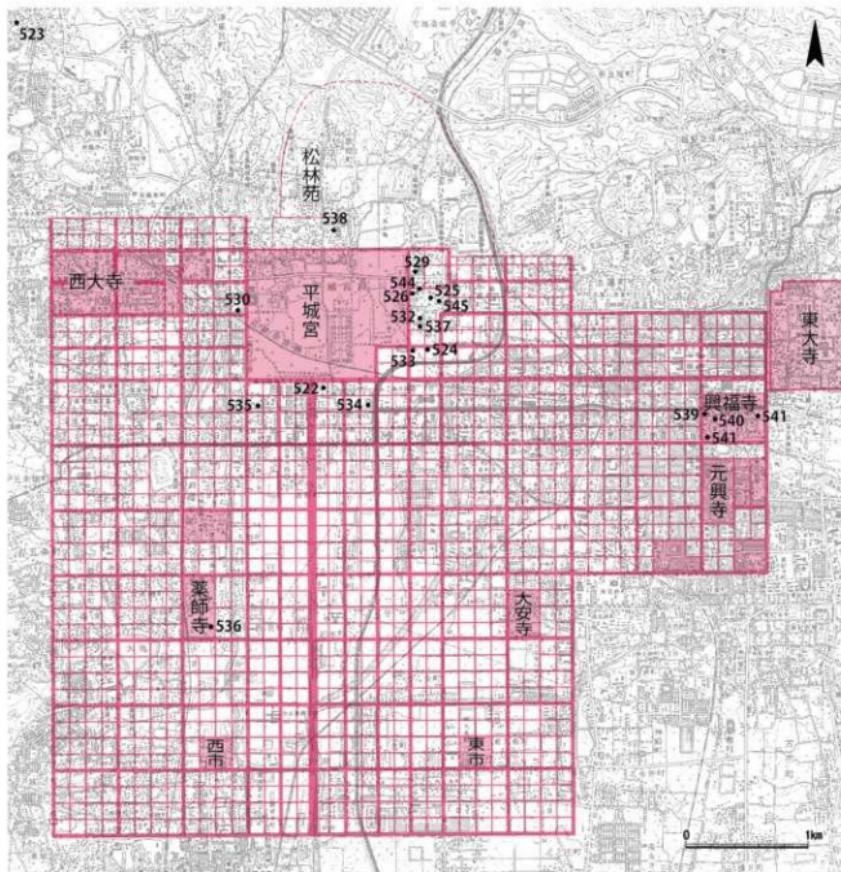


図230 平城京発掘調査位置図 1:40000

平城京左京三条一坊一坪の 調査

—第522次

1 はじめに

当調査の調査地は、史跡平城京朱雀大路跡に隣接する緑地公園として整備されていた朱雀門南東の一帯で、平城京左京三条一坊一坪の東半部分にある。

当調査は、国土交通省による平城宮跡展示館建設予定地の事前調査であり、2010年度から奈良文化財研究所が継続して発掘調査をおこなっている（第478・486・488・491・495・515次調査、「紀要 2011」「同 2012」「同 2013」「同 2014」）。また、1980年代から90年代にかけて、奈良市によっても周辺の発掘調査がなされており¹³⁾、1987年には奈文研が北方の二条大路との境界付近を調査している（第180次調査）。

以下、既往の調査成果の概要を述べる。

1980年代および90年代の調査により、左京三条一坊一坪は少なくとも西面（朱雀大路沿い）と北面（二条大路沿い）には築地塀などの遮蔽施設をもたず、朱雀門前の広場的な土地として確保されていた可能性が指摘されていた。また、奈良市の調査では、坪を南北に二分する東西方向の坪内道路の存在が確認された。なお、2010年度以降の奈文研の調査では、この坪内道路の東延長部分や一坪と二坪を画す三条条間北小路などを検出し、一坪では三条条間北小路に面する南面にも築地塀などが設けられなかった可能性が高いことを確認するなど、如上の調査所見を裏づける成果を挙げている。

加えて、2010年度以降の調査により、この坪の土地利用の具体相があきらかになった。坪の北端付近では平城宮造営にともなうとみられる鉄鍛冶工房群が展開していたことを確認し、坪の中央や南寄りではそれに付随すると思われる大型の掘立柱建物群を検出した。これにより、一坪が広場とされる前、平城遷都前後のー時期のみではあるが、広義の官術としての土地利用がなされていたことが判明した。また、井戸屋形をともない上段正方形・下段六角形の井戸枠をもつ大型井戸を検出し、中からは木簡や木製品・金属製品・土器・瓦など、さまざまな遺物が出土した。なお、この井戸は鉄鍛冶工房群の廃絶後に設置されたものであり、坪内道路とともに一坪が

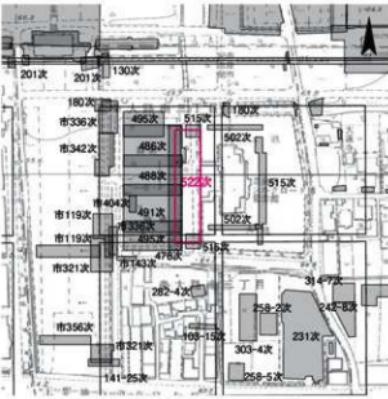


図231 第522次調査区位置図 1:4000

広場として機能していた時期の施設と考えられる。

当調査では、坪の東辺付近における土地利用のあり方の解明、およびこれまでの調査で調査区東方外側へ展開する可能性が想定されていた建物等の確認などを主な目的とし、既調査区の東側に東西21m・南北93mの調査区を設定した。調査面積は1,953m²である。2013年12月16日に調査を開始し、2014年3月28日に終了した。

2 基本層序

当調査区内の基本層序は、上から、1988年開催の奈良ルクロード博覧会にともなう整備盛土（厚さ1.0-1.5m程度）、古代から近代にかけての旧耕作土・床土（厚さ30-80cm程度）、奈良時代の整地層（厚さ最大約30cm）、地山が順である。ただし、削平により整地層が失われている箇所も一部ある。整地層は黄褐色砂質土を主体とするが、粘質土を用いている箇所も認められる。地山は、最上層が黄褐色のシルトないし粘質土で、その下層には細粒砂・砂質土などの層がみられる。

遺構はすべて、この整地上上ないし地山面上で検出された。遺構検出面の標高は、調査区北端で63.5m、南端で63.0mほどである。現地表の標高は65.0m前後であり、地表下1.5~2.0mほどで遺構検出面に到達する。

なお、本調査区には幅2.5mほどの現代のボックスカルバート水路が北端から南端まではほぼ中軸線上を継断するかたちで設置されているが、その西側の据付掘方西側、調査区中央やや北寄りの部分（後述の坪内道路SF9660路床部分および北側溝SD9661の北側）において、整地層

と地表面の間に厚さ5~10cmほどの炭層が確認された。ボックスカルバート東側の掘方壁面では認められないため堆積範囲は部分的とみられたが、より正確な範囲の確定とその性格の究明を意図し、東西方向2本・南北方向2本のサブトレーナーを設定し(図232・233参照)、また土壤を採取し水洗選別作業により遺物を回収した。その結果、炭層の土壤には冶金関連遺物が比較的多く含まれることが判明した(詳細は「4 出土遺物」参照)。ここから、この炭層は、第486・495次調査で検出した鉄鍛冶工房群の廃絶後にその残滓を含む廃土で坪内のくぼみ状の部分を地ならしした痕跡(広義の整地層)とみられる。

3 検出遺構

当調査では、新たに掘立柱建物3棟などを検出し、また既往の調査で検出していた掘立柱建物1棟や掘立柱塀1条、道路2条の東延長部分などを確認した(図232・233)。ただし、調査面積に比して顯著な遺構は少なく、特に調査区南半(後述の坪内道路SF9660以南)は遺構密度が非常に低い。

なお、遺構を検出した整地層が「2 基本層序」で言及した炭層より上層に位置するため、当調査で検出した掘立柱建物などはすべて、第486・495次調査で検出した鉄鍛冶工房群の廃絶後のものとみられる。おそらくは、坪内道路SF9660などと同時に機能していたものであろう。

掘立柱建物SB9900 第486次調査で4基の柱穴を検出していた掘立柱建物。当調査で東延長部分に新たに柱穴3基を検出した。第515次調査で検出した柱穴1基とあわせて、桁行6間、梁行2間以上の東西棟建物になるとと思われるが、調査区北方外側に展開しており、全体規模は不明。桁行の柱間寸法は平均2.8mほどで、9尺(=約2.7m)等間で設計されている可能性がある。梁行の柱間は約2.7m(9尺)か。南側柱列の柱穴が後述の東西棟掘立柱建物SB10555の柱穴と重複しており、SB10555より新しい。SB10555を西側に1間分ずらして建て替えた可能性が考えられる。

掘立柱塀SA9901 第486次調査で3基の柱穴を検出していた東西方向の掘立柱塀。当調査で東延長部分に新たに柱穴2基を検出し、規模が4間以上であることが確かめられた。柱間寸法は3.0~3.3m(10~11尺)ほどで、

やや不揃いである。北に位置する掘立柱建物SB9900・SB10555と柱筋を備えるようにもみえるが、两者よりもやや柱間が広く、特に西端の柱穴は西側へのずれが大きい。また、調査区東北部で検出した小土坑SK10556もSA9901の東延長部分の柱穴の可能性があるが、想定される柱筋からはやや南にずれる。他の建物との時期的な共存関係などは未詳。

掘立柱建物SB10555 調査区北端付近で検出した掘立柱建物。本調査では柱穴3基を検出し、第486次調査で検出した柱穴2基および第515次調査で検出した柱穴2基とあわせて、桁行6間、梁行2間以上の東西棟建物になると思われるが、調査区北方外側に展開しており、全体規模は不明。桁行の柱間寸法は平均2.8mほどで、9尺(=約2.7m)等間で設計されている可能性がある。梁行の柱間は約2.7m(9尺)か。南側柱列の柱穴が前述の東西棟掘立柱建物SB9900の柱穴と重複しており、SB9900に先行する。東側柱列が後述の南北棟掘立柱建物SB10560の西側柱列と柱筋を備えている。

掘立柱建物SB10560 調査区東北部で検出した掘立柱建物。桁行6間、梁行2間以上の南北棟建物と思われるが、調査区東方外側に展開しており、全体規模は不明。柱間寸法は、桁行が約3m(10尺)等間、梁行が約3m(10尺)。後述の掘立柱建物SB10561と重複するが、柱穴そのものは重複しておらず、先後関係は未詳。ただし、柱穴掘方の深さは現状30~60cmほどで、SB10561より深い傾向にある(図234)。西側柱列が前述の東西棟掘立柱建物SB10555の東側柱列と柱筋を備えている。

掘立柱建物SB10561 調査区東北部で検出した掘立柱建物。桁行6間、梁行1間以上の南北棟建物と思われるが、調査区東方外側に展開しており、全体規模は不明。塀などである可能性もある。桁行の柱間寸法は平均2.7mほどで、9尺(=約2.7m)等間で設計されている可能性がある。前述の掘立柱建物SB10560と重複するが、柱穴そのものは重複しておらず、先後関係は未詳。ただし、柱穴掘方の深さは現状15~40cmほどで、SB10560より浅い傾向にある(図234)。

坪内道路SF9660・北側溝SD9661・南側溝SD9662 第478・488次調査で検出して坪内道路および南北両側溝。路面は削平され遺存しないが、南北両側溝の東延長部分をそれぞれ約16m分検出した。これにより、検出総

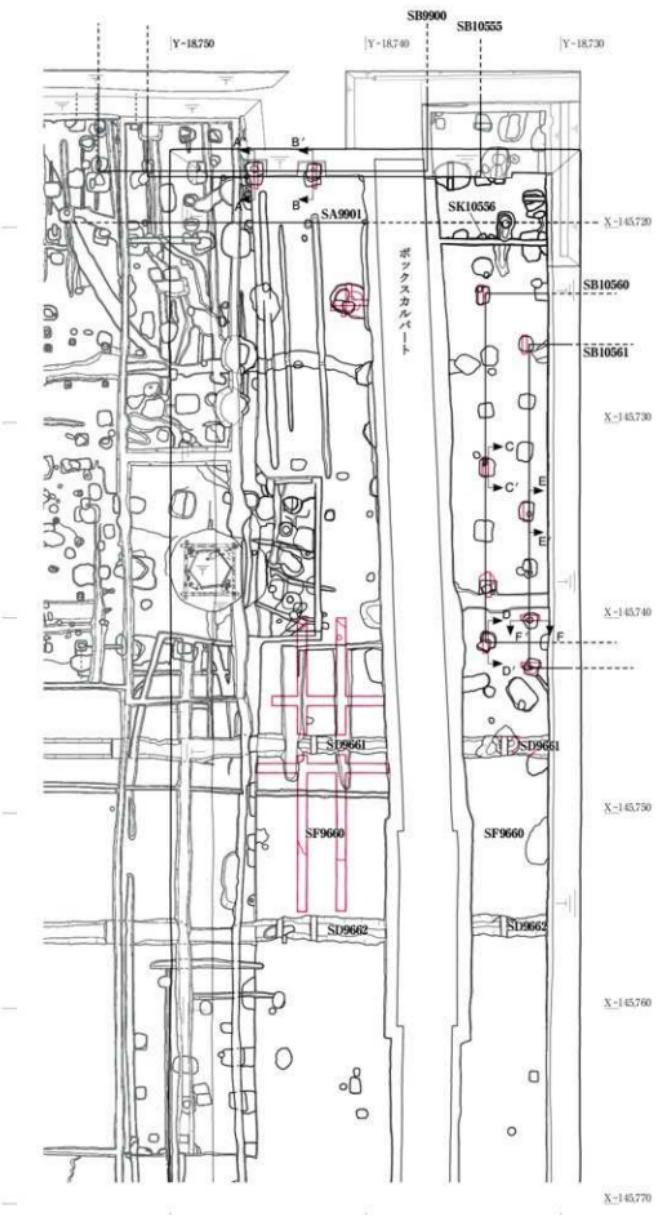


図232 第522次調査区遺構図(1) 1:250

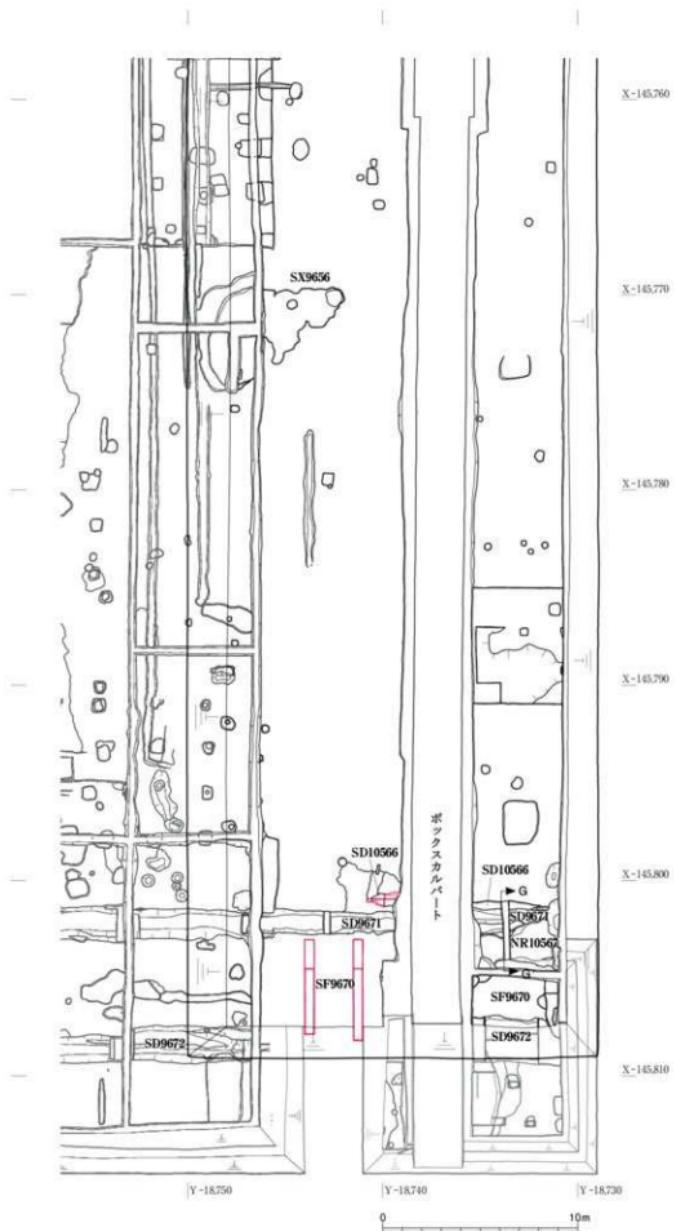
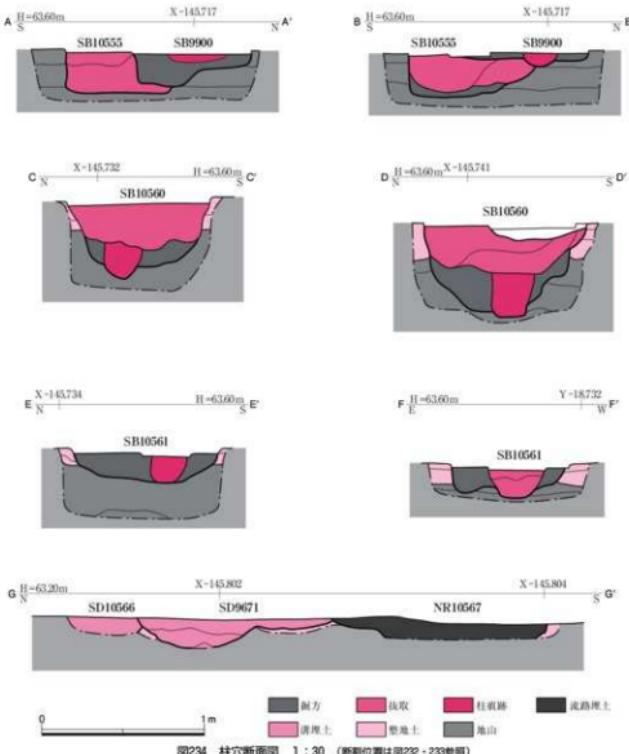


図233 第52次調査区透構図(2) 1:250



長は約60mとなった。現状で、北側溝SD9661は幅0.7~1.2m、深さ15~25cm、南側溝SD9662は幅0.9~1.5m、深さ10~25cm、溝底の標高から、西から東に向かって排水していたとみられる。両側溝の心間距離は約9m、現状での路面幅は約8m。

三条条間北小路SF9670・北側溝SD9671・南側溝SD9672
第478・495・515次調査で検出していた三条条間北小路および南北両側溝。路面は削平され遺存しないが、北側溝の東延長部分を約15m分検出した。これにより、検出総長は約59mとなった。北側溝SD9671は、現状で幅0.9~1.5m、深さ15~35cmを測るが、東端約2m分は後述の東西流路NR10567により南肩が壊されている。溝底の標高から、西から東に向かって排水していたとみられる。なお、当調査では南側溝SD9672は確認されなかつたが、これについては「5まとめ」で後述する。

東西溝SD10566 調査区東南部で検出した東西溝。ボックスカルバートの東側で約3m分、西側で約1m分、合計約4m(ボックスカルバートにより壊されている部分を含めると約8.5m)分を検出したが、ボックスカルバート以東の部分は三条条間北小路北側溝SD9671により南肩が壊されており、SD9671に先行する遺構であることがわかる。幅は現状で最大0.7m。西端が途中でとぎれること、および溝底の標高から、西から東に向かって流れているとみられる。

東西流路NR10567 調査区東南部、ボックスカルバートの東側で約4m分を検出した東西方向の自然流路。西半の幅は約1mだが、東半は北肩が急激に拡張して最大2mほどまで幅を広げ、三条条間北小路北側溝SD9671の南肩を壊している。ボックスカルバートより西側では検出されなかつたことから、ボックスカルバートに沿う

ように南または北に屈曲している可能性がある。溝底の標高から、西から東に向かって流れているとみられる。

瓦溜SX9656 第478・491次調査で西半に検出していた瓦溜。当調査では、東延長部分を東西約4m、南北約4mにわたり検出した。これにより、全体の規模が東西約7m、南北約5mであることが判明した。不要となつた瓦片を廃棄したものとみられる。
(山本祥隆)

4 出土遺物

土器・土製品

当調査では、整理用コンテナ5箱分の土器・土製品が出土した。調査面積に比して出土量は非常に少ない。出土品としては奈良時代の須恵器・土師器が主体で、古墳時代の埴輪がそれに次ぐ。柱穴からの出土は少ないが、調査区東北部で検出した掘立柱建物SB10560の柱穴(抜取)からは、奈良時代に属する須恵器壺Cの体部片がまとめて出土した。坪内道路南側溝SD9662からは、奈良時代の須恵器・土師器が少量出土した。また、三条条間北小路北側溝SD9671からは、円筒埴輪・形象埴輪片が出土した。円筒埴輪は、第515次調査南区で検出した古墳SZ10415の周濠SD10416より出土したものと同じく川西V期(6世紀前半頃)に位置付けられ、須恵器の焼成が特徴的である(『紀要2014』)。SZ10415にともなうものであろう。
(小田裕樹)

瓦 磚 類

当調査で出土した瓦は表31のとおりである。ボックスカルバート付設部分を除いた新規掘削面積で比較すると、面積あたりの瓦の出土量は非常に少なく、西側の第488・491次調査と同程度の出土量である。西側の地区(坪の中心部付近)と同様、当調査区内(坪の東辺付近)にも瓦葺きの建物などはなかったとみてよいであろう。軒瓦は、平城宮・京瓦編年IV-1期の軒丸瓦6316Daと近世の巴文軒丸瓦各1点が出土した。
(川畠 純)

冶金関連遺物

「2 基本層序」で言及した炭層から冶金関連遺物が出土した。これらは、炭層に設けたサブトレーン(東西方向2本・南北方向2本の計4本)より採取した土壤(土糞袋66袋分)から、水洗選別作業により回収したものである。遺物は、輪の羽口片のほか、褐色や灰褐色を呈する鉄滓片、炉壁片、金床石(安山岩)の剥片などである(図



図235 炭層出土の冶金関連遺物

表31 第522次調査出土瓦一覧

軒丸瓦	種	点数	丸瓦	平瓦
型式			重量	面積
6316	Da	1	22.938kg	53.16kg
巴(近世)		1	点数	417
計		2		1223

235)。いずれも完形のものではなく、碎片が多い。内容から、これらは一坪西北部の鉄鍛冶工房群に由来する遺物と考えられる。またここから、炭層は、鉄鍛冶工房群の廃絶後にその残滓を含む廃土で坪内のくぼみ状の低地部分に地ならしを施した痕跡と推察される。(芝原次郎)

5 まとめ

当調査の主な調査成果は以下のとおりである。

第一に、左京三条一坊一坪が広場的な空間として利用されていたという、既往の調査による知見が裏付けられた。当調査の調査区はこの坪の東辺付近にあたるが、西側の第488・491次調査などと同様、調査面積に比して建物などの遺構の密度は低く、また遺物の出土量も少ない。以上から、この坪の広場としての利用範囲が坪の東辺付近まで及んでいたことが指摘できる。一坪全体が一体的に活用されていたとみてよいであろう。

次に、新たに掘立柱建物3棟などを検出し、坪の東辺付近における土地の利用状況の詳細があきらかになった。全体的に遺構密度が低いなかで、調査区北半(坪内道路SF9660以北)では比較的多くの建物などを検出した。特に南北棟掘立柱建物SB10560とSB10561は重複しており共存はしえず、土地利用状況の時期的変遷を示唆するものといえる。柱穴どうしは重複しないため両者の先後関係は確定しがたいが、残存している柱穴の深さは概



図236 SB10560・SB10561柱穴検出状況（北から）

してSB10560のもののほうが深い傾向にあることから、SB10560が先行し、その廃絶後にSB10561が建てられた可能性も指摘できる。また、東西棟掘立柱建物SB9900とSB10555は柱穴同士が重複しており、SB10555が先行することが確かめられる。さらに、SB10555の東側柱列とSB10560の西側柱列とが柱筋を揃えていることから、両者が一連の計画のもとに設計・建造され、同時期に機能していた可能性も考えられる。以上を勘案すると、SB10555・10560のペアからSB9900・10561のペアへの建て替えといった様相を想定することもあるいは可能であろう。広場といつても構造物がまったくなかったわけではなく、坪の東北隅付近を中心若干ながら建物の存在が確認され、かつそれらの計画的な建て替えの様相が推察されることは、この坪の性格や土地利用の状況を解明するための重要な知見といえる。また、SB9900は第486次調査で西側の一部を検出していたものであり、当調査でその東延長部分を検出し、桁行規模を確認したことでも成果の一つである。

さらに、既往の調査で検出していた坪内道路SF9660

および三条条間北小路SF9670の東延長部分を確認したことでも挙げられる。坪内道路SF9660は、本調査によりこの坪の東辺付近まで敷設されていたことが確かめられ、坪の西端から東端まで横断していた可能性が高まった。これは一坪全体の一体的な活用という所を見補強する一証左ともなろう。三条条間北小路SF9670についても、特にその北側溝SD9671の東延長部分を検出したことにより、平城京の条坊設定に関する新たなデータを得たといえる。

一方、南側溝SD9672については若干の説明を要する。当調査の調査区南端東半（ボックスカルバート以東）は第515次調査南区と重複しており、そこでは第515次調査の際に南側溝SD9672を約4m分検出している（その北肩より50cmほどの部分は本調査の調査区内でも確認できる）。対して調査区南端西半（ボックスカルバート以西）では、南壁の法面を一部断ち落としつつ検出をおこなったものの、南側溝SD9672を確認するには至らなかった。ただし、第478次調査や第495次調査（特にその東半）で検出した南側溝SD9672が幅0.9mほどであったのに対し、第515次調査検出分は北肩が1.5m近く拡張し、幅2.2m前後となっている。仮に当調査の調査区南端西半の範囲では南側溝SD9672の幅が第478・495次調査検出分と同程度であったとしたら、当調査では溝の北肩まで検出が達しなかったと考えて矛盾はない。また以上から、南側溝SD9672は、ボックスカルバート付近を境に、その東側のみ急激に北側に幅を広げている可能性も想定しうる。ただその場合、それが自然崩落などによるものか、あるいは人為的に溝の掘り直しなどをおこなったことによるかは詳らかでない。

当調査を終えたことにより、平城京左京三条一坊一坪はその大部分が発掘調査されたこととなる。隣接する二・七・八坪の状況なども踏まえつつ、一坪全体の土地利用の実相やその時期的変遷などを、さらに詳細かつ包括的に解明することが今後の課題である。
（山本）

註

- 奈良市教育委員会編『史跡 平城京朱雀大路跡：発掘調査・整備事業報告』1999。

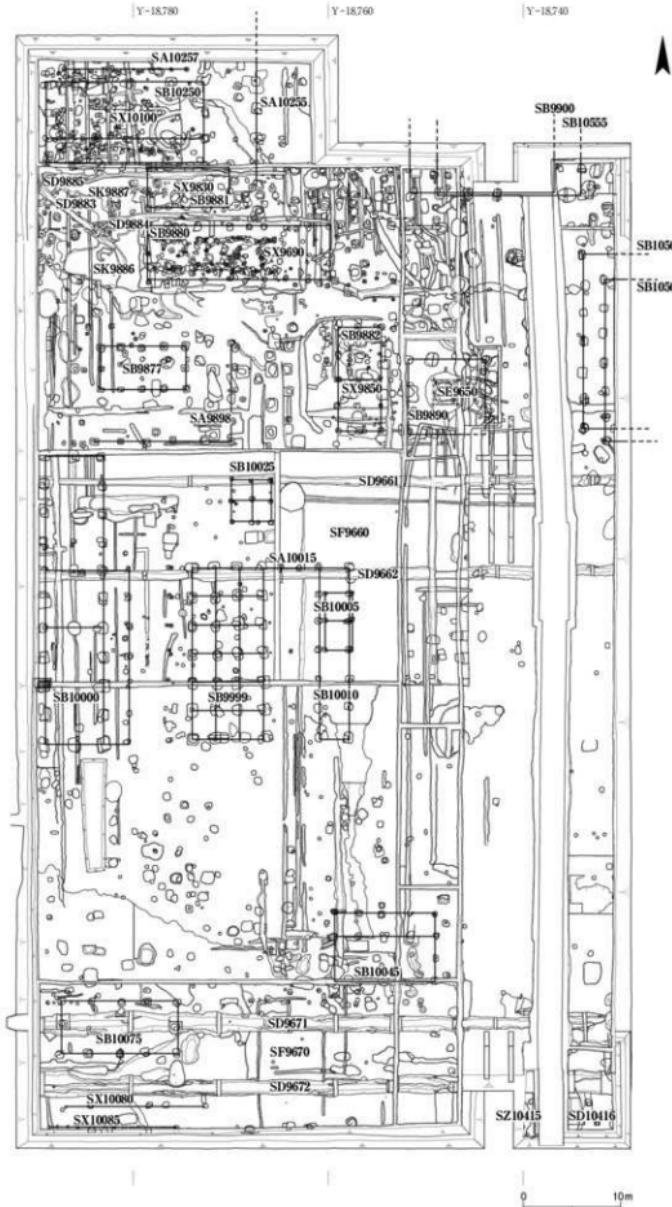


図237 平城京左京三条一坊一坪遺構図 1:500

中山瓦窯の調査

—第523次

1 はじめに

中山瓦窯は平城京の北方に広がる奈良山丘陵南西の小支丘南裾部に所在する。1972年には奈文研により7か所計10基の瓦窯が発掘された（第79-5次調査『年報 1973』）。窯体構造にも窑窓と平窓の両者があるとされ、奈良時代初頭から前半にかけての平城宮所用瓦の生産地として知られている。

今回の調査地は1972年に発掘調査がおこなわれた小支丘の一段上段に位置する。宅地造成および擁壁工事にともない2014年1月21日より厳重立会として対応したが、遺構を検出したため1月22日より緊急発掘へと切り替えた。また、調査に際し、奈良県立橿原考古学研究所と奈良市埋蔵文化財調査センターから協力を得た。

調査区は丘陵の東斜面と西斜面の2ヶ所に分かれる。ここではそれぞれ東区・西区とする（図239）。東区の調査は1月22日から29日までおこない、調査面積は約95m²である。西区の調査は1月23日から2月10日までおこない、調査面積は約40m²である。東区と西区の間は上記の発掘調査面積には含めていないが、擁壁工事の掘削により地山面を確認しており、遺構はみられない。（川畠 純）

2 東 区

瓦窯SY330

瓦窯SY330は、標高94.7~96.6mに位置する窑窓である（図241）。南東を主軸に構築され、少なくとも1回の大規模な改修が認められる。焼成部から煙道部にかけての大部分が後世の削平を受けているものの、焼成部、燃焼部、煙道部、焚口部、灰原まで確認できた。煙道部から焚口部までの長さは約35mである。

焼成部 焼成部は少なくとも第1次床面と第2次床面が認められる。

第1次床面は、第2次床面を掘り下げたのちに検出した、高温の火をうけ灰白色に硬化した面である。煙道部へとつながる後方部分が攪乱土坑で削平されており、全長は不明だが、残存長は約1.6m、最大幅は約1.1m、床面傾斜角は緩やかで、8.0~11.0°を測る。燃焼部から焼

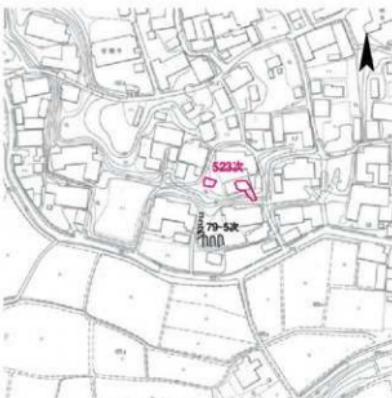


図238 第523次調査区位図 1:2500

成部にかけての階の高さは26cm。焼成部掘方は大きく、地山由来の土を入れ、スサ入り粘土ブロックで窯壁や床面を構築する。段や瓦等を並べた焼台はみられない。なお、第1次床面の下層にもごく薄くだが高い熱を受けた面があり、小規模な改修や補修の可能性もある。

第2次床面は、第1次床面上に土や瓦を入れて床面を上げ、窯壁はスサ入り粘土で補強する。残存長約1.7m、最大幅約1.1m。上面が削平を受けていることから、床面の傾斜角、および燃焼部から焼成部にかけての階の高さは不明だが、現存する階の高さは56cm。階の下部にはスサ入り粘土ブロックを積み、上部は横方向に丸瓦や平瓦を積んでいた。

第2次床面に関しては、上面が削平されており、窯構造は窑窓、平窓の両方が想定できる。窑窓とすれば、床面は第1次床面と同様緩やかに傾斜し、残存する床面の高さから後述する煙道部へと繋がると考えられる。一方、平窓であれば、煙道部は垂直に立ち上がる奥壁の上部もしくは天井につくため、検出した煙道とは繋がらず、攪乱土坑があった部分に想定できる。第2次床面焼成部の全長は、焼成部の側壁と攪乱土坑の大きさからおよそ1.1~1.8mと考えられ、全長と幅がほぼ同じ、もしくは全長が長い構造となる。奈良山丘陵上で発掘された平窓の例は、すべて焼成室の全長より幅が0.5m以上広く、今回検出した焼成室とは形状が大きく異なる。また、第2次床面を平窓とすれば、検出した煙道は第1次床面に対応することになる。しかし、焼成部第1次床面の傾斜角は緩く、煙道に繋ぐには奥壁が急角度で立ち上がりると考えねばならず、窑窓の構造としては無理があ

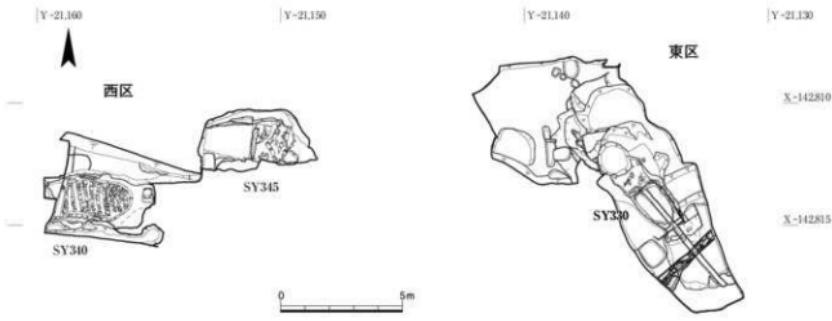


図239 第523次調査区構造図 1:200

る。以上から、第2次床面の窯構造は窯と判断した。

燃焼部 燃焼部も焼成部と同様、少なくとも1回の大規模な改修の痕跡が認められる。

第1次床面は、第2次床面を掘り下げる面で検出した。焼成部第1次床面と同様、火を受けて硬くしまる。前方部が一部後世の土坑で壊されており、残存長約1.2m、最大幅約1.4m。床面はほぼ平坦。掘方は焼成部掘方より小さく、燃焼部よりひとまわり大きく掘った後、床面に粘土を貼り、窯壁はスサ入り粘土ブロックで構築する。床面の厚さは4~6cmとごく薄く、その下は地山となる。

第2次床面は、第1次床面から土を版築状に30cm積んで床面を上げている。前方部が後世の土坑で大きく破壊されており、現存長約1.7m、最大幅約1.1m。床面はほぼ平坦。側壁は平瓦を立て並べたのち、スサ入り粘土で補強する。平瓦を除去した後、壁材に用いられた正方形の粘土ブロックを立った状態で1点検出した。

焚口部 燃焼部からやや窄まって焚口がある。幅約0.7m。東壁には粘土で目地を固めた長方形磚が2段積まれていた。長方形磚は検出面の高さからも、第2次床面にともなうものと考えられるが、焼成部の上に乗っており、第2次床面の段階で改修がおこなわれた可能性がある。

煙道部 煙道部は後世の擾乱穴で焼成部と分断されているうえ、大部分が削平されていたが、西端部分がわずかに残存していた。煙道部床面は斜面に平瓦を敷いていた。残存長約1.1m、高さ32cm、床面傾斜角は15.0°。検出高と傾斜角から、第2次床面にともなうと判断できる。第1次床面にともなう煙道は、床面傾斜角や焼成部掘方



図240 瓦窯SY330全景（南東から）

から推定すると、擾乱土坑の位置にあったとみられる。

灰原 焚口部から前庭部にかけて、南東方向に灰原が広がる。灰原の大きさはもっとも広い部分で約3.3m、深さ約0.5m。灰原は、第2次床面や長方形磚がともなう焚口の焼成部より下層にあり、第1次床面にともなう可能性が高い。灰原の土は炭が中心であり、瓦礫類は多くはない。

排水溝SD331 焚口中央から前庭部にかけて、窯の主軸に沿って丸瓦を並べた排水溝を検出した。大部分が灰

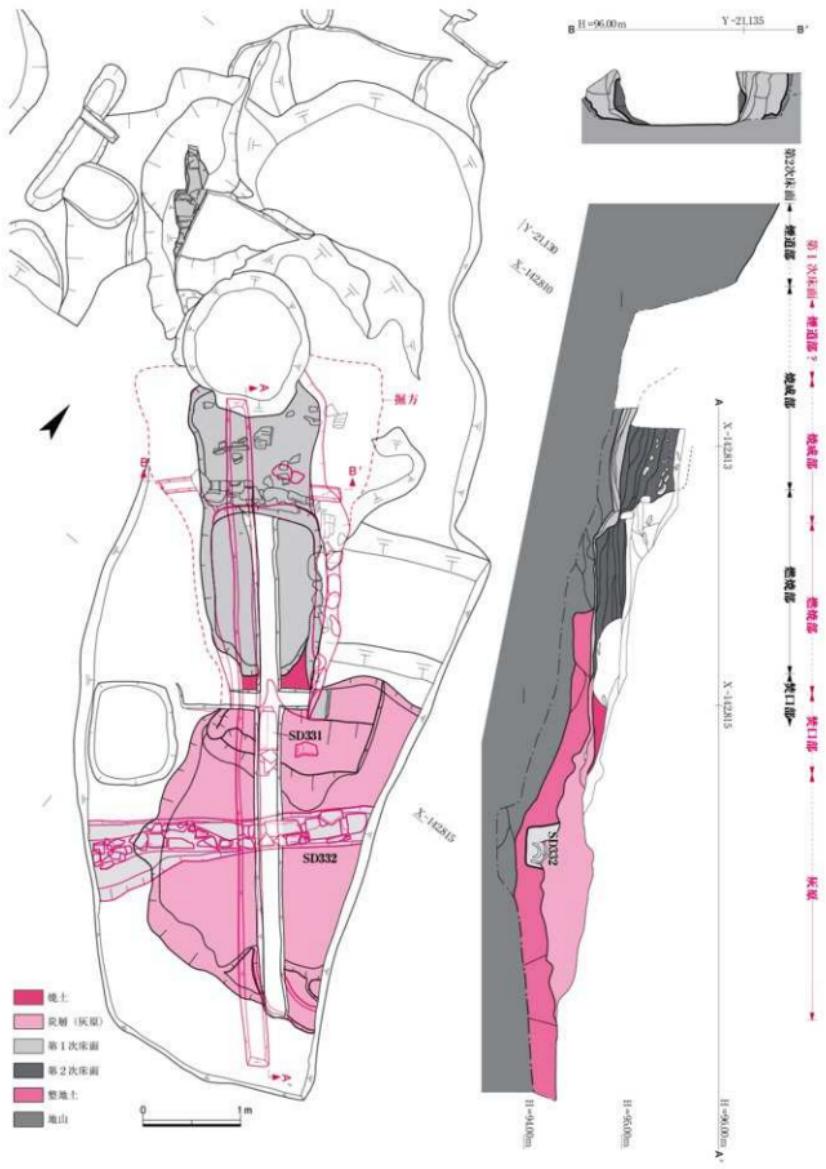


図241 瓦窯SY330遺構図・断面図 1:50

原によって壊される。残存長約1.0m、幅約20cm。同様の排水溝は、瀬後谷I号窯などでも確認できる¹⁾。

瓦窯SY332 焚口から、約1m南西で窯主軸に直交する暗渠を検出した。焚口部から前庭部にかけては、窯を構築する際に、地山を削って整地をおこなっており、SD332はその整地面を掘り込む。深さ約0.6m、幅約0.9m。暗渠内には焼けひずんだ丸瓦を並べ、隙間に平瓦や丸瓦を詰める。灰原地壊され、瓦が一部露出していた。埋土には炭は全く含まず、SY330周辺に窯を構築する当初に造られた溝とみられる。

(石田由紀子)

3 西 区

瓦窯SY340

瓦窯SY340は調査区の西部中央で検出した窯である(図242)。東西方向を主軸に構築され、煙道部を東側に向ける。焼成部と煙道部を検出した。燃焼部は西側に続くとみられるが、発掘調査範囲外である。

焼成部 焼成部は内法で幅約1.8m、奥壁までの長さ約3.5mで、奥壁底には煙道部が開口する。焼成部の窯壁は地山を現地表面から深さ0.7mほど掘り込んだ後に、粘土積み上げや貼り付けにより構築される。窯壁外側の掘方には地山由来とみられる黄褐色細砂が充填される。後述の通り、SY340の北には瓦窯SY345があり、また南側も削平を受けており、焼成部の掘方で一部壊されているため掘方の範囲は不明である。ただし、煙道部付近では掘方がすべて遺存しており、それによれば、掘方の30~50cmほど内側に窯壁を構築したものとみられる。被熱による赤化は掘方内部のほぼ全域に及ぶ。

床面は地山の直上に厚さ3~5cmほど粘土を貼り付けて構築される。床面の傾斜角は11.5°で、煙道部側に緩やかに上がる。非常に堅密に焼き固められており、黒色を呈する。焼台として用いられた面ではなく瓦詰めがおこなわれる以前の空焼きによる床面と考えられ、創業時には段を構築して焼台としたと考えられる。

床面の直上には細片化した瓦片を4段程度積み上げて、窯主軸に直行する方向に段を構築している。瓦片は平瓦が大半を占め、一部で丸瓦も含まれる。段の間隔はおよそ30cmで、調査範囲内で10列確認した。段に用いられた瓦片と床面の間ならびに瓦片同士の間には粘土が詰め込まれており、補充粘土を加えながら床面上に瓦片で

段を構築したことがわかる。奥壁側1.5mほどの範囲では、それらの段の直上および間で平瓦片が敷きつめられるように出土しており別個の焼台を構成していた可能性が想定できるが、瓦片は細片化したものや乱雑に割れたものが多く、段が崩落したものも可能性も高い。また、燃焼部側では窯壁に用いられた粘土ブロックが倒壊した状態で段の直上から出土しており、段の上に別個の床面は認められない。以上から、焼台の大きな改修はおこなわれなかつたと考えられる。

調査区の西端では階とみられる落ち込みを検出している。ただし、調査範囲の問題から落ち込みの存在を確認したのにとどまつており、階の高さは不明である。階端の標高は94.82mである。

焼成部の窯壁は強い被熱により白色化している。窯壁は奥壁側の1.5m程度では粘土ブロック積み上げの単位は認められず、粘土を貼り付けるようにして構築されたとみられる。燃焼部側ではスサ入り粘土ブロックを積み上げ、その内側に粘土を貼り付けて窯壁とする。粘土ブロックは長軸約30~40cm、高さ約10cmのものが多いが、特に下端が不整形のものが多く、凹凸の多い部分には粘土を詰め込むようにして窯壁が構築されたことがわかる。そのことから、乾燥により硬化した日干しレンガというよりも、さほど乾燥が進んでいない粘土塊をある程度方形に整形した上で用いたものとみられる。

もっとも良好に遺存する南側では粘土ブロックは最大で4段確認したが、その下では奥壁側から一連で続く粘土貼り付けによる窯壁が遺存しており、粘土ブロックはその上に積み上げられている。また、奥壁側から一連で続く窯壁部分の下に、瓦片が入り込む部分がある。以上から、奥壁側の窯壁部分の一部と燃焼部側の粘土ブロックはそれぞれ窯壁の補修の際に用いられた可能性がある。ただし、粘土ブロックの積み上げについては、当初の窯壁構築の際の工程の違いによるもの可能性もある。

煙道部 天井部が遺存する。奥壁には焼成部から向かって左側底部に幅約50cm、高さ約35cmの煙道部が取り付く。長さは約1.0m。奥壁の煙道部開口部分の標高は95.6mである。煙道部では奥壁から奥に約20cmの位置から排煙口に向かって幅約10cmの粘土ブロックが隔壁状に積み上げられており、煙道部は南北に二分される。隔壁は煙道部の中軸より南側に寄つてお、そのため分割さ

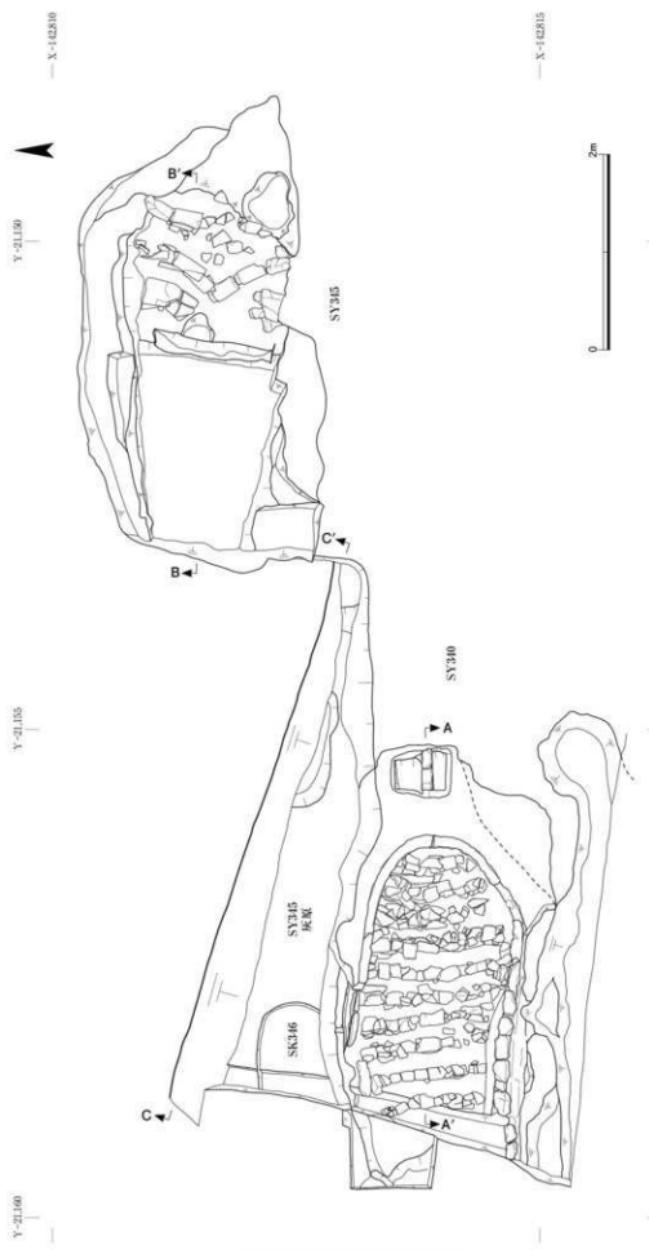


图242 瓦窑SY340·345透视图 1:50

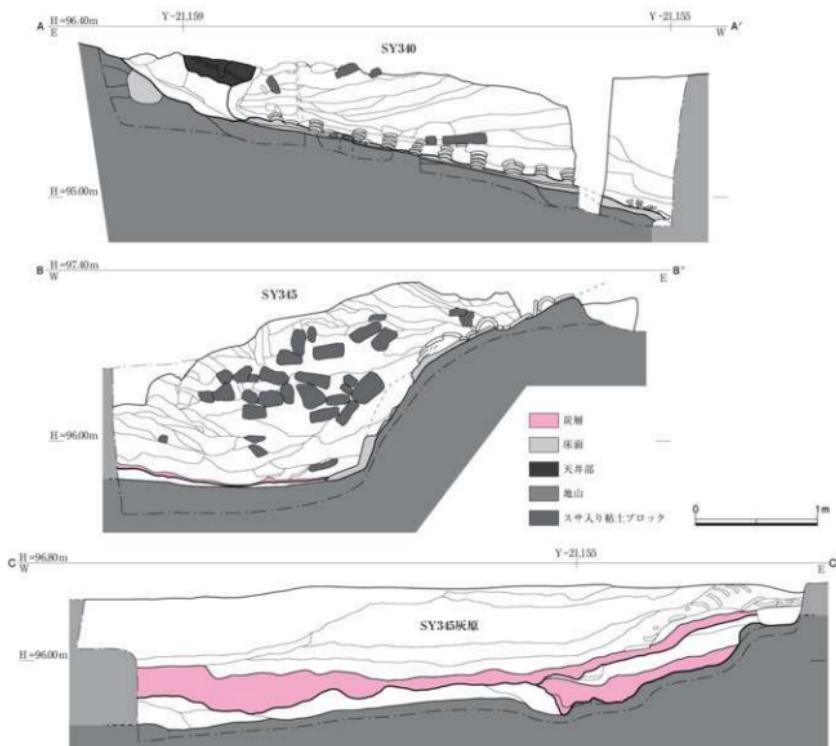


図243 瓦窯SY340・345土層図・断面図 1:40

れた部分の煙道部幅は北側で約30cm、南側で約15cmと異なる。煙道部は焼成部床面と一連の115°の角度で緩やかな斜面をなすが、奥壁から50cmの位置で角度を変え、35.0°の傾斜角で立ち上がり排煙部に至る。排煙部は北側で東西30cm、南側で東西40cmほど遺存する。煙道部と焼成部の間には火橋等の構造物はみられない。

なお、SY340の南側窓壁には南側から被熱したとみられる箇所があり、南側にも別個の瓦窯が存在していたとみられる。ただし、現状では瓦窯本体は完全に削平されてしまい、詳細は不明である。

瓦窯SY345

瓦窯SY345はSY340の北東で検出した窓壁である（図242）。東西方向を主軸に構築され、煙道部を東側に向ける。焼成部・燃焼部・灰原の一部を検出した。

焼成部　焼成部は幅約1.8mで、煙道部側の大半が失わ

れており現状で長さ約1.5mが遺存する。窓壁は燃焼部側で高さ10cmほど遺存している部分があるものの、ほとんど失われている。地山を掘り込んだ後に窓壁を構築したものとみられ一部で掘方が残るが、削平により詳細は不明である。

床面は地山の直上に粘土を3～5cmほど貼り付けて構築されるが、地山削り出しのままの部分もある。床面の傾斜角は約25°で、非常に堅敏に焼き固められており黒色を呈する。床面の粘土中には瓦片が入り込んでいる部分もあるが、床面の貼り替え等は認められないため、当初から瓦片が塗り込まれるようにして床面が構築されたとみられる。

床面上には完形の丸瓦5点を窓主軸に直交する方向に並べて段を造るが、現状では中央部の崩落のため全体としてV字状となっている部分もある。段の間隔はおよそ

30cmで、現状で4列が遺存する。丸瓦の内側には粘土が詰め込まれているが、その補充粘土中には瓦片が入る。床面上に瓦片とともに補充粘土を加え、その上に丸瓦を据え付けることで段を構築したことがわかる。下段2列の段では両端側の丸瓦上に平瓦が載せられており、丸瓦の段による焼台を補修する際には、その上に平瓦を敷き並べて焼台としたものとみられる。

焼成部と燃焼部の間には高さ約85cmの階が設けられている。階の立ち上がりは約7°である。階は現状では粘土の剥落により中心部分が窪んでおり四字状をなしているが、その剥落部分の内側には別個の被熱面が認められる。そのため、階は当初は地山を削り出しもしくはわざかに粘土を貼り付けたものであったのが、後に粘土を10cmほど貼り足して改修したものとみられる。

燃焼部 内法幅約1.8mで、焼成部側約2.0mを検出したが、焚口部側は調査範囲外である。燃焼部の埋土には被熱したスサ入り粘土ブロックが多量に含まれており、また一部には倒壊したかのように列をなしていたものもみられた。これらの粘土ブロックは窯壁に由来するものと考えられるが遺存する窯壁部では粘土ブロックの単位は判然とせず、天井部が粘土ブロックで構築されていた可能性もある。粘土ブロックは縦10cm、横30cm、高さ10cmほどのものが主体を占める。

燃焼部は焼成部と一連で地山を掘り込んだ内側に構築されており、掘方は最大で窯壁の外側65cmに及ぶ。北側は調査区外のため掘方の規模は不明である。掘方は二段掘状をなしており、現地表面から約55cmほど垂直に掘り込んで一端平坦面をなし、再びほぼ垂直に45cmほど掘り込んでほぼ水平な燃焼部床面に至る。下段部分では厚さ10cmほどの粘土を貼り付けまたは積み上げて窯壁としており、上段部分は底部で厚さ30cmほどの粘土を積み上げて窯壁とする。窯壁には一部で粘土の積み上げ痕跡が残るが、遺存部位が少なく詳細は不明である。掘方内には地山由来とみられる砂質土が充填される。

燃焼部の床面には階の付近25cmほどを除いて粘土の貼り付けはみられず、地山面をそのまま床面としている。燃焼部には薄い炭層が堆積しているが、地山削り出しの床面直上ではなく、間に暗黄褐色細砂を挟んでいる。この細砂の性格は不明である。

灰原 灰原は東西5.5mを検出したが、調査範囲外の

西側にも続く。地山を横断面略台形状に掘り込み、部分的に10~25cmほどの厚さの整地土を加えている。地山の掘り込みにより、南に位置するSY340の焼成部窯壁が一部壊されている。焚口や前庭部は調査範囲外のため不明である。燃焼部床面の標高は西端で約95.65mで灰原東端の標高は約96.30mであり、灰原のほうが65cmほど高いが、現状で検出した灰原は灰原掘方の南端付近であり、燃焼部中軸と灰原中軸を一連で検出したものではないために生じた高低差と考えられる。

灰原の炭層は2層確認できる。下層炭層は最大で25cmほどの厚さで、東西約1.7mに及ぶ。西側では東西約85cmの範囲を深さ20cmほど掘り下げて炭溜めとしている。下層炭層の上に最大で20cmほどの間層を挟んで上層炭層が堆積する。上層炭層は調査区西端外に及ぶ。焚口側では最大厚10cmほどで、西端では最大で35cmほど堆積する。

上層炭層のさらに上には瓦片を多く含む明~褐色シルトの包含層が堆積し、さらに間層を挟んだ上層の明褐色細砂からは焼土片が多量に出土している。調査範囲外のため不明だが、より北方にも別個の窯が存在していた可能性があり、これらの瓦片や焼土片は位置する別個の窯に由来するものもある。

灰原の下層では、SY340の焼成部窯壁に近接する位置で南北約0.7m、東西約1.0mの土坑SK346を検出した。SY340の窯壁を一部削り込むように掘り込んでおり、SK346はSY340の廃絶後、SY345の操業前のものとわかるが、出土遺物等ではなく、用途は不明である。(川端)

4 出土遺物

瓦 磚 類

出土した瓦磚類の集計は表32に、奈良時代の主要な瓦を図244に図示した。

SY330 1の6284Cは全体に黒色を呈し、瓦当側面に範端痕跡がある。上面の表土出土。このほかの軒丸瓦は細片で、表土や表土下の包含層から出土している。2の6663Cは唐草文に彫り直しのないCaで、範傷はなく、曲線類1である。燃焼部の攪乱土出土。鬼瓦1Aは側面と底面を含む全体の4分の1ほどが残存する。焼成部第2次床面の構築土内出土。磚は焼成部第2次床面にともなう焚口の構築材で、寸法は29.6×15.7×8.0cmである。灰原からは横位の繩タタキを施す平瓦、凹面に側板痕跡、

表32 第523次調査出土瓦類一覧

SY330		SY340		SY345	
型式	種類	点数	型式	種類	点数
6225	C	1	6284	D	1
6284	C	1	6284	?	1
6284	?	2	型式不明	3	6281
型式不明	1		型式不明	2	Bb
6663	C	2			1
型式不明	1				6663
鬼瓦	IA	2	鬼瓦	IA	3
翼斗瓦		2	翼斗瓦		2
面瓦		2			
隅切瓦		2			
※このほか立合式不明軒丸瓦1点出土					
丸瓦		平瓦		磚	
重量		281.64kg	410.93kg	26.40kg	-
点数		2461	4116	17	2

布縫し合わせ目をもち、凸面は純タタキで筋端側を幅10cmほどすり消し平瓦が出土した。

SY340 3の6284Dは接合式で黒色を呈する。窯上の表土出土。その他の軒丸瓦は細片で焼成部内埋土から出土した。5の鬼瓦IAはほぼ完形で全体に黒色を呈しており、文様も鮮明である。右外縁内側に筋端側面には筋端痕跡がみられる。焼けひずみ、二次的な被熱の痕はみられない。焼成部床面上から出土した。

SY345 6281Bbは外縁と丸瓦部の一部が残存する。灰原上に堆積する包含層出土。4の6225Cは接合式で圓線の外縁に筋端が認められる。包含層出土。このほかの6225Cは包含層と上層灰原から出土している。6663型式の軒平瓦は焼成部内埋土から出土。

以上のうち、窯で焼成された製品といえるのは灰原の出土品である。SY330の凸面横位置タタキおよび凸面一部すり消しの平瓦、SY345の6225Cがそれにあたる。

土 器

SY330の焼成部第2次床面の構築土、燃焼部の埋土、灰原、SY345の上層炭層などからは奈良時代の須恵器や土師器が極少量出土しているが、細片のため詳しい時期は不明である。

5 まとめ

立地 今回調査したSY330・340・345は奈良山丘陵の南斜面に位置し、南に向かって突出する小丘の東西斜面で検出した。本調査で検出した瓦窯は標高約95m、1972年に調査した瓦窯は標高約92mに位置し、その高低差は3mに達する。また、SY330の軸が南東に振っていることは、SY330の南面に平坦面が存在したことを示唆する。今回検出した瓦窯は1972年の瓦窯とは連続しない別の傾斜面に位置していたと考えられ、小丘は、上下に2つの斜面をもつ地形であった可能性が高い。



図244 第523次調査出土軒瓦・鬼瓦 1:4 (5は1:8)

窯構造 調査地の現状や遺構の残存状況から窯構造全体をあきらかにすることはできなかった。ただし、SY330・340・345とも焼成部を検出し、焼成部の大きさや床面の傾斜角度などから、すべて窑窓と判断した。また、焼成部の長軸が幅よりも長いという特徴から、3基の窯は奈良時代前半期（平城遷都前）に操業していたものであろう。出土瓦でもっとも新しい型式は平城瓦罐年II-2期に属する6225C、6663Cであり、その他の瓦もすべて奈良時代前半期に属する。上述した遺構の年代観は出土遺物とも矛盾しない。

今回の調査では、中山瓦窯における瓦窯構造と生産した瓦をあきらかにすること重要な資料を提供するとともに、瓦窯全体の規模や地形を推測する手がかりを得ることができた。

(今井晃樹)

註

- 京都府理文化財調査研究センター「奈良山瓦窯跡群」1999。

平城京左京二条二坊十四坪の調査

—第524次

1はじめに

宅地造成にともなう事前調査である。平城京左京二条二坊十四坪は、法華寺阿弥陀淨土院が所在する十坪の南東に位置し、調査地点は坪の北西隅からやや東になる。なお、調査地点の北側には二条条間路、二条条間路を隔てて北西には、法華寺の寺域南辺中央部に設けられた門SB7110（「年報 1998」）、西側5mに東二坊訪問東小路が所在する。

2基本層序

調査区は、東西3m、南北16mのトレンチを設定した。基本層序は、現地表面下0.4mで水田耕土・床土層（厚さ0.7m）、その下に葦川の氾濫によるとみられる粗砂層（厚さ5cm）が堆積し、現地表面下1.2m（H=60.50m付近）で奈良時代の遺構面を検出した。遺構面は整地土上に展開するが、調査区南側では整地土を2層にわたり確認した。上から土器片などを含む整地土1（厚さ20~30cm）、整地土2（厚さ20cm）であり、それぞれの整地土から掘り込まれる遺構を検出した。これらは、いずれも奈良時代に属することから、奈良時代の遺構面が上下2面にわたって存在し、出土遺物から奈良時代前半（整地土2）と後半（整地土1）と少なくとも2時期に分かれる。

3検出遺構

遺構は、X-145.410からX-145.414付近にかけてSD10575とSD10576、X-145.417付近にSD10577、塙ないしは建物と推定される南北方向の掘立柱列2条、整地土2（下層の整地土）から掘り込まれた東西溝SD10580などを検出した。SD10575・10577、および掘立柱列は、いずれも整地土1（上層の整地土）から掘り込まれる。なお、SD10575・10576の新旧2条の東西溝は、位置や周辺の調査成果などから、いずれも二条条間路南側溝と考えられる。

二条条間路南側溝SD10575 奈良時代の二条条間路南側溝と考えられる素掘りの東西溝。掘り直しの痕跡が確認できることから、新旧2時期分の溝があり、古い

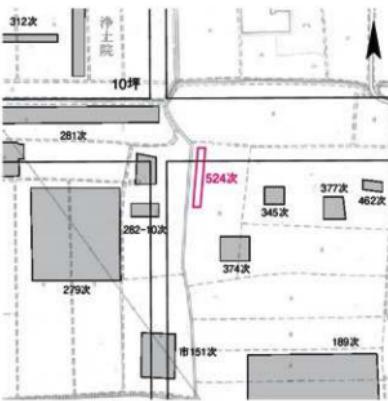


図245 第524次調査区位置図 1:2000

SD10575とその南側を掘り込むSD10576とに分かれる。このうちSD10575は、幅4m、深さ0.65mを測り、後述するSD10576より幅広く、断面形態が逆台形状を呈する。埋土は砂や粘土を主体として厚く堆積しており、豊富な流水があったと判断されるが、最下層は木屑などの有機物が主体となっており、SD10580より少量だが、木簡、木製品、種実などが出土した。

二条条間路南側溝SD10576 奈良時代後半の二条条間路南側溝と考えられる幅2.5m、深さ0.65mを測る素掘りの東西溝。不整なV字状の断面形態を呈し、埋土は砂が主体で、一定量の流水があったと判断される。埋土から土器や瓦片などが出土した。

東西溝SD10577 素掘溝で、幅約1.5m、深さ20~25cmと浅い。埋土は砂質土が主体で、瓦が多く出土したが、そのなかには號斗瓦と推定できるものも含まれる。加えて、SD10575でも瓦が多く出土した点などを勘案すると、SD10575とSD10577との間に築地塙が存在し、SD10577が築地塙の内溝であった可能性が考えられる。いずれの溝も整地土1を掘り込むことから、築地塙が展開したのは奈良時代後半であろう。

掘立柱塙SA10578 SA10578は、一辺1~1.2m、深さ0.4mと大型の方形柱掘方を有する南北塙。SD10577の際まで展開することから区画塙と推定した。

掘立柱塙SA10579 SA10578と同様、掘立柱塙と推定したSA10579は、SA10578のすぐ西脇に位置する径0.4

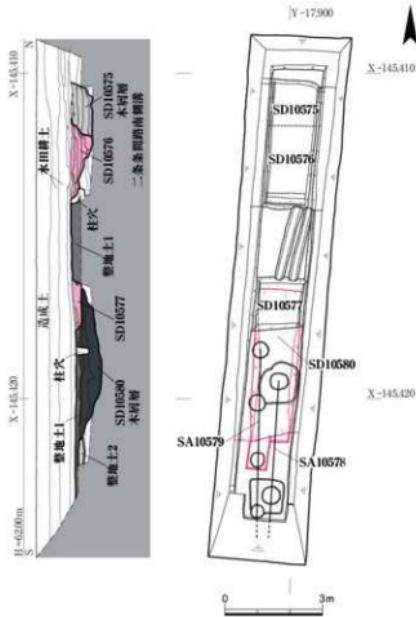


図246 第524次調査区遺構図・土層図 1:150

m、深さ0.4mの平面円形を呈する南北方向の堀であり、調査区内で3箇所検出した。これら2列の堀は、重複関係からSA10578→SA10579の順で構築され、今回の調査で坪内の区画堀の新旧を把握したと考えておきたい。

東西溝SD10580 これまでに取り上げた遺構より下層に展開する素掘溝であり、南北最大幅4.6m、深さ0.65m。断面形態は、ゆるやかなU字状を呈する。SD10575と後述する木製品や木簡が出土した木屑層の状況が似通うことや、湧水が多いことなどを勘案して、ここでは溝と推定したが、全体を把握できおらず、土坑である可能性も存在する。埋土は、砂質土や粘土を主体とするが、最下層は厚さ40cm前後の木屑層からなり、この木屑層から木筒、木製品、土師器や須恵器などの土器が多数出土した。出土土器はいずれも奈良時代前半におさまることから、SD10580は奈良時代前半の所産と考えられる。またSD10580は、埋没後に整地1が覆うことから、整地1が奈良時代後半の整地と考えるのが妥当だろう。



図247 第524次調査区全景（北から）

4 出土遺物

土 器

本調査では、整理用コンテナ6箱分の土器が出土した。いずれも奈良時代の土師器および須恵器からなり、SD10580の木屑層から後述する木筒群と共に伴する一群と、二条室間路南側溝から出土した一群とがある（図248）。

まず、奈良時代前半と考えられる下層の東西溝SD10580から出土した土器は、土師器および須恵器食器類（1～3）と貯蔵具（4）、転用鏡（10～12）などからなる。1・2は土師器杯C。1は復元口径19.2cm、復元高2.6cm。口縁部を横ナデし、外面はハラケズリ後横方向のヘラミガキ調整を施す。2は口径17.4cm、器高2.8cm。口縁部から外面中位まで横ナデ調整する。内側面に斜放射暗文、底面に螺旋暗文を施す。3は須恵器皿B身。復元口径22.2cm、器高3.8cm。4は須恵器平瓶。頭部以上を欠損し、胴部内面に漆が付着することから、漆容器として使用されたとみてよい。10～12は須恵器壺転用鏡。いずれも内面側に墨を塗った痕跡が明瞭で、12は墨痕も明瞭。SD10580出土土器は、暗文を有する土師器など、その特

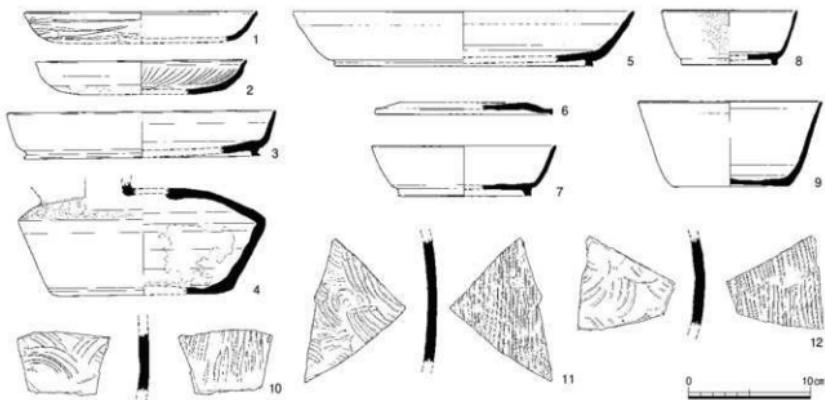


図248 第524次調査出土土器 1:4

微からみて平城宮土器Ⅲまでにおさると考えられ、出土土筒の年代とも調和的である。

奈良時代後半の二条条間路南側溝SD10576からは、食器類ばかりが出土し、図化ができた個体はいずれも須恵器である(5・7・8)。5は皿B。口径28.0cm、器高4.5cm。7・8はともに小ぶりな杯B身。復元口径は7が15.1cm、8が11.0cm。7にみられるやや丸みをもつ体部や、8のように比較的鋭角に立ち上がる体部といった特徴は、平城宮土器Ⅳ以降に多く、SD10576が奈良時代後半の所産であることを示唆する。

一方、SD10576以前の二条条間路南側溝であるSD10575出土土器は少量にとどまり、図化できる個体は1点のみである。6は須恵器杯B蓋で、復元直径14.6cm。均一でない厚みだが、端部を下方へおさめる形状は、平城宮土器Ⅲ頃の特徴である。(青木 敬)

瓦 砖 類

本調査で出土した瓦の一覧は、表33の通りであり、ここでは主要な軒瓦を報告する(図249)。SD10575からは1の6311Baが出土。これまでにも左京二条二坊から比較的まとまった点数が出土しておりⅡ-1期に位置付けられる。また、縁軸の平瓦片が1点出土した。SD10576からは6276Gと3の6751Aが出土。6276Gは高台・峰寺瓦窯産とされる藤原宮式だが、平城京内では法華寺旧境内において数点出土している。6751Aは平安時代と

表33 第524次調査出土瓦磚類一覧

軒丸瓦			軒平瓦		
型式	種	点数	型式	種	点数
6276	G	2	6641	F	1
6311	Ba	1	6702	?	1
			6721	C	1
				G	1
			6751	A	1
				型式不明(奈良)	4
軒丸瓦計			軒平瓦計		
丸瓦	平瓦	磚			
重量	36.933kg	124.278kg	6.311kg		
点数	363	1445	8		

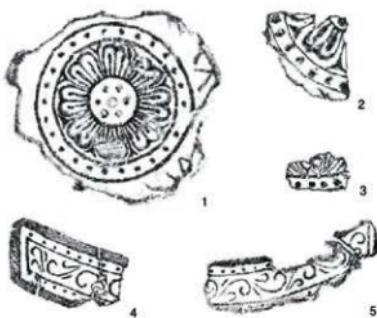


図249 第524次調査出土軒瓦 1:4

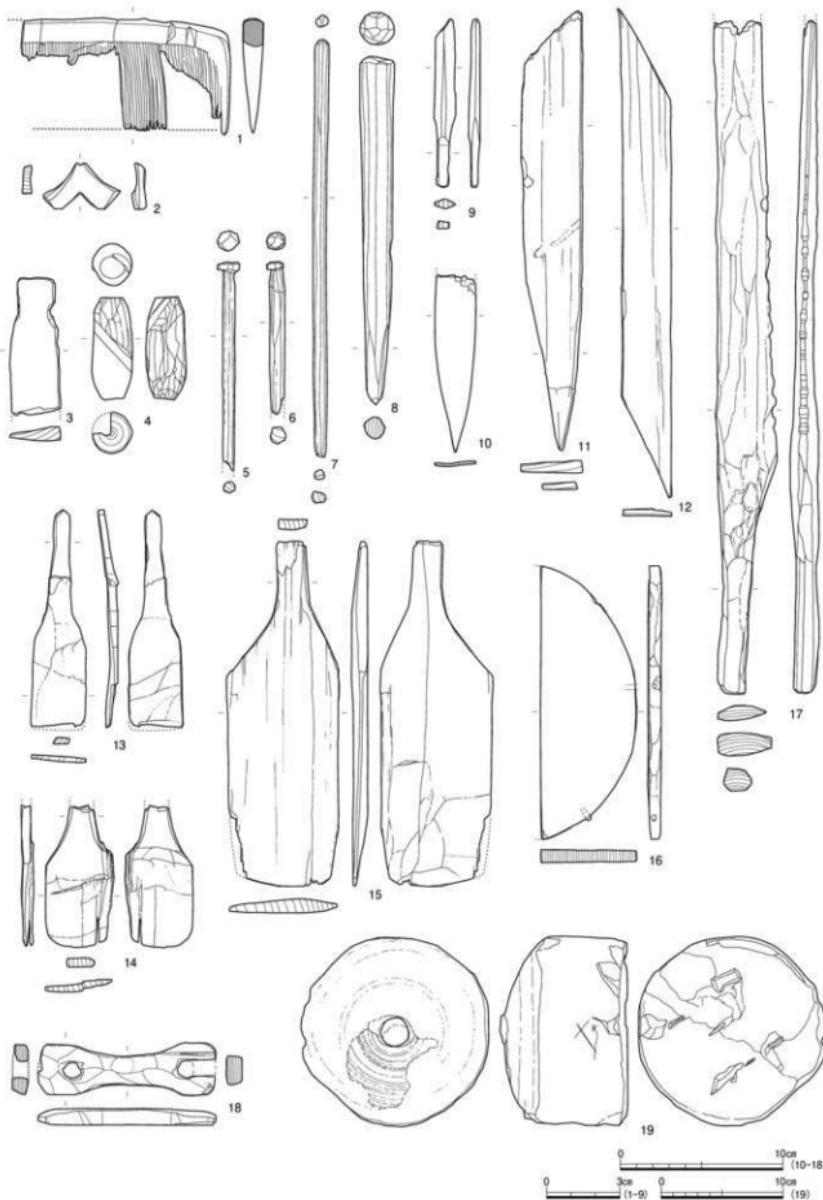


図250 第524次調査出土木製品 (1~9は1:2, 10~18は1:3, 19は1:4)

されるが、法華寺阿弥陀浄土院を中心に出土している。SD10575の木屑層からは4の6721Cが出土しており、II-2期からIII期に位置付けられる。そのほか包含層から2の6276Gと、5の6721G、6641Fが出土。6641Fは西田中・内山瓦窯産の藤原宮式。6721GはII-2期。(川畠 純)

木製品

SD10580から707点、SD10575木屑層から14点の木製品が出土した。前者の内訳は服飾具(横桿1点、留針2点)、遊戯具(琴柱1点)、祭祀具(斎弔4点、織形1点)、食事具(匙形木器・杓子状木器7点、箸20点)、容器(曲物底板1点、曲物側板4点)、その他(付札3点、柾留具1点、さらさら棒1点、部材15点、楔2点、柾轆挽き残り1点、籌木7点、加工棒586点、加工板50点)である。後者は、加工棒14点のみである。ここでは、大半を占めるSD10580の主な木製品について記す(図250)。なお分類については「木器集成図録」に準ずる。

1は横桿。平面が長方形で両端がやや丸みをもつA II型である。残存長8.6cm、高さ4.8cm、厚さ0.9cm。2は琴柱。柾目材を三角形状に整形し、上端に弦受けの切れ込みを入れ、底面を山形に切り欠き二股に足を作る。幅32cm、高さ19cm、厚さ0.5cm。3は付札。断面台形の薄い板目材を素材として、上部両端に切れ込みを入れる。下半を欠損する。残存長5.6cm、幅2.0cm、厚さ0.6cm。4は柾留具か。小ぶりな枝状の素材をラグビーボール状に整形し、長軸に対して斜めに径0.3cm程度の孔をあける。5・6は留針。両者とも頭部を鉤頭状に作り出すA型式。いずれも先端部は欠損する。5は身部径が頭部よりも小さく下方まで直線的に伸びるが、6は頭部と身部の最大径がほぼ同じで頭部下で窄まる。5は残存長8.5cm、頭部径0.9cm、身部径0.5cm。6は残存長6.3cm、身部径・頭部径ともに0.7cm。7は箸。完形品で、長さ17.2cm、径0.7cm。下端に向かってわずかに細くなる。8は加工棒。一端に最大径をもち、他端に向かって細くなる。表面の加工痕が明瞭に残り、断面は多角形となる。長さ14.2cm、最大径1.4cm。9は織形。三角形柳葉織を模したもので、切先を斜めに裁断する。10~12は柾木。10は薄い柾目材を利用し、下端が尖る。上半部は欠損する。残存長9.8cm、幅2.5cm、厚さ0.2cm。11・12はやや厚みのある板目材を素材として、一端あるいは両端を尖らせる。11は長さ27.0cm、幅3.8cm、厚さ0.7cm。12は両端を斜めに裁断

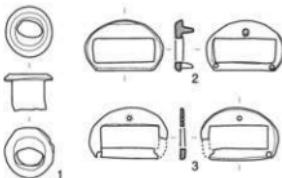


図251 第524次調査出土金属製品 2:3

するA I型式。長さ30.0cm、幅3.6cm、厚さ0.5cm。13は、匙形木器。身部先端を直線的につくり、柄部先端が山形をなす。下端をわずかに欠損する。残存長13.4cm、幅3.4cm、厚さ0.6cm。14、15は杓子状木器。両者とも身部先端を直線的につくり、身部裏面に先端を薄くする加工を施す。柄部を欠損する。14は残存長8.7cm、幅4.3cm、厚さ0.6cm。15は残存長21.1cm、幅6.9cm、厚さ1.0cm。16は曲物の底板。柾目板を利用する。側面には木釘および木釘穴を残す。半分以上欠損する。復元径18.8cm、厚さ0.8cm。17はさらさら棒。板目材を剣状に整形し、片側辺に鋸歯状の加工を施す。上端は欠損する。残存長41.4cm、最大幅3.6cm、厚さ1.8cm。18は部材の把手。長方形の板目材を素材として、長軸両端が幅広で、中央がもっとも幅狭になる。両端に径1.0cmの円孔を穿つ。長軸12.1cm、両端の短軸3.2cm、中央の短軸1.8cm、厚さ1.0cm。19は、挽物製作時に柾轆に残った材。柾轆に固定した面には、5つの爪跡が中央に1つとその上下2つずつ配置される。反対の面は、挽き出しの際の同心円状の痕跡が残り、中央には径2.5cmの突起が認められる。また側面に「×」の刻印が施される。径15.4cm、厚さ10.5cm。

金属製品

SD10580から金銅製環状金具1点と銅製丸柄1点が出土した(図251)。1は金銅製環状金具。径1.3cm、高さ1.0cm。大力などの把頭にみられる眼に用いる金具か。2、3は丸鞆である。2は表金具で、裏面に3つの鉢足を鋳出す。表面に黒漆の痕跡がわずかに残る。長軸2.1cm、短軸1.4cm。透孔は縦0.6cm、横1.6cm。3は裏金具で、長軸2.1cm、短軸1.4cm。透孔は縦0.6cm、横1.6cm。両者は同一個体と考えられる。

自然遺物

植物種実 SD10580・10575下層からは多くの植物種実が出土した。現在整理中であるため、概要のみを示す。

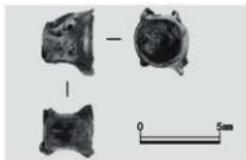


図252 第524次調査出土動物遺体（トビウオ科？）

ととする。木本類では、モモ核、オニグルミ核、サンショウ種子、ナツメ核、キイチゴ属核、ブドウ属種子、アケビ属種子、マタタビ属種子、クリ皮など、草本類として、メロン仲間種子、ナス属種子、エゴマ果実、シソ属果実、タデ科果実、イネ穎、アワ有ふ果などがあり、多種におよぶ。食用植物でもっとも多いのはメロン仲間で、ナス属やサンショウが目立つ。雑草と考えられるタデ科果実も多い。

（芝原次郎）

動物遺体 SD10580木削層から、トビウオ科の可能性がある腹椎が1点出土した（図252）。骨は焼けており白色化していた。また、種は不明であるが、哺乳類の歯の破片も出土した。

（山崎 健）

木 簡

奈良時代後半の二条条間路南側溝SD10575から14点（うち削屑13点）、十四坪北西隅の下層の東西溝SD10580から4,355点（うち削屑4,253点）、計4,369点（うち削屑4,266点）が出土した。現状で1文字以上読み可能なものは、削屑を除くと2割弱、削屑では5%弱、全体では約5%となる。ここでは主要なものを報告する（図253・254）。

SD10580出土木簡でもっとも目立つのは、3のような人名を記す木簡である。煩雑になるため今回は割愛するが、削屑の大半も人名に由来するものが占めている。14～17にみえる十二支は出勤日を示すとみられ、1・13・23などに舍人がみえることともあわせて考えると、舍人の勤務管理に関わる可能性がある。1によればこれらの舍人の勤務場所には「高殿」（棲間建物）があった。

4・5は接点が明瞭でないため別番号としたが、木目は酷似する。4の「皇」に続く文字は他の可能性も皆無ではないが、5の「太子」の上の文字の候補は「皇」以外に考えにくく、4・5の順で上下に連続する可能性がある。そうでない場合も同一木簡の削屑であるのはまず間違いない。したがって、皇太子付きの者の勤務人数を書き上げる記載に由来する削屑とみられよう。

6～9は紀年銘資料。6の養老7年は723年、8の神龟元年は724年である。8の存在や9との類似、内容・遺構からうかがえる資料群としての一括性の高さからみて、7・9も神龟元年の可能性が高い。19の郷里制の記載とも矛盾しない。

7・9・10にみえる主典は第四等官の一般的な表記で、特定の用字をもたないこの表記は令外官に用いられる。9にみえる正八位下は概ね官・職・衛府クラスの大主典に相当するが、官司の具体名は同定できない。

11は衛門府に宛てた移の削屑とみられる。12の「府」も某衛府の可能性が高い。2に「下番」（非番ではなく月の後半の勤務の意であろう）とあり、番上勤務の管理がうかがえるので、SD10580出土木簡に多数みえる人名に、舍人だけなく兵衛が含まれる可能性も考える必要がある。

18～20は貢進物付札。18は河内国大県郡の米俵の荷札とみられる。郡単位の他の貢進は他に類例がない。19は類例の少ない庸塙の荷札。庸塙の貢進量は1人あたり1斗5升で（『平城官木簡3』2892解説参照）、2人分を合成するのが一般的だったらしい。ここではコザトを越えて合成されている。なお、備前国賀茂郡兒鶴郷からの貢進には、平城宮跡内裏北外郭官衙の土坑SK820出土の調塙の荷札2点の事例がある（平城宮木簡322・323号）。20の中男役物は、養老元年（717）に調副物と中男の調を統合して新たに設けられた中男作物のことであろう。税目の名称として確立するのは8世紀後半以降で、文字通り「中男を役して進める貢進であったことを示す表記といえる（『続日本紀』養老元年11月戊午条）。21は胴脂の荷札。能登国と若狭国に類例があるが、調と明記のあるのはこれが初めてである。

22は銭の付札。「下」は某所から下給するの意であろう。23は横材木簡の削屑で、位階ごとに帳簿による勤務管理をおこなっていた様子を示す。24は習書木簡。「春」を分解して示す。「夷」の異体字といわれる「夷」が、「秦」のほか「春」の一部でもあることを再認識させる興味深い事例。SD10575出土の25も銭の付札とみられるが、「山田余」は不詳である。

以上概観したように、SD10580出土木簡は、内容的にも一括性の高い一群である。1などにみえる舍人は、4・5の皇太子の存在や養老・神龟の交わりという年紀から

夫大春 春郊

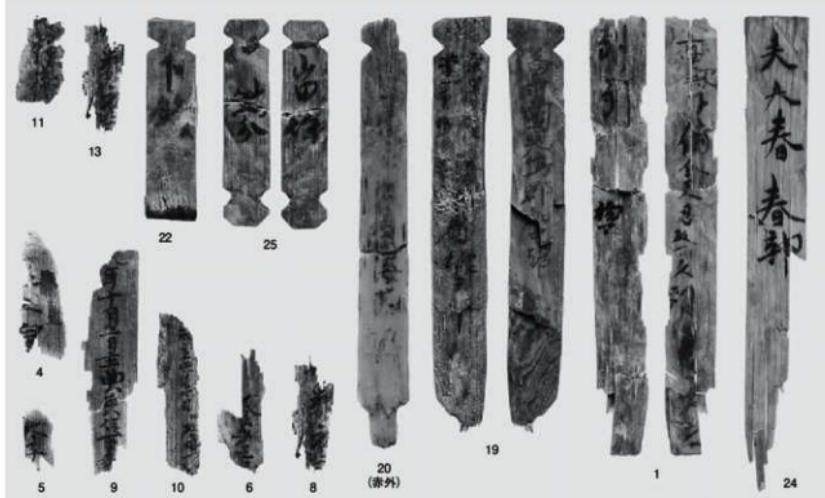


図253 第524次調査出土木簡

13	12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1	24
□宿舎人	□宿	□移斎	□主典日下部	〔元々〕 □年十月一日主典正八位下 主	〔神々〕 □電元	〔神々〕 □元々	〔元々〕 □元年□一月主典正八位下 主						
991	991	991	991	991	991	991	991	991	991	991	991	991	991
○宿舎人	○宿	○移斎	○主典日下部	○年十月一日主典正八位下 主	○神々	○元々	○元年□一月主典正八位下 主	○元年□一月主典正八位下 主	○元年□一月主典正八位下 主	○元々	○元年□一月主典正八位下 主	○元年□一月主典正八位下 主	○元年□一月主典正八位下 主
991	991	991	991	991	991	991	991	991	991	991	991	991	991

図254 第524次調査出土木簡积文



図255 SD10580全層（中央下の黒色の範囲が木筒層、北西から）



図256 SD10575（左）とSD10577（右）（西から）

考えると、即位前の聖武天皇、すなわち首皇子の春宮舍人とみてよい。衛府の活動もその警備担当として理解が可能である。このように全体として皇太子首皇子に関わる官司の活動に取組することが見通せよう。7・9・10にみえる主典が置かれた官司がその官司そのものなのか、単に木筒の差し出しであるだけで木筒群と直接関係ないのかは概には決めがたいけれども、後者であるとしても、点数的なまとまりからみると、密接な関わりをもって活動していることは確実である。

即位前の首皇子の居住地としては、平城宮東張り出し都南半の東宮に求めるのが一般的である。今回の調査地は二条条間路を挟んで法華寺旧境内南端に接する場所であり、藤原不比等とゆかりの深い地域である。また西の左京二条二坊十一・十二坪には後に離宮とみられる施設も設けられる（『年報 1997-III』・『年報 1998-III』を参照）。SD10580出土木筒は、調査地の平城宮東南に隣接するという地城的性格を如実に反映するものといってよい。今後、出土遺構の性格や調査地周辺の遺跡との関わりを慎重に考慮しながら、さらに究明していく必要があり、狹小な調査ではあったが極めて重要な資料群が提供されることになった。

（渡辺晃宏）

5まとめ

本調査の成果をまとめると、以下の3点に集約することができる。

まず、平城京二条条間路南側溝を検出した。この側溝は、新旧2時期にまたがっており、流水にともなう砂が厚く堆積していたことから、砂の堆積が早く進行し、埋没が進んだことから、溝を再度掘り直して利用したと考えられる。なお、調査区内での側溝幅はSD10575で4m、SD10576で2.5mと旧段階のほうが幅広だが、かなりの流

水量が推測できるため、流水にともなって側溝肩が浸食されたことにより溝幅が広がった可能性もある。

つぎに、二条条間路南側溝の南側で奈良時代前半の溝らしき遺構を検出し、最下層の木屑層に木製品や木筒が大量に出土した。出土木筒は、8世紀第2四半期に位置付けられるもので、共伴する遺物も木筒とほぼ同じ時期の所産とみられ、その資料的価値は高い。なお、こうした条間路の内側にめぐらしが性格不明の溝は、近隣調査区でも検出している。今回、即位前の聖武天皇、すなわち首皇子に関わる官司の活動がうかがえる木筒がまとまった数量出土した。加えて、漆が付着した須恵器瓶や挽物を製作した際に生じた残材が含まれていることから、付近に皇太子に関わる官司が存在していたと仮定すると、そこには木工に関わる工房も併設されていた可能性が浮上する。これらSD10580出土遺物は、奈良時代前半における二条二坊十四坪に当時皇太子であった首皇子に関連する施設が存在したことを示唆するものであり、当該坪の土地利用を考える上で重要な手がかりを提供することとなった。

また、奈良時代後半になると、二条条間路南側溝の南側は、築地塀によって莊嚴されていた可能性が高いこともあきらかになった。これは、北側に法華寺阿弥陀淨土院が建立され、それにともなって周辺も整備された可能性を示唆する。法華寺阿弥陀淨土院は、光明皇后の一周年忌會に向けて天平宝字4年（760）からその翌年にかけて造営されたと考えられ、これに近接した時に、門SB7110がある二条条間路北側のみならず、南側まで一體的に整備された可能性を示唆する。寺院など重要施設の整備は、当該部分にとどまらず周辺でも対象とした、広く景観を考慮したものだった可能性があるといえよう。

（青木）

海龍王寺旧境内の調査

—第525次

1はじめに

本調査は、海龍王寺写経道場建設とともに発掘調査である。調査区は、海龍王寺境内西側、海龍王寺西金堂から西北へ約4.3mの地点に位置する。なお調査区の周辺は、長く民有地となっていたが、昭和以降の換地によりふたたび寺地に復した。調査区の規模は、東西10m、南北3m、調査期間は2014年2月19日から2014年2月28日までである。なお、後述のとおり西回廊の一部と考えられる遺構を検出した。協議の結果、写経道場を当初計画位置より西側へ移して建設する計画変更がおこなわれた。それにともない、調査区も西側へ2m拡張して調査をおこなうとともに、回廊に関わる遺構の保存が図られた。海龍王寺をはじめ関係各位に謝意を表する。

2 海龍王寺の沿革と既往の調査

海龍王寺の沿革　海龍王寺は、「続日本紀」や「正倉院文書」などに「隅院」や「隅寺」などの名で呼ばれており、海龍王寺の呼称は中世以降とされる。創建については詳らかではないが、「正倉院文書」にある写経関係の文書から、天平8年(736)にはすでに存在していたらしい。寺地は、左京一条十三・十四坪と一条三坊三・四坪におよぶ。平安時代には興福寺の管領であったが、12世紀にはかなり衰微していたようである。

ところが鎌倉時代になると、寛元元年(1243)に承久の乱で没収された河内国八尾の水田を還付する願いを出し、翌年には金堂・講堂・東西両金堂・僧房の修造を願い出ている。ここで注意されるのは、回廊の文字がみえない点であり、そこを勘案すると13世紀前半までに回廊は失されていたと考えるのが妥当であろう。そして、西大寺復興で名を知られる叡尊が、嘉禎2年(1236)から暦仁元年(1238)まで海龍王寺に住し、その後正応元年(1284)に西金堂の大修造や経藏の造営、堂宇の復興に注力したことにも注意される。

しかし、その後室町時代に寺勢は衰え、江戸時代には一層衰微したが、それでも寛文6年(1666)には本堂の再建など伽藍の修造はおこなわれていた。ただし、この

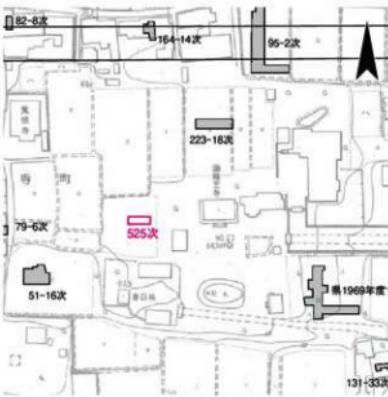


図25 第525次調査区位置図 1:2000

時点で講堂・食堂・西室・楼門などは失されていた。

既往の調査　1969年12月、経藏の東隣接地で実施した発掘調査では、海龍王寺創建期と推定される南北棟の掘立柱建物等を検出した(『年報1970』)。つづく1970年7月海龍王寺旧境内の防災工事に際し、東門から中門、庫裏や客殿周辺での消火栓導水管埋設にともなう立会調査がおこなわれ、東・南面回廊の一部を検出した(『年報1971』)。この際に確認された東回廊基壇の羽目石は、高さ77cm、幅47cm、厚さ9cmを測る。1991年12月に伽藍の北方で実施した第223-18次調査では、金堂から北へ約30m付近の地に、食堂と推定される東西長が15m以上を測る東西棟の基壇建物を検出した(『1991年度 平城概報』)。

このほか、1965~66年に実施した西金堂の修理工事に際して、西金堂の構造は無論、中金堂や西面回廊基壇の構造についても知見が得られている¹⁾。

3 基本層序

基本層序は、上から順に表土層(厚さ15cm)、旧耕土(15cm)、整地土1(10cm)、整地土2(40cm)と2層の整地土が展開し、さらに黄橙粘質土(地山)と続く。整地土1の上面は標高68.4m、整地土2では標高68.3mで検出した。整地土1・2には、いずれも古代~中世の瓦や基壇外装材とみられる凝灰岩片が混入していることから、整地は中世以降の所産と考えられるが、それは叡尊が住した時期にともなう可能性もある。なお、遺構検出面は、整地土1・2両方で認められ、計2面が存在する。地山は、Y-17.855ライン付近以東とY-17.847ライン付近以西で0.4mほど落ち込んでおり、この落ち込み部分を埋

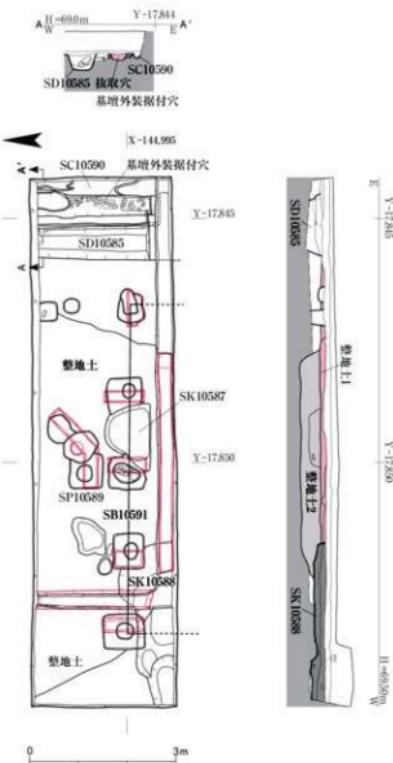


図258 第525次調査区遺構図・土層図・断面図 1:100

め立てるのが整地土2である。さらに地山と整地土2を覆うように整地土1が展開する。なお、落ち込み部の地山は、標高68.9m付近で確認した。

4 検出遺構

整地前の遺構

西回廊SC10590 整地前の遺構として、調査区西側の地山上面で、海龍王寺西回廊にともなうと考えられる凝灰岩製基壇外装ならびに雨落溝の残欠を検出した。残存状態が悪いため正確な規模と構造は不明だが、地覆石らしき石材の残欠は認められないことから、基壇外装は地覆石をもたず、羽目石を直接据え付けたようである。凝灰岩の残存状況からすると、羽目石は幅40~50cm前後、奥行20cm前後と推定できる。回廊の基壇土は、削平によって残存しておらず、羽目石も上部を欠失し、底部付近をわずかに残すのみである。基壇外装の据付穴は、布掘状を呈し、幅約40cm、基壇側に外装材を寄せて据え付



図259 西回廊SC10590基壇外装残欠（奥に西金堂、北西から）

けており、羽目石の背面にある据付穴の埋土は、厚さが1~3cm程度とうすい。調査区北端の羽目石は残存せず、抜取穴が検出されたため、当該部分は石材がすべて抜き取られたと考えられる。

西回廊の雨落溝は、後世に掘削された南北溝SD10585によって大半が失われているが、東の溝肩部で玉石敷を抜き取った痕跡が確認できたこと、南北溝に径20cm前後の円窪が数点確認できることなどから、乱石組だった可能性が高い。なお、基壇外装の外端から雨落溝の抜取穴までは30cmほど離れており、この間に幅狭の穴走りが存在していた可能性もある。

整地後の遺構

整地土2から掘り込まれた中世以降の遺構は、掘立柱建物1棟、柱穴2基、土坑2基、ピット5基を検出した。

掘立柱建物SB10591 Y=17.846ライン以西で検出した東西4間の東西棟建物であり、調査区の南側まで展開すると考えられる。柱掘方は方形で、一辺0.6~0.8m、深さ0.25m。柱掘方ならびに柱抜取穴双方に瓦片が混じる。

土坑SK10587 東西13m、南北0.95m以上、深さ0.3mの不整形を呈し、軒瓦をはじめとした瓦片が大量に出土した。

土坑SK10588 東西3.4m以上、南北1.2m以上、深さ0.3mの不整形を呈し、こちらでも瓦片が大量に出土した。SK10577・10588とも、瓦などを投棄したゴミ穴であった可能性が高い。

表34 第525次調査出土瓦類一覧

軒丸瓦		軒平瓦		軒棟瓦	
型式	種類	点数	型式	種類	点数
6140	A	1	6702	G	3
6282	D	3	6721	Db?	1
巴(中世)		4	E	2	
巴(近代)	1	6734	A	1	軒棟瓦計 4
古代	5	重弧文	2		その他
時代不明	2	古代	2	丸瓦(刻印)	4
		中世	1	平瓦(刻印)	6
		近世	1	隅切平瓦	1
				鬼瓦(近世)	1
				翼牛瓦	2
				雁振	1
				隅木蓋?	2
				目板瓦?	1
				用途不明	3
軒丸瓦計		16	軒平瓦計		13
丸瓦		平瓦	磚		凝灰岩
重量	109.046kg	318.752kg	0.906kg	1.794kg	
点数	554	2468	2	24	

5 出土遺物

土器 本調査区での土器の出土量は少なく、土師器や須恵器などの土器片が1箱分にとどまる。(青木敬)

瓦磚類 本調査区出土の瓦磚類は表34に示した。大半が近世以降だが、古代の瓦も一定量ある。特に、SK10587からは奈良時代の瓦がまとまって出土し、図260の軒丸瓦もすべてSK10587出土である。1は6282Dでやや小型の軒丸瓦。平城宮南西隅でまとまった出土例がある。2は6140A。6140Aは外縁が明確に残存する資料がなかったが、6140B同様、鋸歯文が疊にめぐることが判明した。平城宮・京内での出土例は少ないが、平城宮東方官衙等で若干の出土がある。3は6721Eで6721型式のなかではやや小ぶりの軒平瓦。平城宮東院地区で比較的多く出土する。4は6734A。直線顎の軒平瓦。平城宮・京全体での出土例は非常に少なく、平城京左京四条二坊十五坪(田村第推定地)のほか、西隆寺に同范がある。5は6702G。薬師寺所用瓦と同范。1~5のうち、1と3は奈良時代前半、それ以外は奈良時代後半である。いずれも海龍王寺旧境内では初例となる。これらは回廊SC10590に葺かれた可能性はあるものの、出土量が少なく軒瓦の組合せなどは不明である。また、本調査区からは顎部片だが7世紀後半の重弧文軒平瓦が2点出土した。そのうちの1点は、平瓦部に穴をあけ、粘土製の釘を打ち込んで平瓦部と顎部を留めている。同様の技法をもつ重弧文軒平瓦は左京八条三坊十五坪(薬師寺)でも出土している。(石田由紀子)

6まとめ

従前、西金堂と西面回廊との基壇間距離は10尺(3.0m)、回廊基壇は地覆石が存在せず、羽目石を直接地面に据え



図260 第525次調査出土軒瓦 1:4

付けたと推定されている。羽目石を直接地面に設置する例は、今回確認した海龍王寺西回廊以外にも薬師寺食堂や十字廊などにも例があり、切石積基壇外装の簡略化形態として用いられたと推定できる。また回廊基壇幅は、僧房との位置関係から17尺、梁行は8尺との推定値が提示されている²¹。梁行長からみて西回廊が単廊だったことは確実である。

今回、西面回廊基壇西端付近を検出したが、岡田がおこなった回廊推定ラインとほぼ同じ位置で検出したことから、岡田の推定を追認することができた。したがって、回廊基壇内径は東西160尺、南北61尺とした回廊全体の規模も現状では妥当な数値と評価できる。さらに基壇構造も羽目石を直接地面に据え付けていたことを確認し、これも岡田の推定を追認する結果となった。

加えて、西回廊の雨落溝が乱石組であった可能性が高く、基壇端から30cm間隔をおいて位置することから、回廊の軒の出が5.5尺以上となることもあきらかとなつた。このように狭小な面積の調査であったが、いくつかの注目すべき調査成果があつた。(青木)

註

- 奈良県教育委員会事務局奈良縣文化財保存事務所編「重要文化財海龍王寺西金堂・經藏修理工事報告書」、1967。
- 岡田英男「海龍王寺」「大和古寺大觀」5、1978。
- 岡田英男の記述によるが、岡田によるとこれらの数値は、宮本長二郎が導出したという。

法華寺旧境内の調査

—第526次・第532次

1 第526次調査

はじめに

本調査は、集合住宅建設にともなう発掘調査である。調査区は、平城京東二坊坊間路に該当する。調査区は東西3m、南北10m、調査期間は2014年3月6日から2014年3月18日までである。

基本層序

調査区の層位は、表土（厚さ10cm）の下、造成土（20cm）、畑の旧耕作土（10cm前後）、地山（黄褐色粘質土）の順である。黄褐色粘質土の上面が遺構検出面となり、遺構は標高70.00m付近に展開する。

検出遺構

遺構は、掘立柱塀1条、南北溝2条、柱穴1基、土坑1基、ピット群などからなる。

掘立柱塀SA10597 径0.25~0.4mを測る円形柱掘方の南北方向の掘立柱塀で、計6間分を検出した。柱間寸法は1.4m等間、残存する深さは5~10cm。出土遺物はなく、帰属する年代については不明だが、埋土の特徴などから

中世以降の所産だろう。なお、SA10597周辺には、ほかにも規模や形状が類似した小柱穴が展開しており、調査区およびその周辺に小規模な塀や建物などがほかにも存在した可能性が高い。

東二坊坊間路東側溝SD10595 東二坊坊間路東側溝と推定できる南北方向の素掘溝である。調査区内で長さ10m、幅0.2~0.6m分を検出した。溝の西肩を調査区東端（Y-18.039付近）で検出し、深さ0.4m以上。調査終了後、調査区外でおこなった立会調査において、SD10595の東肩も検出し、これとあわせると東西幅2m、深さ45cmとなる。これは、調査区の北で実施した第202-12次調査において検出した東二坊坊間路東側溝（SD01）の幅とも一致する（『1989年 平城概報』）。出土遺物は、古代から中世にかけての瓦片が中心で、東二坊坊間路東側溝が古代から中世にかけて継続的に水路として利用されていたと考えられる。

南北溝SD10596 南北4m以上、幅1.2m以上の素掘溝。埋土が畑耕作土と酷似することなどから、耕作関連の溝と推定できる。掘削された時期は近現代であろう。

柱穴SP10598 調査区東側（X-144.960、Y-18.039付近）で検出した。SD10595の肩部上面から西側へ柱掘方を掘削した掘立柱穴であり、柱掘方は東西0.6m、南北0.8m、

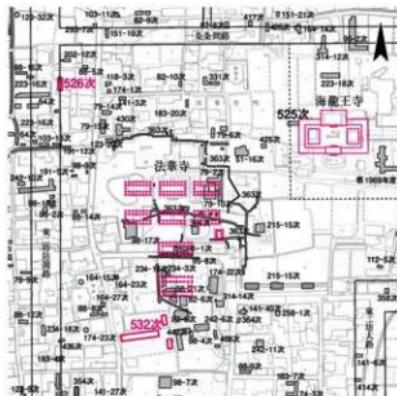


図261 第526次・第532次調査区位置図 1:4000

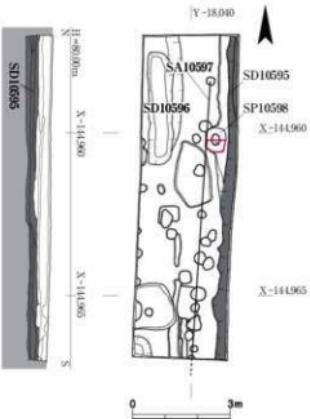


図262 第526次調査区遺構図・土層図 1:150

深さ0.2mを測る。位置からみて、SD10595にともなう遺構と推定できるが、出土遺物がないため、時期は特定できない。

出土遺物

出土遺物は、東二坊坊間路東側溝SD10595から主に出土し、丸瓦や平瓦片が大半を占め、土器片が少量混じる。遺物の総量は、古代から中世の丸瓦・平瓦が遺物整理用コンテナ5箱分、土師器片・須恵器片と埴輪片などの土器類が1箱分である。

まとめ

本調査では、東二坊坊間路東側溝と考えられる南北溝SD10595を検出し、調査区付近で幅2m、深さ0.45mを測ること、出土した遺物からこの南北溝は、奈良時代から中世に至るまでの長期間使用されていたことなどが判明した。
(青木 敬)

2 第532次調査

はじめに

本調査は道路および住宅建設にともなう事前調査である。調査地は法華寺旧境内にあたり、東側の隣接地ではこれまで第82-6次・第442次調査がおこなわれており、掘立柱建物や鉄造関連遺構などが検出されている(『年報1974』、『紀要2009』)。調査区は東西31m、南北5mのA区、東西3.5m、南北8mのB区・C区の3ヶ所を設定した。調査面積は合計209m²。調査期間は2014年4月22日から5月30日までである。

基本層序

基本層序は調査地が東西に広いため場所により異なる。A区西部では地表から表土、灰色砂質土、地山(灰色粗砂)。A区中央部では地表から表土、灰色砂質土、黄白色砂質土、地山(灰白色粗砂)。A区東部では表土、黒褐色土、地山(白色粗砂)。遺構検出面は黄白色砂質土および地山である。B区では地表から表土、黄灰色砂質土、黄褐色砂質土、地山(黄褐色粗砂)。C区では地表から表土、灰色砂質土、地山(黄褐色シルト)の順である。遺構検出面は基本的に地山上面で、A区中央部では黄白色砂質土上面である。遺構検出面の標高は64.3m前後で、A区中央部から西南隅に向かってやや落ち込む。

検出遺構

A区で近世の土坑2基、C区で奈良時代の掘立柱建物

1棟・掘立柱塀1条がある。B区では顯著な遺構が検出されなかった(図263)。

掘立柱建物SB9205 C区中央付近で検出した東西棟掘立柱建物。柱穴2基を検出し、東側の柱穴は東西1.0m以上、南北1.2m、残存する深さは0.7m、西側の柱穴は東西0.6m以上、南北1.0mである。柱間寸法は約3.0m。第442次調査で検出した奈良時代の掘立柱建物と柱筋が描い、一連の遺構と考えられる。第442次調査とあわせると桁行4間以上の建物となる。

掘立柱塀SA9215 C区北部で検出した東西掘立柱塀。柱穴1基を検出し、東西0.7m、南北1.1m、残存する深さは15cmである。第442次調査で検出した掘立柱塀と一緒にしたものとみられる。柱間寸法は約3.0mで、あわせて3間分となる。

土坑SK10481 A区中央南壁際で検出したすり鉢状の土坑。東西1.7m、南北1.1m、残存する深さは20cm。近世の陶器片や瓦片が多量に廃棄されていた。

瓦罐SU10480 A区東南隅で検出した瓦を廃棄した土坑。東西6.6m、南北3.0m以上の隅丸方形で、残存する深さは0.7m。土坑内の埋土は何層かに細分が可能であるが、遺物からは時期差はみられず、すべて近世以降に属する。
(庄田慎矢)

出土遺物

瓦塙類 本調査区で出土した瓦塙類は表35に示した。以下、軒瓦の主要なものを報告する(図264)。1は奈良時代前半期の6285Aで法華寺前身遺構(光明子邸)に使用されたと考えられる瓦である。2~4は中世の瓦である。5の6714A、6の6716Aは、法華寺創建時の所用瓦である。9、10は平安時代、7、8、11は中世に降る。7~9は法華寺境内から出土例があり、8と同文の瓦は海龍王寺、不退寺、秋篠寺からも出土している。11は内区右上に範傷があり、興福寺の鎌倉時代再建瓦の范を切り縮めたものである。

このほか、奈良時代の施釉磚が多く出土している。綠釉の水波文磚4点、二彩の刻線文磚4点、单彩の無文磚7点が出土した。図265は残存長12.0cm、幅7.0cm、厚み4.2cmで、上面にヘラで水波文を描き、下面には「条十八」のヘラ書きがある。釉薬は上面のみに施す。ほか3点の水波文磚の下面にもそれぞれ「九」、「卅」、「八」と読めるヘラ書きがある。これらの施釉磚については本紀要の

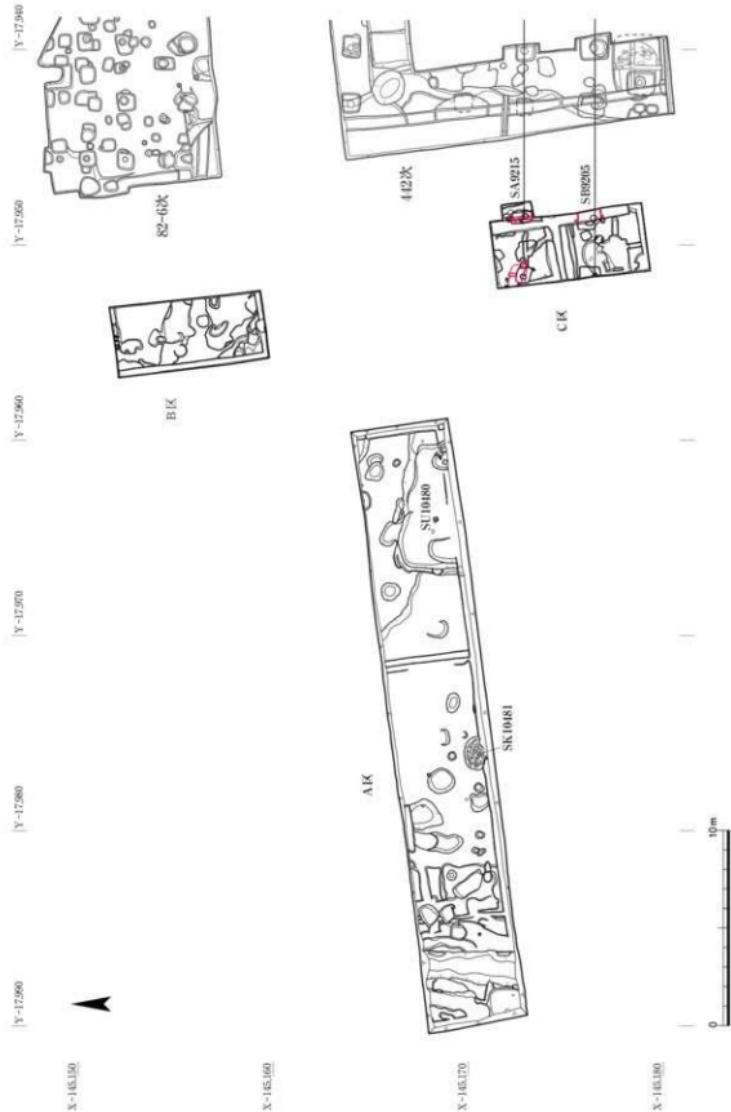


圖263 第532次調查遺構圖 1:250



図264 第532次調査出土軒瓦 1:4

表35 第532次調査出土瓦跡類一覧

軒丸瓦		軒平瓦		その他	
型式	種類	点数	型式	種類	点数
6285	A	2	6714	A	1
6320	A	1	6716	A	1
巴(縦倉)	古代	3		平瓦(施輪)	1
(中世)	平安	33		平瓦(施輪)	1
(近世)	縦倉	2		平瓦(射印)	1
古代	中世	4		平瓦(タタキ)	3
縦倉	近世	1		平瓦(ヘラ書き)	3
中世	時代不明	19		隅切平瓦	1
時代不明		16		ケラバ(顔ナシ)	1
軒平瓦計		53	鬼瓦		2
軒枝瓦			鬼瓦?		1
時代不明		2	面戸瓦		4
軒枝瓦計		2	面戸瓦?		1
軒丸瓦計		81	雁振瓦		4
丸瓦			隅木蓋		3
平瓦			磚(施輪)		11
磚			水成瓦		4
用達不明道具瓦			五輪塔		1
その他計		47	用達不明道具瓦		3
軒丸瓦計		196,114kg	平瓦		540,348kg
丸瓦		1713	磚		1,555kg
平瓦		6827	用達不明道具瓦		1,118kg
磚			磚		
重量			用達不明道具瓦		
点数			磚		

58頁で考察する。本調査区が法華寺金堂の南西に位置することから、今回出土した瓦は同寺の主要伽藍で使用されていた可能性が高い。

(今井晃樹)

土器 整理用コンテナ7箱分の土器が出土した。奈良時代の須恵器・土師器は少量で、大半は近世の瓦質土器・土師器である。SK10481・SU10480からは14~15世紀代の土師器皿・羽釜、瓦質擂鉢が出土した。

(小田裕樹)

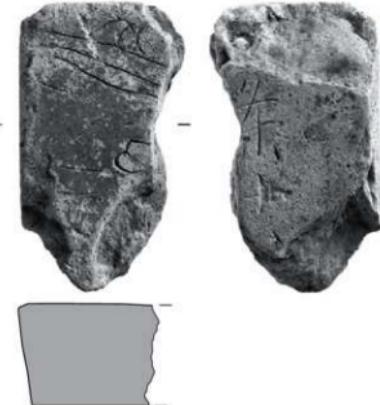


図265 第532次調査出土水波文跡 1:4

おわりに

今回の調査では、C区で第442次調査で確認された掘立柱建物・塀が西に続く様相を確認した。一方、A・B区では法華寺伽藍と関わる建物等の遺構は検出されなかった。本調査区の遺構検出面標高は第82-6次・第442次調査より約1m低く、本調査区では近現代の造成により遺構面が大きく削平されていることが考えられる。

(庄田・番光)

平城京右京一条二坊四坪・二条二坊一坪・一条南大路の調査 —第530次

1はじめに

奈文研本庁舎の建替事業にともない、地下遺構の様相を探るため、学術目的での発掘調査をおこなった(図266)。発掘調査の成果は、現在整理中であるため、ここでは概略を記すのみとし、詳細については、次年度の紀要で報告する予定である。

旧庁舎建物は、奈良県立医科大学付属奈良病院(のち県立奈良病院)として1962年に起工したが、その建設に先立つ発掘調査はおこなわれなかった。そのため、遺構の残存状況を確認するため、2005年度(第400次)と2013年度(第518次)に試掘調査をおこなった。その結果、敷地東北部で西一坊大路西側溝や掘立柱建物など奈良時代の遺構が残ることを確認したものの、それより西や南では、中世の遺物を含む秋篠川の氾濫原が広がる可能性が高いと考えるに至った。

今回の発掘調査では、これら氾濫原の広がりが、実は秋篠川旧流路の堆積土であることを確認し、平城京造営時に旧流路が敷葉・敷粗采工法を用いて埋め立てられたことがあきらかとなった。奈良時代の遺構は削平された部分も多いものの、一条南大路など条坊関連遺構が、想定より深い位置に残存することがわかった。

2 基本層序と検出遺構の概要

調査地は、平城宮の西面中門である佐伯門の西に位置し、佐伯門から西へ延びる一条南大路にかかり、その北の右京一条二坊四坪、南の右京二条二坊一坪にまたがる。水田の地割りなどから、この付近には平城京廃絶後の秋篠川の旧流路があったことが、試掘調査以前から指摘されていた。

調査区の基本層序は、旧庁舎の建設にともなう造成土(最大で厚さ約2m)、旧耕土・床土(20~30cm)、中世の遺物包含層(20~30cm)と続き、その下は場所によって土層が異なる。調査区南部では洪水の堆積とみられる灰色砂(10~20cm)が広がり、調査区西北部でも近世の洪水砂が部分的に厚く堆積する。一方、調査区東北部では、奈良時代の整地土が20cm程度残る部分もある。その下は

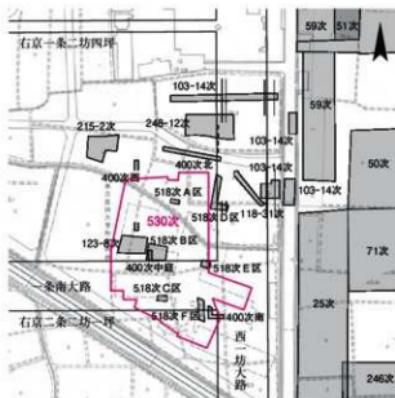


図266 第530次調査区面図 1:2500

明黄灰色~褐色粘土の地山。遺構はおよそ中世の遺物包含層の下、あるいは灰色砂の下で検出した。遺構検出面は北部で高く、標高68.6m付近(地表下約1.3m)、もっとも低い中央部で標高67.5m付近(地表下約2.5m)である。

検出した主な遺構は、古墳時代から平城京造営直前までの秋篠川旧流路のほか、平城京造営期の遺構として秋篠川旧流路を踏襲しながら改修した斜行大溝がある。奈良時代の遺構として、一条南大路の南北両側溝と、この南北両側溝をつなぐ南北溝、大土坑、井戸5基などを検出した。ただし、第248-12次、第400次北調査などで検出したような顯著な建物跡などはみつかなかつた。その他の遺構には、古墳時代以前の溝や、平安時代から近世までの井戸、小穴、中世以降の耕作にともなう細溝、時期不明の掘立柱列などがある。

3 検出遺構

平城京造営前の遺構 調査区の中央を北西から南東に流れる自然流路を検出した。この流路の位置をはば踏襲して後述する斜行大溝が造られているため、検出したのは北東岸と南西岸の一部である。幅約30m、検出面からの深さは約3.5mあり、調査区内で西北西から南南東へと屈曲して流れる。北東岸の土層観察によって、幾度となく浸食と堆積を繰り返していることがわかる。流路の埋土からは、古墳時代を中心に弥生時代から8世紀初頭頃までの遺物が多量に出土した。

その他、調査区北方を中心南北大溝、これに注ぐとみられる東西溝2条、さらにこれらを覆う沼状遺構などを検出した。これらの遺構は、弥生時代から飛鳥時代までのものとみられる。自然地形は、佐伯門のある東側が高く、秋篠川旧流路に向かって下がっていることもわ



図267 調査区東南部敷葉・敷粗朶検出状況（北東から）

かった。

平城京造営期の遺構 平城京造営期には、秋篠川旧流路を踏襲するかたちで、斜行大溝が整備された。幅約15m、深さ約2.5mの直線的な溝で、溝底には薄い水成堆積層が認められる。埋土の中には数層の水成堆積層をはさむものの、最終的には、ある程度乾いた状態で人為的に埋め立てられている。

埋め立てには、敷葉・敷粗朶工法が用いられている（図268）。敷葉・敷粗朶は、大きく3層に分かれおり、枝（粗朶）を主体とする上層および下層と、葉を主体とする中層に大別できる。中層と下層の敷葉・敷粗朶の検出面には、幹が直径20~55cmの樹木の切り株が、両岸に沿って多数投棄されていた（図267）。いずれも斧で幹を伐採し、根を切断している。

中・下層の敷葉・敷粗朶をともなう埋め立て土が、ほぼ斜行大溝の全体にわたっているのに対して、上層の敷葉・敷粗朶とその上に盛り上げられた黒色砂質土は、基本的に後述する一条南大路の路床部分に限られる。この黒色砂質土の上面では、70点近い肅章が集中する遺構を検出した。溝の埋め立て工事の過程でおこなわれた祭祀に関連すると考えられる。

奈良時代の遺構 調査区のやや南寄りで、平城宮の西面中門である佐伯門から西に延びる一条南大路を検出した。斜行大溝を埋め立てた後に造られ、路面は削平されているものの、路床部分が残る。一条南大路の南北では、道路側溝となる東西方向の溝を検出した。両者の心々間距離は70大尺（約25m）で、道路の中軸が発掘調査の成果から想定された佐伯門の中軸線と、ほぼ一致することから、一条南大路の南北両側溝と確認できた（図269）。

一条南大路の北側溝は、約38m分を検出し、調査区外に伸びる溝には3回の改修が認められ、改修によって位置を変え、溝幅も変化している。南側溝は一部、残存していない部分もあるが、長さ約32m分を検出した。東半では、2時期の変遷を確認したが、西半では1時期の



図268 調査区西部敷葉・敷粗朶検出状況（東から）

堆積を確認した。

さらに一条南大路を横断して、その北側溝と南側溝をつなぐ南北溝が見つかった。埋土の堆積状況から、2時期の変遷を確認した。大路を横断するため、暗渠としていた可能性もある。また、一条南大路北側溝の大路側にあたる南法面には、しがらみによる護岸が施されていた。径8cm前後の杭を約30cm間隔で千鳥に配し、その間に粗朶を編みつける。しがらみは秋篠川旧流路を埋め立てた部分を中心に施されており、主としてこの部分の大路の法面を保護する目的で施工されたと考えられよう。

また、右京一条二坊四坪では、大型の井戸を検出した。井戸の掘方には、深さ約3mに達するが、直径約5.8mの円形を呈する抜取穴によって、大部分が壊されていた。横板組の井戸枠の最下段のみ残存していた。横板は長さ約2.2m、高さ約25cm、厚さ約6cmで、上下の接合は板の側面に互いにホゾ穴を穿ち、別材で作ったホゾを差し込んで横板どうしを井籠状に積む。内法寸法は2.16m。底部には径3~5cmの円錐を約20cmの厚さに敷き詰めており、それを除去したところ、中央には曲物を抜き取ったとみられる穴を検出した。井戸枠の抜取穴からは、木簡や墨書き土器、三彩瓦、磚などとともに、奈良時代後半の土器が出土した。

このほか四坪内からは、奈良時代の井戸を4基検出した。坪の南西寄りで検出した井戸枠の抜取穴からは、「左兵下」と記された墨書き土器が出土するなど、この坪の性格を示唆する可能性がある資料も出土した。一坪内では、奈良時代の井戸1基や掘立柱列なども検出した。

右京二条二坊一坪の東北隅では、東西約6m、南北約5mの大型土坑を検出した。埋土から奈良時代前半の土器や瓦などとともに、木簡が2点出土した。

また、一坪の南寄り、一条南大路北側溝と接する場所に、均質な暗黒褐色の粘土が堆積していた点も注目される。同様の粘土堆積は、一坪の東北隅にも広がることが確認されており、奈良時代前半の土器が出土することが



図289 一条南大路と南北両側溝（西から）

ら、この時期には、坪内の一帯が湿地状を呈していた可能性が高いと考えられる。

その他の遺構 平城京廃絶後の遺構として、一条南大路の路面北縁近くで、円形石組井戸を検出した。石組の内径は約45cmで、底部にはほぼ同じ径の曲物を据えていた。深さは約30cm程度しか残存しないが、11世紀前半の土器師皿が出土し、この時期には一条南大路は当初の規模では機能していなかったことを推測させる。

このほか、この調査では液状化現象による砂脈や噴砂丘などの地震痕跡を数ヶ所で確認した。層序から、歴史時代には奈良時代以降12~13世紀までと、13世紀以降の少なくとも2回は、液状化現象が発生するほどの地震があったことがわかった。このほか、古墳時代以前にも同程度の地震があったと考えられる痕跡を確認した。

(神野 恵・鈴木智大・小田裕樹)

4 出土遺物

土器・土製品 整理用コンテナ241箱分の土器が出土し、弥生時代から中近世までの土器を含む。土器は秋篠川旧流路の埋土から出土した古墳時代のものが大半を占める。また、条坊間連遺構・京造営関連遺構・整地土層からは、飛鳥時代末から奈良時代にかけての土器が出土

した。奈良時代の特筆すべき土器としては、墨書き土器・陶碗・転用硯がある。なかでも、墨書き土器は約60点出土した。主に条坊側溝や右京一条二坊四坪内の遺構からの出土である。判読できたものでは、「左兵下」、「内薬司」、「大伴千鶴」、「□□〔忌尉カ〕」、「御□」「老」、「竹田」、「東」、「林」、「供」などがある。
(小田)

瓦磚類 整理用コンテナ267箱の瓦磚類が出土した。大半は奈良時代の瓦である。一条南大路の北側溝からは、丸瓦、平瓦のほか隅木蓋瓦が、南側溝からは、丸瓦、平瓦のほか、第一次大極殿所用の軒平瓦6664Cが出土した。南北溝からも少量の丸瓦、平瓦が出土した。また、井戸からは奈良時代後半の軒瓦とともに、丸瓦、平瓦、三彩平瓦などが出土した。斜行大溝の埋め立て土にも少量の瓦片が含まれていた。
(今井晃樹)

木簡 木簡は計45点（うち削削12点）が出土した。その内訳は、右京二条二坊一坪の大土坑から2点、一条南大路北側溝から3点、南北溝から19点（うち削削11点）、右京一条二坊四坪内の沼状遺構から1点、同坪内の大型の井戸抜取穴から4点（うち削削1点）、斜行大溝の埋め立て土から16点である。このうち里制下（701~717年）の荷札木簡が、右京二条二坊一坪の大土坑、一条南大路部分の中層敷葉層、一条南大路北側溝、右京一条二坊四

坪内の斜行大溝埋め立て土から出土した。このほか、習書本簡や文書本簡もある。文書本簡には「奈良京」(平城京)とみえるものがあり、「平散(葉物か)」を運ぶ役夫(駕使丁)が逃亡したことが書かれる。「奈良京」という言葉の使用とともに、平城京と藤原京を対比的に用いているとみられるところから、平城遷都前後の様子を伝える本簡としても注目される。

(渡辺晃宏)

木器・大型木製品など 約800点の木器と、井戸枠部材などの大型木製品約300点が出土した。南北溝中央付近からは、多量の加工棒、薄板とともに人形1点、斎車3点が出土した。斜行大溝の埋め立て土(黒色砂質土)の上面でみつかった祭祀遺構からは、70点近い斎車や横櫛形木製品1点が折り重なって出土した。斎車は長いもので60cm以上あり、ほとんどが7世紀第Ⅲ四半期には出現するとされる細長い板材の両端を山形に削り出すものである。これらの斎車の中には、一方の端部を山形に作り、もう一方を斜めに切り落とし、その端部付近の側面を半円状に切り欠くという珍しい形状のものもある。また、右京二条二坊一坪の井戸枠からは、多数の加工棒とともに刀子柄1点や箸2点が、大土坑からは挽物椀1点、曲物1点が出土した。さらに、一条南大路北側溝北の粘土堆積からは、挽物と考えられる高さ4.7cmの黒漆塗の薬壺が1点出土している。

(浦 啓子)

5 自然科学的分析

本調査では、年輪年代法をはじめとする自然科学的分析を視野に入れたサンプリングをおこなった。これら分析は現在、埋蔵文化財センターを中心に進めており、詳細は来年度の紀要において報告予定である。ここでは、年輪年代測定と酸素同位体比による年代測定の結果について、現時点での概要を記す。

(神野)

右京一条二坊四坪の大型井戸枠部材の年輪年代測定 調査対象表面の接写画像より計測した年輪曲線と、当研究所で蓄積している曆年標準パターン群とのクロスデータティングを行い、西側の井戸枠(234層)についてヒノキの曆年標準パターンE¹⁾と最外年輪が680年で照合した($t=731$)。本試料には、年輪幅を計測できた最外層の外側に1層分の早材が確認できるため、最外年輪は681年ということになる。なお、本試料には辺材が確認できなかったため、この年代は原本の伐採年代の上限年代として捉

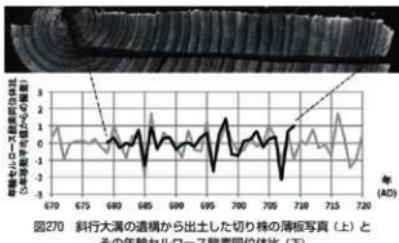


図270 斜行大溝の遺構から出土した切り株の薄板写真(上)とその年輪セルロース酸素同位体比(下)

えられる。

(星野安治)

年輪セルロース酸素同位体比による切り株の年代測定

年輪セルロース酸素同位体比とは、出土した樹木の年輪に含まれるセルロースの酸素同位体比を測定することで、年代測定をおこなう方法である²⁾。酸素同位体比の経年変動パターンは、樹種の違いを越えて高い相同意を示すため、年輪数が50年以下でも、針葉樹・広葉樹を問わず年代決定できる可能性を有する。参考までに、今回の調査で出土した樹齢30年余りの切り株の年輪写真と、その酸素同位体比(黒)を長野県のヒノキなどで作成した標準変動パターン(灰)と対比した図を示す(図270)。

今回、斜行大溝の埋め立て土から出土した樹皮が付いたままの切り株をサンプリングし、分析をおこなった。その結果、現時点までに決定できたモミ属の切り株4点の最外年輪の年代は、それぞれ709年が2個体、701年と697年が1個体ずつの結果を得ることができた。最外年輪が709年ということは、平城京遷都の直前の709年夏から710年春までの間に伐採されたことを意味する。

今後、さらに多くの資料を測定し、年輪年代の成果や発掘出土品の整理・研究成果と充分に重ねあわせた慎重な議論が必要であるが、現時点のデータからは、発掘調査の成果とあわせて興味深い知見を得ることができたといえる。

(中塚 武／総合地球環境学研究所)

註

- 1) 奈文研『年輪に歴史を読む—日本における古年輪学の成立—』1990。
- 2) 中塚 武「環境の日本史 ① 日本史と環境一人と自然」「気候変動と歴史学」2012、吉川弘文館、38-70頁。

平城京左京二条二坊十一坪の調査

—第533次

1はじめに

本調査区は、平城京左京二条二坊十一坪の西辺に位置し、法華寺の寺域南半部にあった阿弥陀淨土院跡と二条三条間路を挟んで南接する。左京二条二坊十一坪では、これまでの調査で中心部に正殿と東西脇殿が「コ」の字形もしくは「ロ」の字形に配置され、坪が一括して利用されていたことが判明している（〔年報 1997・1998〕）。また、遺構の配置や出土軒瓦の共通性から、平城京左京二条二坊十二坪¹⁾との密接な関連も指摘されており、十一・十二坪を一括した公的な施設の存在が想定されていた（〔年報 1997〕）。

今回の調査は、集合住宅の建設にともなうものであり、調査区から約3m北に位置する第281次調査や約10m西に位置する第282-16次調査では奈良時代の建物や塀等を確認している。のことから、調査区内にも奈良時代の遺構の存在が予想された。調査区は東西6m、南北45m、調査面積は270m²である。調査期間は2014年7月2日から2014年8月22日に終了した。

2 基本層序と検出遺構

基本層序

調査区内の基本層序は、上から①造成土（20~40cm）、②耕作土（20~30cm）、③床土（20~40cm）、④暗灰黄色砂質土（整地土1:10cm）、⑤灰褐色粘質土（整地土2:20cm）、地山（灰黄色粗砂～淡黄色粘土）の順である。

遺構は、東西溝SD10538のみ④層上面で検出したが、それ以外は⑤層上面および地山面で検出した。

検出遺構

主な遺構は、溝3条、掘立柱建物3棟、塀8条、柱穴2基、土坑1基等である（図272）。遺構は重複関係や検出層位、出土遺物から1~4期に分けることができ、1期が奈良時代以前、2~4期が奈良時代である。2期に関しては遺構の位置関係や出土遺物等から、少なくとも2時期以上の変遷が確認できる。しかし、重複する柱穴がないことや東西の幅が狭い調査区に制約されて全容が不明な遺構も多く、今回は2期のなかに一括して報告する。

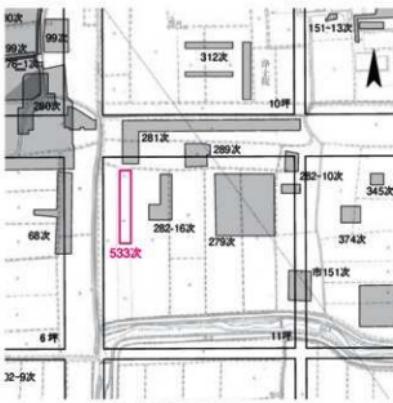


図271 第533次調査区位置図 1:3000

1期の構造

溝SD10537 調査区南端で検出した。幅2.3~2.5m、深さ45cm。形状から円形にめぐると思われる。埋土は黒色粘質土で遺物は含まない。東西塀SA10526や柱穴SP10527、南北棟建物SB10536により壊される。古墳等の周溝の可能性がある。

2期の構造

東西大溝SD10525 調査区中央やや北寄りで検出した。幅3.0~3.2m、深さ30~40cm。流水痕跡がなく、埋土は黒褐色粘質土で一気に埋め立てられている。埋土からは奈良時代前半から中頃までの土器が出土した。

東西塀SA10526 調査区南部で検出した。一辺約1m、柱穴2基を検出し、深さ約45cm。柱間約3.0m(10尺)。南に展開する掘立柱建物の可能性もある。柱穴2基は、いずれも掘方に柱根が残存しており、そのうち、東の柱穴には柱根のすぐ脇に別の柱根が残存していた（図274）。この柱根は別の柱穴のものと考えられるが、柱根の沈下を軽減するための補強材の可能性もある。SB10536と重複し、SA10526が先行する。

柱穴SP10527 調査区南で検出した。一辺約1.3m、深さ約0.6m。調査区内には組み合う柱穴がないが、柱間3m以上の東西塀、または掘立柱建物の北西隅もしくは北東隅とみられる。掘方底部で板状の礎板を確認した（図274）。抜取穴からは奈良時代前半の土器が出土した。

東西棟掘立柱建物SB10530 調査区東南部で検出した。東西棟建物の西妻柱とみられる。柱穴は一辺0.9~1.1m、深さ45~60cm。柱間は約1.8m(6尺)。掘方底部では板状の礎板が14枚、井桁状に組まれた状態で出土した（図



平城第281次調查区

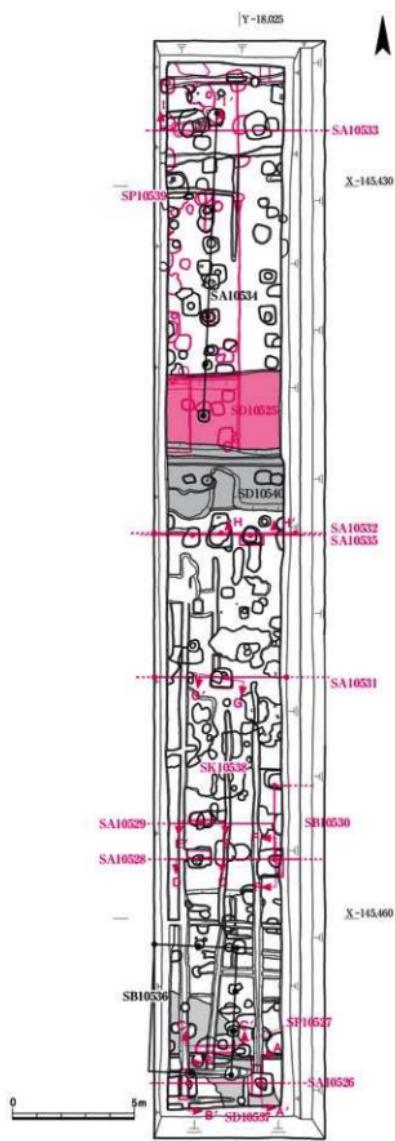


图272 第533次调查区遗物图 1:200

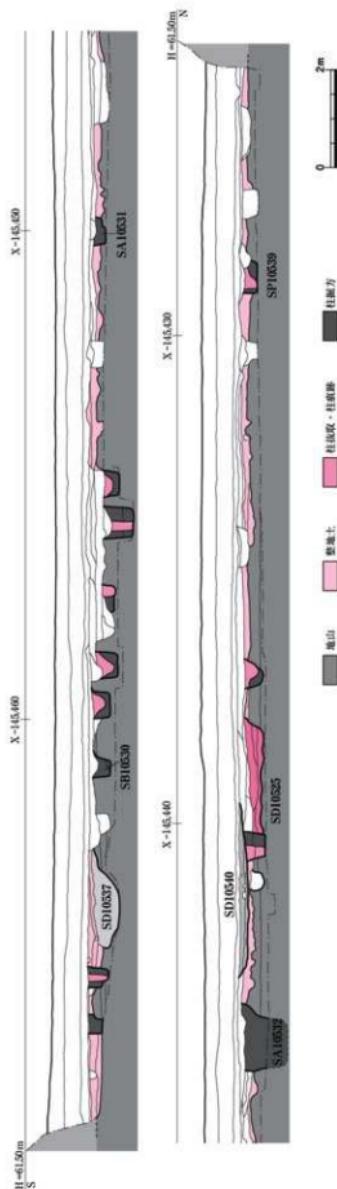


图273 第533次调查区西壁土层图 1:100

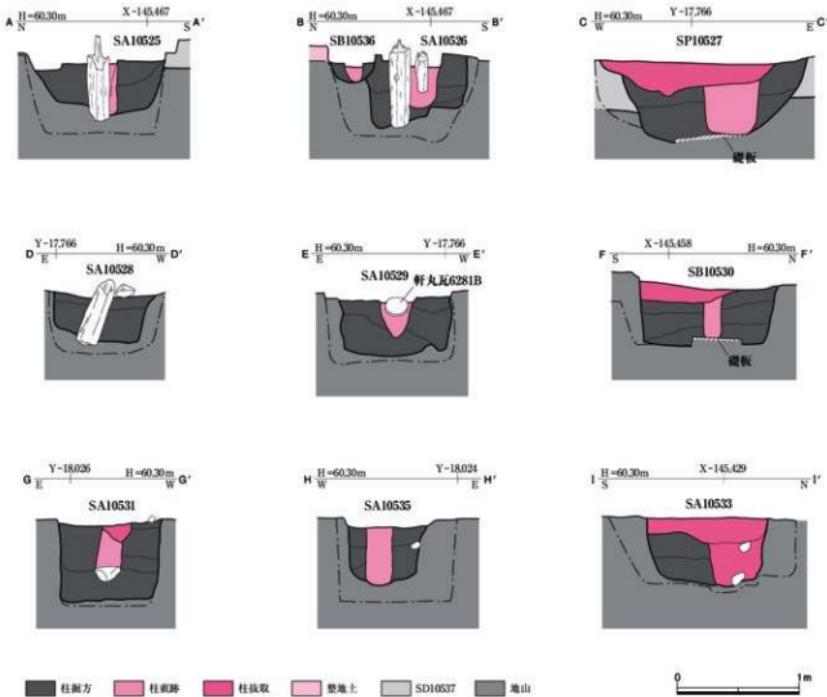


図274 第533次調査区柱穴断面図 1:40

274・279)。

東西堀SA10528 調査区西南部で柱穴1基を検出した。一辺約0.8m、深さ約40cm。掘方には柱根が傾いた状態で残存していた(図274)。SB10530に取り付く東西堀の可能性がある。SB10530からの距離は3.0m(10尺)。

東西堀SA10529 調査区西南部で柱穴1基を検出した。一辺約0.8m、深さ約0.5m。SA10529と同様SB10530に取り付く東西堀の可能性があるが、SA10529との前後関係は不明。SB10530からの距離は約3.0m(10尺)。抜取穴から軒丸瓦6281Bが出土した(図274)。

土坑SK10538 調査区南寄りで検出した。大きさは南北約1.0m、東西約0.8m、深さは25cm。埋土から曲物の底板が出土した(図278)。

東西堀SA10531 調査区中央部やや南寄りで検出した。柱穴は調査区東西壁でも確認でき、3基検出した。一辺約1.0m、深さ約0.6m。柱間約3.0m(10尺)。

東西堀SA10532 調査区中央部で検出した。柱穴はSA10531同様、東西壁でも確認でき、3基確認した。一辺約1.1m、深さ約0.75m。柱間約3.0m(10尺)。SA10531

との距離は約6m(20尺)あり、SA10531とSA10532とが組み合ひ東西棟建物になる可能性もある。

東西堀SA10535 調査区中央部で柱穴2基、3間分検出した。一辺約0.8m、深さ約45cm。柱間約2.4m(8尺)。SA10532と同じ並びにあるが、重複する柱穴がなく、前後関係は不明である。

東西堀SA10533 調査区北部で柱穴2基を検出した。一辺約1m、深さ約0.6m、柱間約3m(10尺)。

柱穴SP10539 調査区西北部で検出した。一辺約0.7m、深さ約35cm。調査区内では組み合う柱穴がなく、西に展開する東西堀の可能性がある。埋土からは墨書き器が出士した。

3期の遺構

南北櫛掘立柱建物SB10536 調査区南部で検出した。柱穴は一辺約40cm、深さ約40cm。桁行3間、梁行2間。柱間は約2.1m(7尺)等間。北でやや東に振れている。SD10527およびSA10526を壊す。

南北堀SA10534 調査区北で検出した。一辺40~60cm、深さ約0.5m。6間分検出した。北でやや東に振れるた

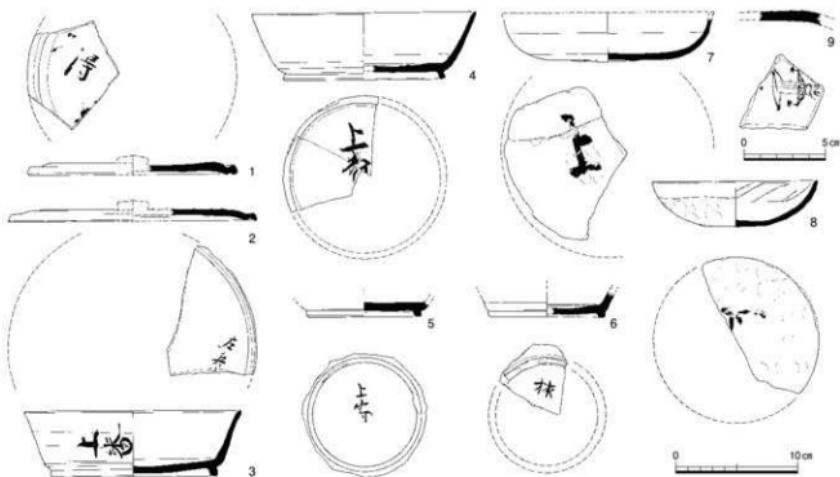


図275 第533次調査出土墨書き土器 1:4 (9は1:3)

めSB10536と同時期と判断した。南端の柱はSD10525の埋土の上に建てられる。SA10534の並びには多くの柱穴があり、何度か建て替えられた痕跡がある。

4期の遺構

東西溝SD10540 調査区中央部やや北寄りで検出した。幅約2.0m、深さ約30cm、④層上面で検出した。埋土から出土した土器の年代から奈良時代後半以降と考えられる。なお、SD10540を埋め立てた後に10~20cm大の礫が大量に敷かれていた。そこからも施釉瓦や墨書き土器等が出土している。
(石田由紀子)

3 出土遺物

土器・土製品

整理用コンテナ42箱分の土器が出土した。大半は奈良時代の須恵器・土師器で、特に東西溝SD10540埋め立て後の礫集中からは奈良時代後半から末頃の土器が大量に出土した。

本調査区出土の土器の特徴として、土師器供膳具類(杯・皿・高杯・杯蓋)が多い点、土師器碗Cが多くみられる点、須恵器碗蓋の転用鏡が多い点が挙げられる。この他、墨書き土器・漆付着土器・土馬・土鍾などが出土した。
墨書き土器(図275) 本調査区からは約20点の墨書き土器が出土した(駒談は渡辺見宗による)。1・2は碗B蓋である。1は外面に「得」と記す。SP10539出土。2は内面に「左兵□」と記す。表土出土。3~6は碗C。3は口縁部外面、4は底部外面にいずれも「上番」と記す。本調査区からは「上番」と記す土器が他に2点出土してい



図276 第533次調査出土墨書き土器

る。3はSD10540埋め立て後の礫集中、4はSD10540上層からの出土。5は底部外面に「上□[家カ]」、6は「捺」と記す。5はSD10540、6は表土出土。7は土師器碗C、底部外面に「上」と記す。本調査区からは他に「上」と記す須恵器が2点出土している。8は土師器碗Cである。内面にナデ調整のアトリが残る。底部外面に墨書きがある。7・8ともにSD10540出土。9は土師器碗蓋の内面に単層の建物の墨画を描く(図276)。基礎の上に縦に長い軸部と宝形造の屋根を描く。屋根の両隅には風蟬らしき装飾が下がる。屋根の上には装飾が乗るが、最上部の表現は三つ又に分かれているようにみえ、鳳凰を表現した可能性もある。また、建物の下方にも墨点が認められることから、他にも何らかの描写が存在したとみられる。④層出土。
(小田裕樹)

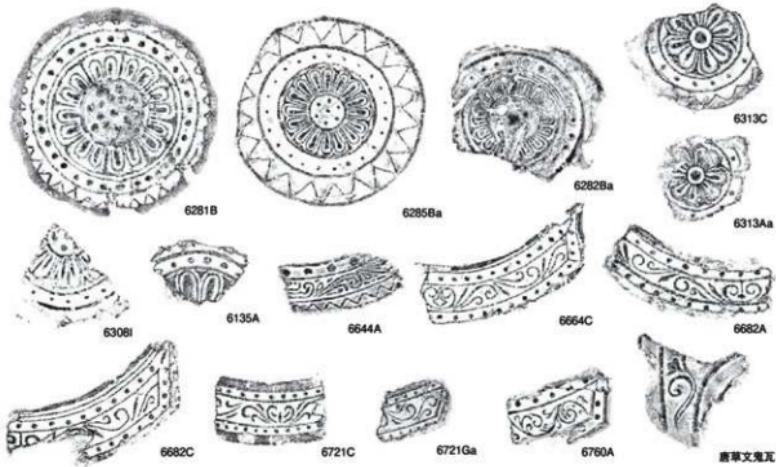


図277 第533次調査出土軒瓦・鬼瓦 1:4

表36 第533次調査出土瓦類一覧

軒丸瓦			軒平瓦			その他		
型式	種	点数	型式	種	点数	種類	点数	
6135	A	1	6644	A	1	施釉平瓦(緑釉)	1	
6272	B	3	6663	A	2	(施釉緑・白)	12	
6275	D	3	C	2	(施釉緑・白)	8		
6281	B	1	6664	C	1	(施釉緑・黄)	2	
6282	Ba	1	6682	A	4	(施釉?)	22	
6284	C	1		B	3	(施釉?)	2	
6285	Ba	1		C	3	施釉丸瓦(三彩)	3	
6308	I	5	6685	A	1	(施釉緑・白)	2	
6311	B	1	6691	A	3	(施釉緑)	3	
6313	Aa	1	6721	C	2	施釉便丸瓦(緑釉)	3	
	C	1		D	1	(三彩)	1	
6314	D	1		Ga	1	(施釉緑・白)	1	
奈良	7	?				(施釉緑)	4	
時代不明	1	6759(緑釉)	B	1		鬼瓦(唐草文)	1	
		6760	A	2		曳牛瓦	1	
			施釉(緑・白)	1		面瓦	1	
奈良	9	?			9	平瓦(ヘラ形)	1	
					1	瓦製凹盤	1	
軒丸瓦計			軒平瓦計			その他計		
丸瓦			平瓦			總		
重量	29,517kg	212,930kg		5315kg	2,407kg			
点数	829	2861		5	1			

瓦磚類

本調査区から出土した瓦磚類は表36に示した。軒瓦は、奈良時代前半のものが圧倒的に多い。本調査区でもっとも出土点数が多いのは6308Iと6682Aであり、ともに瓦編年のII-2期に位置付けられる。第279次調査では正殿と脇殿をもつ時期の瓦の組合せは6308I-6682Bとする(『年報1997』)。本調査区でも6682Aとともに、6682B・Cも一定量出土しており、6308Iと6682A・B・Cとが組み合う可能性は高い。特に6308Iは、平城宮内ではほとんど出土しないが、左京二条二坊十一・十二坪では集中的に出土し、同坪の所用瓦と考えられる。

また、I-1期の軒瓦が比較的多いことも特徴である。特に6275Dや6281Bなど藤原宮式軒丸瓦の出土が目立ち、

宮造當初から当該地が利用されていた状況がうかがえる。ほかにもI-1期は6272B-6644Aといった長屋王邸の所用瓦と同様の軒瓦もみられる。

また、6313Aa・C、6314D等、甃棟を想定できる小型の軒丸瓦も出土した。いずれもII-1期である。

奈良時代後半の軒瓦は少なく、施釉瓦の6759B、6760Aの小片が出土した。いずれもIV-2期である。

軒瓦の出土量をみると、100m²あたり25.1点であり、第279次調査区同様、軒瓦の出土が濃密である。丸・平瓦に関しては本調査区の100m²あたりの出土量は108.3kgで、平城宮中部区の總瓦葺建物の出土量と比べて若干少ないものの、それでもかなりの出土量といえる。調査面積が小さいうえ、床土や整地土からの出土がほとんどで不明な点が多いが、第279次調査でも100m²あたりの丸・平瓦の出土量が114.0kgだったことを勘案すれば、少なくとも左京二条二坊十一坪内に總瓦葺建物等、瓦を相当使用する建物が存在した可能性は高い。

また、本調査では、施釉瓦が多く出土した(卷頭カラー参照)。左京二条二坊十一坪は、平城宮・京内でも施釉瓦の出土が突出して多い(『年報1997』、『年報1998』)。今回の調査でも、平瓦47点、丸瓦8点、熨斗瓦9点の施釉瓦が出土した。ただし、大半は床土やSD10540上面の隕集中からで、調査区内の遺構にともなうかは不明である。施釉瓦は綠釉單彩と、二彩または三彩がある。施釉瓦は、小片ではあるが軒平瓦6759Bが出土した。

鬼瓦は唐草文鬼瓦片が1点出土した。平城宮第2次大極殿院(第152次)で同範例がある(『平城報告X-IV』)。

(石田)

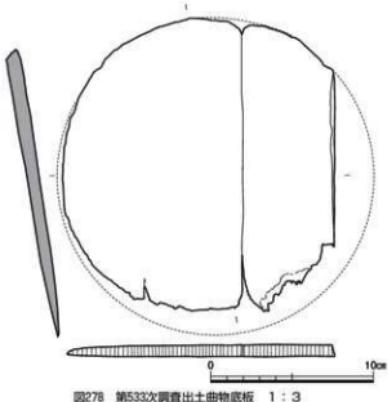


図278 第533次調査出土曲物底板 1:3

木製品・木製部材

曲物底板、加工棒、部材などが出土した。

木製品 図278は曲物底板である。柾目板を素材とする。上端の一部のみ残存し、他の部分は腐食により原形をとどめておらず、木釘痕なども確認できない。復元径19.3cm、最大厚0.9cm。SK10538出土。

木製部材 SA10526柱穴などから柱根が出土したほか、SB10530から礎板が14点出土した(図279)。これらは、長さ30cm~40cm、幅5cm~15cm、厚さ約1cmの板目材である。表面に加工痕は認められない。同一材とみられるものも複数あり、転用品と考えられる。

金属製品

銅製蛇尾が3点出土した(図280)。1点は表金具、2点は裏金具で、すべて別個体である。

1は表金具。裏面に3つの鉄足が残る。それぞれの鉄足付近には、別の鉄足痕跡をとどめており、残存しているものは、後補と考えられる。長軸3.9cm、短軸3.0cm、厚さ0.6cm。④層より出土。2、3は裏金具。両者ともに3つの鉄孔を残す。2は、腐食により原型をとどめるのは下端の一部のみである。残存長3.5cm、残存幅2.3cm、厚さ0.1cm。④層より出土。3は長さ、幅ともに1.9cm、厚さ0.1cm。耕土より出土。

(芝原次郎)

4まとめ

本調査では、奈良時代には少なくとも3時期以上の遺構変遷が確認でき、左京二条二坊十一坪の西辺でも建物群が複雑に変遷する状況が看取できた。

検出した遺構の大半は出土遺物が少ないうえに、重複関係も少なく、詳細な時期比定は困難である。ただし、出土軒瓦は瓦編年のI-1期およびII期のものが圧倒的に多く、主に奈良時代前半に大型の建物群が展開してい



図279 第533次調査出土礎板

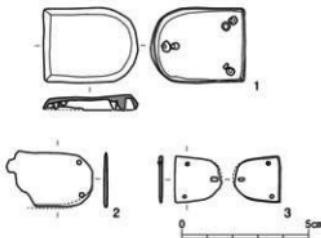


図280 第533次調査出土帯金具 1:2

たことが想定できる。

遺構の全体像がわかるものが少ないため、遺構の組合せに関しても不明な点が多いが、調査区には柱穴掘方内に、柱根や礎板が残存するものが比較的多い。これらを時期的特徴と想定すれば、掘方底部に礎板が残るSP10527、SB10530、SA10533、掘方に柱根が残存するSA10526、SA10528がそれぞれ同時期となる可能性がある。特に坪中心部の正殿SB6994の柱穴掘方には、柱根が遺存するものと抜き取られたものとがあったことが確認されている(「年報1997」)。このような建物解体時の手法を手かがりにすれば、SA10526、SA10528といった柱根が遺存する遺構が、正殿や脇殿等の坪中框部建物群と同時期であると考えることも可能である。

また、調査区南辺では奈良時代以前の溝SD10537を確認した。遺物が出土していないため、断定はできないが形状から古墳にともなう周溝の可能性があり、奈良時代以前の当該地の土地利用の一端を知る手がかりを得ることができた。

(石田)

註

1) 奈良市教育委員会『平城京左京二条二坊十二坪』1984。

平城京左京三条一坊十五坪の調査

—第534次

1 はじめに

2014年6月3日から7月24日にかけて、店舗新築にともなう事前調査として、平城京左京三条一坊十五坪の発掘調査をおこなった。建物建設予定部分に、東西16m、南北25mの調査区を設定した。調査面積は400m²である。

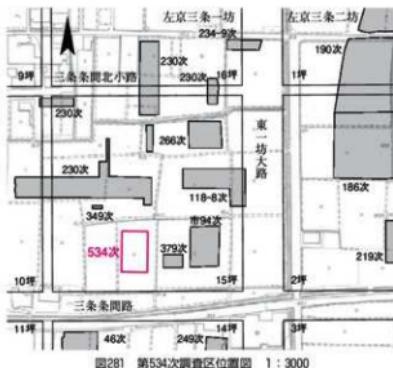
本調査区は、長屋王邸跡の西方にある。また過去には今回の調査区の北方を調査しており（第118-8次・第230次・第266次・第349次）、その成果から十五坪とその北の十六坪は一体となっており、四面に廂を持つ大型の掘立柱建物や京内最大規模の井戸が検出されているほか、建物群が密に並ぶ敷地であったことがあきらかにされている（「1979 平城概報」、「1992 平城概報」、「1995 平城概報」、「紀要 2003」）。また、本調査区の東方は奈文研（第379次、「紀要 2005」）のほか、奈良市教育委員会による発掘調査がおこなわれており（市教委94次）¹⁾、後者では奈良時代の掘立柱建物が確認されている。

2 基本層序

調査区西部では地表から表土（80cm、旧駐車場盛土、旧耕土を含む）、黒褐色シルト質土（10~15cm）、暗灰黄色シルト質土（10~15cm）、灰色砂混シルト質土（40cm前後）のうち、黒色粗砂からなる地山に至る。遺構検出面は黒褐色シルト質土上面であるが、一部の遺構はその下層の暗灰黄色シルト質土上面で検出している。遺構検出面の高さは、調査区を南北に横断する擾乱溝を基準に西部と東部に分けた場合、調査区西部では標高60.90m前後であるのに対し、調査区東部では標高60.70m前後と相対的に低い。これは、調査区東部においては畜力による耕作痕とみられる偶蹄目動物の足跡列が広い範囲で顕著にみられたことからもわかるように、耕作による遺構面の削平が調査区の東部でより深くに及んでいたことによる。

3 検出した遺構

今回の調査で検出した主な遺構は、南北に廂をもつ東西掘立柱建物1棟、東西掘立柱塀2条、東西掘立柱塀1条、南北掘立柱塀1条である（図286）。



掘立柱建物SB10500 調査区の中央で検出した東西棟掘立柱建物。検出されたのは21基の柱穴で、桁行4間以上、梁行4間分である（国283）。柱穴は東西12~20m、南北12~18mと大型である。柱間寸法は、桁行・梁行とともに約3.0mである。柱穴が残存する深さは38~76cm。東側柱筋から1間東にあたる調査区東壁では柱穴が検出されなかったことから、この建物の東側には廂がつかないことがわかる。また、この建物はさらに西に続くと考えられるが、その規模については今後の調査に委ねるしかない。なお、SB10500は掘立柱塀SA10495と2カ所で重複関係があり、SA10495が古く、SB10500が新しいことを確認した（国285）。

掘立柱塀SA10495 調査区の中央よりやや北側で検出した東西掘立柱塀で、6基の柱穴を検出した。柱穴は東西1.2~1.4m、南北0.9~1.0m、桁行柱間寸法は約2.4mである。柱穴が残存する深さは78~108cm。東端の柱穴から1間東にあたる調査区東壁付近で柱穴が検出されなかったことから、これより東側には続かないものとみられる。

掘立柱塀SA10496 調査区の北端で検出した東西掘立柱塀で、5基の柱穴を検出した。柱穴は東西1.2~1.6m、南北1.2m以上、桁行柱間寸法は約2.8mである。柱穴が残存する深さは95cmで、柱抜取穴からは磚が出土した。SB10500同様にさらに西に続くと考えられる。SA10496は柱穴の規模が本調査区の建物に類似し、北側が未調査であることから掘立柱建物となる可能性もある。

掘立柱塀SA10498 調査区の南部で2基の柱穴を確認した。擾乱溝によって大半は破壊されており、柱穴の東端部のみを検出した。柱穴は東西0.6m以上、南北1.2~1.6

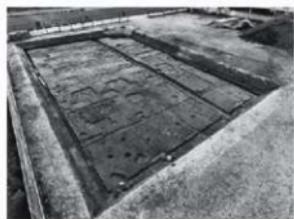


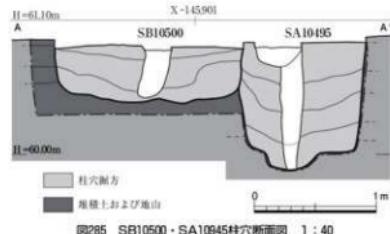
図282 調査区全貌（北東から）



図283 SB10500（西から）



図284 SA1046柱穴断面（南から）



m、残存する深さは63cm、桁行柱間寸法は推定で約3.0m。三条条間路推定位置との関係をふまえると、この柱列がさらに南へと続く場所である蓋然性は高い。

土坑SK10499 調査区の南部で検出した東西45cm、南北62cm、残存する深さ36cmの土坑。平城IV～Vの土器がまとまって出土した。



図286 第534次調査区遺構図 1:200

土坑SK10501 調査区の東北隅で検出した東西105cm、南北134cm以上、残存深さ15cm以上の土坑。軒丸瓦6282Gなどが出土した。
(庄田慎矢)

4 出土遺物

瓦磚類 本調査で出土した瓦磚類は表34に示した。以下、状態のよい個体を報告する（図287）。

1は6135Aで外区外縁の鋸歯文は摩滅しているが、そのほかの文様は残りがよく、丸瓦部も一部残存している。SK10499出土。2は外区外縁を面取りし、花弁部分は摩滅しているが、6285Bであろう。北排水溝出土。3は6282Gで、SK10501出土。

磚はSA10495の柱抜取穴とSB10496の柱穴から各2点ずつ出土している。このうち、後者の出土品は完形品で長さ31.4cm、幅16.0cm、厚さ7.5cmである。

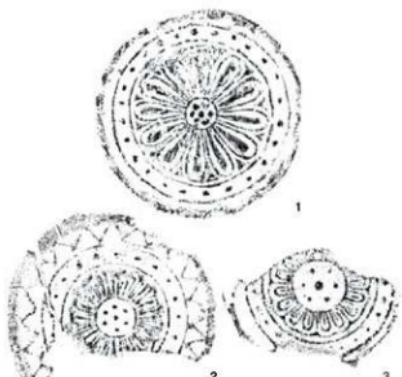


図267 第534次調査出土軒瓦 1:4

軒丸瓦			軒平瓦			その他		
型式	種	点数	型式	種	点数	種類	点数	
6135	A	1	6688	Ab	1	道具瓦	2	
6282	G	1	型式不明(余見)		3			
6285	B	1						

軒丸瓦計	軒平瓦計	その他	
丸瓦	平瓦	磚	
重量 点数	36.329kg 405	115.089kg 2370	11.151kg 11

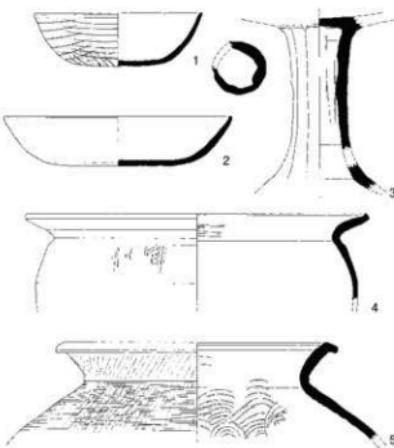


図268 第534次調査出土土器 1:4

外面は平行叩きの後、カキメを施す。これらの土器は平城宮土器IV～Vに位置付けられる。

(小田裕樹)

5 おわりに

今回の発掘調査により、平城京左京三条一坊十五坪の南部にも大規模な建物が存在したことがあきらかになった。東西棟掘立柱建物SB10500は、南北に廂をもつだけでなく、柱穴掘方の規模が一辺約1.5mと大型である点が注目される。また、遺構の重複関係からSB10500が建てられる以前にはこの空間が東西塀SA10495によって南北に区切られていたこともあきらかになった。このうち南側の空間は南北塀SA10498によってさらに東西に分かれているが、これらの塀が同時に存在したか否かは不明である。

一部の遺構の時期は出土遺物から奈良時代の後半に位置付けられるが、大半は出土遺物が少なく正確な時期比定が難しい。ただし、左京三条十五坪・十六坪の整然と建物群を配置した土地利用のあり方から考えると、本調査区の建物群も奈良時代に属する可能性は高い。各遺構の時期比定や、SB10500以降の土地利用の様相の究明が今後の課題である。

(庄田・番光)

註

- 奈良市教育委員会「奈良市埋蔵文化財調査概要報告 昭和60年度」1987。

瓦の100m²あたりの出土量をみると、軒丸瓦が0.75点、軒平瓦が1点、丸瓦が9kg、平瓦が29kgとなる。この数値は総瓦葺きと考えられる平城宮中枢部と比較して極端に低いことから、本調査区の建物は総瓦葺きではなかつた可能性が高い。(今井晃樹)

土 器 整理用コンテナ3箱分の土器が出土した。奈良時代の須恵器・土師器が主体である。SB10500・SB10496・SA10495の各柱穴からは須恵器・土師器の細片が出土したのみで、時期比定は難しい。

SK10499から出土した土器を図示した(図268)。1～4は土師器。1は椀A。平坦な底部から内唇気味に口縁部が立ち上がる。外面下位にヘラ削り調整を施した後、ミガキ調整を施す。2は杯A。平坦な底部から外方に口縁部が立ち上がる。器面の磨滅が著しく、暗文・ヘラミガキ等は観察できない。3は高杯Aの脚柱部。円筒状に作った脚部を杯部に接合するa手法で成形し、断面九～十角形になるよう外面に縱方向の面取りを施す。4は甕A。口縁端部を小さく折り返す。外面に刷毛目調整を施す。5は須恵器壺B。口頸部が短く屈曲し、口縁端部を外方に折り返し、丸くおさめる。肩部が緩やかに降り、

薬師寺東塔の調査

—第536次

1 はじめに

国宝薬師寺東塔（以下、東塔と略称）は、薬師寺が平城京へ移された奈良時代から現在まで伝わる薬師寺唯一の建物である。三重塔であるが、各層に裳階と呼ばれる差し掛けの屋根が取り付く、他に例をみない建築様式である。2009年7月から保存修理事業に着手しているが、今回は解体修理である。

発掘前の基壇は、明治時代におこなわれた修理の際に外表が一新され、さらに1952年の修理でも建物外部の敷石の多くを取り替えているが、いずれの際にも本格的な調査はおこなわれていなかった。今回の解体修理に際して、創建当初の基壇の規模や構造、材料などを調査し、基壇外装の旧状の確認および後世の改変履歴をあきらかにし、薬師寺東塔の変遷を解明するため発掘調査をおこなうこととした。加えて、不同沈下が著しい礎石の沈下原因を解明し、修理方法についての検討材料を得ることなども発掘調査の目的とし、奈良県立橿原考古学研究所との合同で2014年7月8日より調査を開始し、2015年4月22日に終了した。なお、現在の基壇外装材および敷石は、写真撮影および図面作成などの記録化をおこなった上ですべて除却し発掘調査をおこなっている。ここでは、2015年2月上旬までにあきらかになった点を以下に列挙する。なお、発掘調査成果の全容については、別途作成する発掘調査概報で公表する予定である。

2 調査成果

主な調査成果は3点である。まず、創建時から現代に至る基壇外装の構造と規模があきらかになった。今回の調査で、東塔の基壇外装は、創建時が切石積基壇（一辺13.3～13.4m）で、中世に乱石積基壇（一込13.9m）に改修され、近世には西面のみ乱石積基壇の外側へ切石積基壇を追加し、さらに明治修理時に花崗岩の壇正積基壇（一込14.6～14.7m）へ改装するといった創建以来の変遷が判明した。基壇は、改修の都度外側へ拡張されたため、古い基壇外装が完全に壊されることなく残っていた。

つぎに、創建基壇の版築がほぼ完存することを確認し



図289 第536次調査区全景（北西から）

た点がある。前述のとおり基壇外装は、後世の改変を受けていたが、基壇本体は創建時の姿を良好に保っている。版築にともなう突棒痕跡や礎石据付穴の掘削時とみられる工具痕、加えて創建時と推定される足場穴や杭跡など、東塔の造営に関わる痕跡や遺構を多数検出した。このように創建基壇の残りは良好で、塔造営に関わる情報も数多く得ることができた。このほか、基壇外周で明治修理時の足場穴を検出するなど、東塔修理の履歴についての知見も得られた。

また、裳階柱礎石では、すべてに据え付け直した痕跡が認められ、いずれも明治修理にともなうと考えられる。一方で四天柱礎石や隅柱礎石については、多くが創建時のまま動いていないこともあきらかになった。心礎についても現状では動かされた痕跡が認められない。

さいごに、西塔との共通点と相違点とが明らかになった点がある。創建時の東塔の基壇は、一込約13.7mの西塔基壇よりわずかに小さいが、大差ない規模で、高さもほぼ同じである。基壇上面から掘り込む大型の隅丸方形を呈する礎石据付穴や、四面に取り付く階段とその規模なども含め、東塔・西塔の基壇は共通点が多い。したがって東塔と西塔とは、基本的に同一規模・構造で設計され、共通した構築技術を用いて建立されたと考えられる。

一方、東塔の心礎は、柱座や舍利孔が確認されず、西塔と異なる石材の不定型な礎石である。また階段は、踏石・地覆石とも凝灰岩の切石で、とともに花崗岩を使用した西塔と異なる。さらに基壇外装地覆石は、こちらも花崗岩で統一された西塔に対し、東塔では複数の種類の石材を使用し、厚さも不均一である。さらに地覆石自体も上面の彫り込みが浅く、南込では彫り込みすらもたないといった違いがある。このように東塔は、基壇外装などの細部に西塔と異なる特徴を有することもあきらかとなつた。

（青木 敏、米川裕司・佐々木芽衣／参考研究）

興福寺旧境内の調査

—第539次

1 はじめに

本調査地は東向商店街の入口にあり、平城京左京三条六坊十四坪の東北隅に位置する。『興福寺流記』によれば、左京三条六坊十三～十六坪は天平宝字年間に興福寺へと施入され、果園・園地があったとされる。しかし、左京三条六坊十四坪における古代の様相はあきらかではない。ただし、本調査区から約50m北に位置する第467次調査では奈良時代の南北溝SD9450を(『紀要2011』)、約180m北に位置する第439次調査でも奈良時代の南北溝SD9300を検出しており(『紀要2009』)、両者は平城京東六坊大路西側溝の可能性が指摘されている。しかし、SD9450はY-15,683付近、SD9300はY-15,668付近と位置は異なり、いずれも小規模調査であったため、結論は保留されている。特に、SD9300は本調査区の北延長部に位置する。

調査はビル改築にともなうものであり、調査面積は約50m²である。発掘調査期間は2014年9月16日に開始し、同年10月2日に終了した。

2 基本層序と検出遺構

基本層序

調査区は、後世の開発で北半が大きく削平されている。調査区南半では、厚さ約0.6mの造成土を掘り下げるごとに地山(明黄褐色砂質土)が露出する。遺構は埋甕SJ10550を大土坑SK10545の上面で検出したほかは、すべて地山直上で検出した。地表面の標高は、約83.20mである。

検出遺構

検出した主な遺構は、土坑6基、埋甕1基等であり、すべて中世から近世にかけてのものである(図291)。調査区西部は東六坊大路西側溝の可能性があるSD9300の南延長に位置するが、古代の遺構は確認できなかった。
大土坑SK10545 東西3.2m以上、南北5.2m以上、深さ約0.7mの大型土坑。埋土からは奈良時代から室町時代を中心とする大量の瓦磚類および少量の土器が出土した。また、掘方が方形を呈すことや底面が平坦なことを



図290 第539次調査区位置図 1:2500

勘案すれば、周辺を整備するための地業であった可能性も考えられる。

大土坑SK10546 東西3.3m以上、南北3.1m以上、深さ約30cmの大型土坑である。SK10545と同様の性格をもつとみられ、埋土からは奈良時代から室町時代までの大量的瓦磚類および少量の土器類が出土した。重複関係からSK10545に先行する。後述するSK10547に壊される。

廐棄土坑SK10547 調査区東南部で検出した。東西約2.1m、南北約3.0m、深さ約1.8m。西北隅には土坑から脱出するための足かけ穴が残る。埋土からは奈良時代から近世までの大量的瓦、土器類、木製品、種実類等が出土した。不要品を捨て込んだいわゆるゴミ穴と考えられる。出土遺物は、土器の年代からおおよそ元和年間(1615～24)に位置づけられることが可能な一括資料である。

廐棄土坑SK10548 調査区東辺で検出した。東西1.8m、南北0.5m以上、深さ約1.2m。SK10547と同じく17世紀前半のゴミ穴と考えられ、大量の瓦、陶磁器片、および漆器片、木製品、種実類が出土した。

土坑SK10551 調査区中央部やや東寄りで検出した。直径0.9m以上、深さ約20cm。SK10545・10546を掘り込んでおり、西北は削平を受けている。

土坑SK10549 調査区西北部で検出した。直径は約1.2m、深さは約30cmである。SK10549の埋土からは中世の瓦が少量出土した。

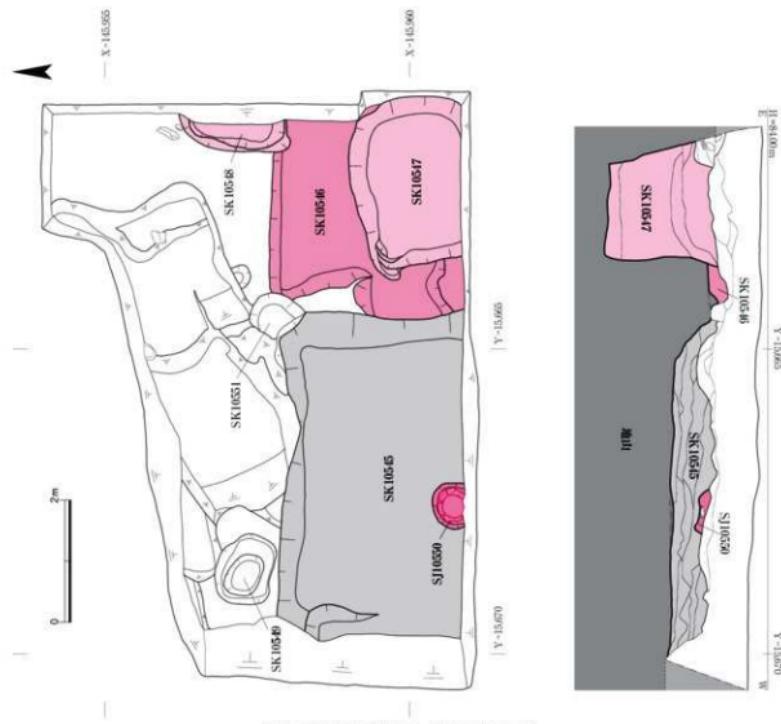


図291 第539次調査区遺構図・南壁土層図 1:80



図292 第539次調査区全貌(西から)

埋甕SJ10550 調査区南辺中央で検出した。直径約0.7m、深さ約15cm。SK10545を掘り込んで据えられており、上部は削平されている。甕の底部径は約30cm。埋甕は近世の瓦質土器である。

3 出土遺物

瓦 磚類

本調査区からは奈良時代から近世までの大量の瓦磚類が出土した(表38)。出土した瓦磚類は中世の瓦が中心だが、奈良時代や平安時代の瓦も一定量含まれる。特にSK10545埋土には大量の瓦が含まれていた。ここでは主要な軒瓦を報告する(図293)。

1~8は軒丸瓦。1は6301A。奈良時代初頭の興福寺創建瓦。2は6235J。奈良時代後半で、東大寺式の文様構成をもつ興福寺所用瓦である。3~5は中世の「興福

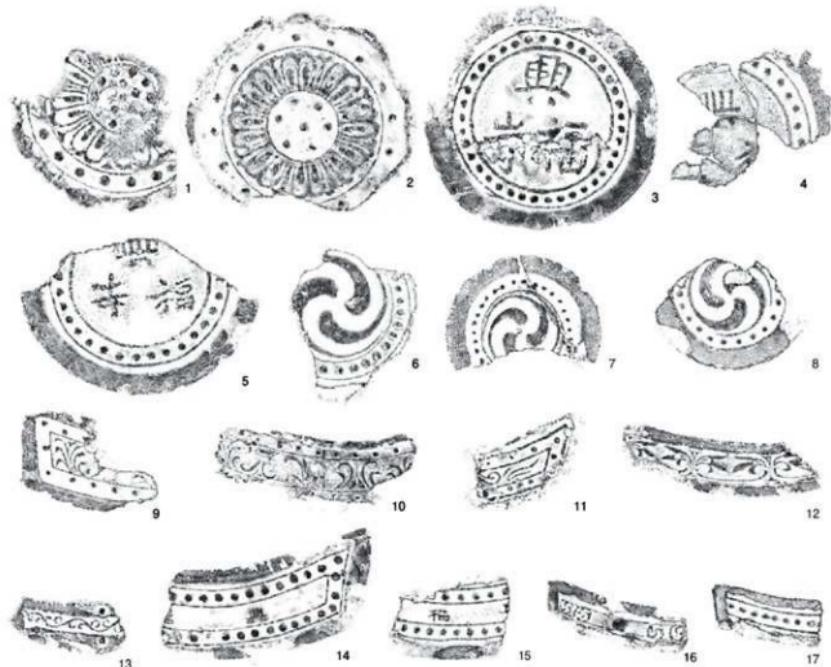


図293 第539次調査出土軒瓦 1:4

寺」銘軒丸瓦。3は鎌倉時代のもので興福寺食堂で出土例がある。4・5はそれぞれ範が異なるが、「興福寺」銘軒丸瓦のなかではこれまでに出土例がない。両者の詳細な時期は不明だが、3と比べ瓦当に対して字がやや小ぶりで、室町時代の「興福寺」銘軒丸瓦の特徴に似る。

6~8は巴文軒丸瓦。6・7は左三巴文軒丸瓦。6は平安時代末から鎌倉時代。7は鎌倉時代。8は右三巴文軒丸瓦。鎌倉時代。

9~17は軒平瓦。9・10は奈良時代後半の6739A。西隆寺と同範である。11は均整唐草文軒平瓦。食堂の調査で出土例がある。平安時代前期。12は外縁が素文で内区にはパルメットが等間隔で配される。平安時代。13は左偏行唐草文軒平瓦。外区上面に珠文が疎らに配される。平安時代後期。興福寺食堂の調査で出土例がある。14・

15は「興福寺」銘軒平瓦。両者は異範で15のはうがやや小ぶりである。いずれも鎌倉時代のもので興福寺食堂の調査で出土例がある。16は内区に右三巴文を配す。鎌倉時代。17は内区に珠文を配す。室町時代。興福寺食堂の調査で出土例がある。

なお、出土位置に関しては、1が廃棄土坑SK10548出土。2~6、8~12、14・15・17が大土坑SK10545出土。13が廃棄土坑SK10547出土。7・16が表土からの出土である。

本調査出土の瓦磚類は、6301Aや「興福寺」銘軒瓦が示すように興福寺所用瓦である。これらは本調査区の位置からも興福寺の築地等に使われていたもの可能性があるが、軒瓦型式にまとまりがなく断定はできない。

(石田由紀子)

表38 第539次調査出土瓦類一覧

軒丸瓦		軒平瓦		その他	
型式	種類	点数	型式	種類	点数
6235	J 2	6671	L 1	丸瓦（ヘラ書）	2
6301	A 3		?	平瓦（刻印）	1
古代	3	6682	?	（タキ）	1
平安	3	6739	A 2	面戸瓦	7
中世	20	古代	3	小型面戸瓦？	1
（興福寺）	9	平安	8	割面戸瓦？	1
巴（中世）	9	中世	29	割擬牛瓦	1
（中近世）	2	（興福寺）	16	隕木蓋	3
（近世）	5	中近世	2	雁擬瓦	4
近世	1	近世	1	目板瓦	3
時代不明	6	時代不明	2		
軒丸瓦計		63	軒平瓦計		66
丸瓦		平瓦	縞灰岩		レンガ
重量		562888kg	124419kg		0.263kg
点数		2810	8386		5
					1

土器類

整理用コンテナに17箱分の土器・陶磁器が出土した。大半が廃棄土坑SK10547・10548と大土坑SK10545・10546からの出土である。SK10545・10546出土品には、平安時代に遡る土器や灰釉陶器もわずかに含まれるが、多くは13世紀以降のものとみられる赤味の強い胎土の土器器皿で、14世紀半ば以降に出現するとされる白色系胎土の土器器皿も少量確認できる。したがって、概ね室町時代の遺物と目されるが、全般的に細片化しており、元来は先行する時期の遺構などに含まれていたものと考えられる。以下、ほぼ同時期であるSK10547・10548のうち、出土量の多いSK10548最下層出土分について報告する(図29)。

1~29は土器器皿。内面に凹線状の圓線を有する29は、その特徴から京都近郊産と考えられ、この土器群の中では異質な存在である。その他の土器器皿は、南都(奈良)の遺跡に通有のもので、胎土の色調から2群に大別できる。胎土が赤褐色を呈する一群(1~8)は、口径8cm前後のもののみで構成されており、目立った法量分化は認められない。これに対して、にぶい黄橙褐色を呈する一群(9~28)には、口径7cm前後の小型品から口径12.5cm前後の大型品まであり、法量的に4ないし5群に分化するとみられる。口径の大小を問わず、口縁部には油煙の付着が認められるもの(7・17・19・20)が少なからずあり、灯明皿として使用されたと考えられる。

30~38は美濃焼の施釉陶器。図示した灰釉内堀皿(30)・灰釉折沿皿(31)・長石釉小杯(32)・長石釉碗(33)・

灰釉碗(34・35)・長石釉小鉢(36)・鉄釉天目茶碗(37)・鉄釉肩衝茶入(38)のほか、長石釉丸皿や全体の形状は不明だが織部焼の把手などがある。多種多様な器形が認められる一方で、後述する唐津焼と比べると量的には少なく、概して破片が小型化している。

39~46は唐津焼と俗称される肥前地域産の施釉陶器で、皿(39~41)・碗(42~45)・向付(46)のほか、図示しなかったが德利・片口鉢・大平鉢がある。多くは土灰釉がかけられただけのものであるが、釉下に鉄絵が施されたいわゆる絵唐津(45・46)も少數認められる。美濃焼と比べると、器形的な多様性は乏しいが、量的には圧倒的に多数を占めており、概して破片も大型である。

47・48は備前焼の焼締陶器である。47の内面には描り目状の櫛描波状文が認められるが、描鉢としての使用痕跡(摩耗)は確認できない。描鉢としては異例の小型品であることを勘案するならば、茶道具の描盆水指として製作・使用されたものと考えられる。48は德利とみられる袋物の底部片で、底裏に千鳥風の文様と「淨光口」の文字が墨書きされている。出土地点の性格から、「淨光」とは興福寺僧の名ではないかと考えられ、判読できない3文字目を花押とみなしても良さそうであるが、断定は避けておく。

49・50は信楽焼の焼締陶器。49には6本、50には5本を1単位とする描り目が施されており、いずれにも描鉢としての使用痕跡(摩耗)が認められる。

51~54は中国からの輸入磁器。52・53は青花磁器で、図示した以外にも小杯や漳州窯系の大型盤がある。53・54は白磁で、独特の象牙色を呈する54はその特徴から福建省の德化窯産と目される。胴部下半しか残存していないが、親音立像であろう。

55は瓦質土器で、胴部外面に8弁の菊花形印花文が約2.5cm間隔で施されている。瓦質土器には、図示した小型浅鉢のほかに描鉢・灯消壺・甕などがある。

56は焼塩壺。印・銘は認められない。57は土器器皿の口縁部。58は土器器の焰熔。

この土器群の年代を推定する上で有力な手がかりとなるのは、前述の京都近郊土器器皿(29)で、類品は元和6年(1620)の火災にともなう廃棄物処理土坑と考えられる上京遺跡・室町殿跡(京都市)1区土坑12および1区土坑65¹⁾から出土している。伴出の美濃焼・唐津

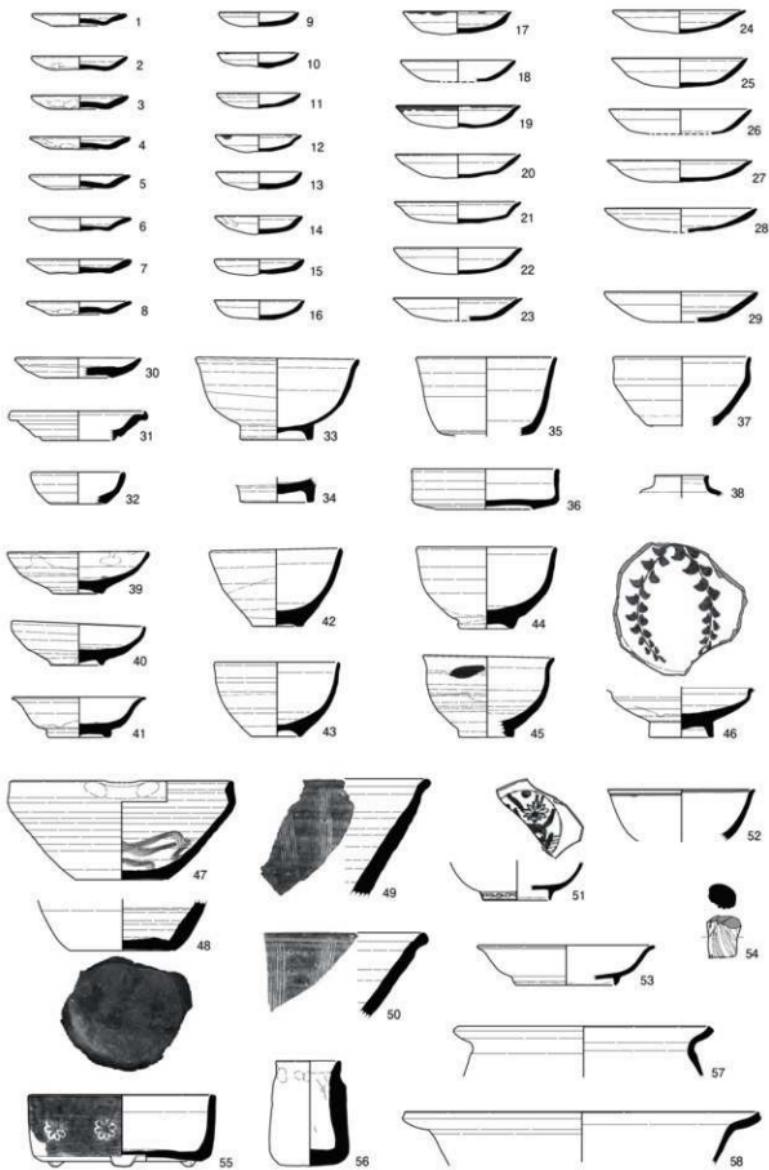


図294 第539次調査SK10547出土土器 1:4

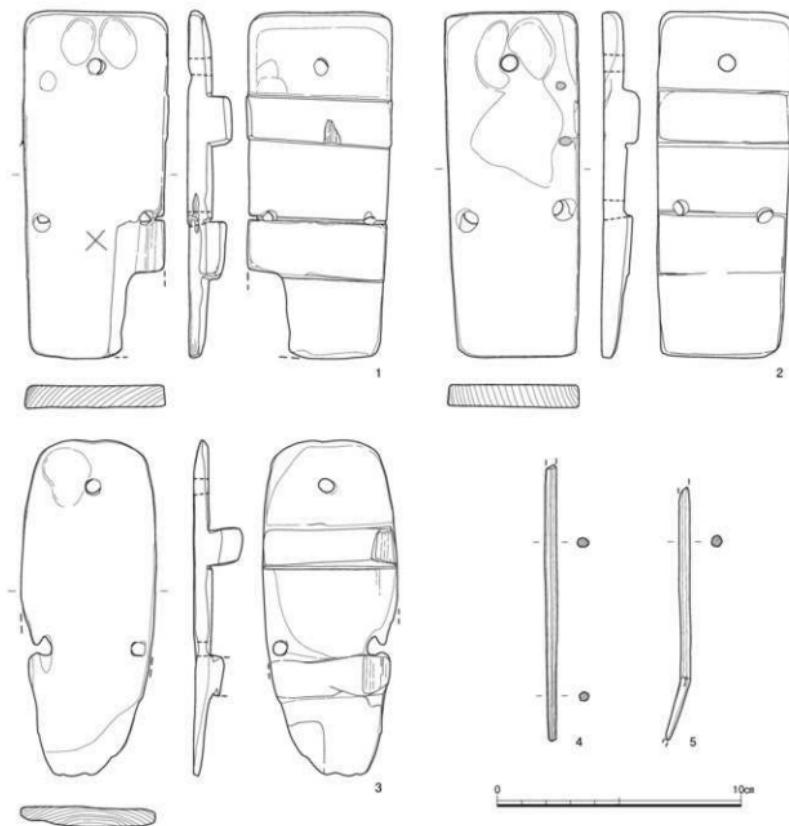


図295 第539次調査SK10547出土木製品 1:2

焼・信楽焼・焼塩壺・土師器培塿についても、高い共通性をみいだせる個体が少なくなく、SK10548最下層出土品についても略同時期、すなわち元和年間（1615～24）頃のものと考えることが許されよう。（尾野善裕）

木製品など

廢棄土坑SK10547からは、下駄9点、箸9点、折敷片1点、漆塗椀蓋1点、漆器片23点、結物桶部材28点、薄板6点、加工棒4点、織物片1点などが出土した。SK10547からは、下駄1点、箸14点、漆塗皿1点や漆塗

椀1点、漆器片8点、ほかには結物桶部材や竹籠編物片などが出土している。

SK10547から出土した下駄はすべて台と歯を一本で作り出す連歎下駄で、前壺は前方中央に、後壺は後歎の前に穿孔されるタイプである（図295-1～3）。台裏には、歯を削り出す際の工具痕が溝状に残る。下駄の平面形態には長方形（5点）と楕円形（4点）の二者があるが、明確に1足として認識できるものはない。1は、足指の圧痕から左足用と想定される。後壺の中間に×印が刻ま

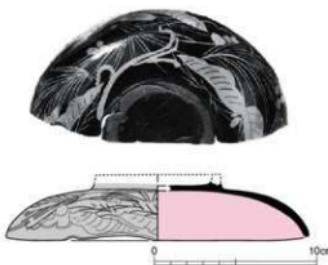


図296 第539次調査SK10547出土漆器 1:3

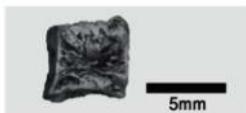


図297 第539次調査SK10547出土動物遺体 (ウナギ骨)

れており、個人のものと識別するための印と考えられる。台表の線刻については、大坂城跡出土の17世紀のものなどに類例がある。長21.5cm、幅9.0cm、厚2.7cm、板目材。2は全体的に残りがよいが、足の圧痕からは左右どちらであるか判断できない。長21.3cm、幅8.1cm、厚2.2cm、追査目材。3は平面形態が楕円形で、台尻部分の腐食が激しい。残存長20.7cm、幅8.3cm、厚3.0cm、板目材。

4、5は箸である。4は残存長17.1cm、最大径0.7cm、断面は多角形で先端は径0.5cmとやや細くなる。5は残存長15.8cm、径0.7cmで、断面は多角形である。残りの7点は折損、または腐食している。図296は漆塗蓋蓋で、外面は黒漆塗に赤漆で文様を描き、内面が赤漆塗である。外面全体に模様が描かれている点や厚みなどから蓋と判断した。復元径12.6cm、残存高2.45cm、厚0.3cm。

その他の漆器には、「丸に一文字」の家紋や「丸に紅葉」紋が入る、内面赤漆、外面黒漆塗の破片がある。

また図化したもの以外に、結物桶の側板、底板（蓋板）、木栓、等の部材があるが、残りが悪く同一個体を識別できない。側板のうち、2枚には紐を通すための孔が2つずつある。長38.0cm、幅8.2cm、厚1.0cm。底板（蓋板）は、残存長23.3cm、残存幅15.8cm、厚1.2cm。

SK10548から出土した下駄1点には、鼻緒が遺存して

いた。前歯は削り出しているが、後歯は別材を木釘で留めており、後補とみられる。残存長20.0cm、幅8.3cm、厚3.5cm。

石製品

SK10547から、硯が4点、円板形石製品2点が出土した。硯は完形品のものはない。4点とも石材が異なるが、内幅のわかる3点は、同一幅である。使い減りが著しい。円板形石製品は直径3.1~3.2cm、厚みは0.8~0.9cm。

植物種実類

SK110547からは、メロン仲間、サンショウ、シソ属などの食用植物の種実が、SK10548からはカキノキ、シソ属、メロン仲間やハシバミの種実、クリの皮等も出土している。

(浦 香子)

動物遺体

SK10547から、ウナギ属の腹椎が1点出土した(図297)。骨は焼けており白色化していた。

(山崎 健)

4まとめ

今回の調査では古代の遺構は確認できなかったものの、中世から近世初期にかけての興福寺に関連する土坑群を検出した。

廃棄土坑SK10547・10548から出土した多量の遺物はおおよそ元和年間(1615~24)に位置付けられる良好な一括資料群である。出土遺物は、陶器や土器盤のほか、下駄、箸、漆器等、日常生活を示すものであり、当該期には調査区周辺が生活域であったことをうかがわせる。本調査地は、興福寺西面築地のすぐ西側にあたるが、近世の古絵図では築地の西側は東向通りまで空間地となっており、民家が建っていた様子はない。興福寺境内西辺は近世には興福寺の子院が建ち並んでおり、SK10547・10548出土遺物は子院で使用され、廃棄されたものの可能性がある。大土坑SK10545・10546で大量に廃棄された瓦磧類とあわせれば、室町時代以降、調査区周辺は大幅な変更がなされ、興福寺寺城西辺では子院が整備されていったと考えることも可能であろう。

以上のように、中世から近世初期にかけての興福寺に関連する重要な知見を得ることができた。

(石田)

註

- 1) 京都市埋蔵文化財研究所「京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2013-8上京遺跡・室町遺跡」2014。

興福寺境内の調査

—第540次・第541次・第2013-32次

1はじめに

興福寺では「興福寺境内整備基本構想」(1998年)に基づき、寺觀の復元・整備が進められている。この整備事業にともない、奈良文化財研究所では1998年以来、中金堂院、南大門、北円堂院などの発掘調査を継続しておこなっている。今回もその一環として、西室(西僧房)および北円堂院を対象として調査をおこなった(第540次)。また防災設備工事のため、興福寺境内各所で、発掘調査を実施した(第541次)。

第540次調査は、3つの調査区に分けておこなった(図298)。これをA、B、C区と呼称する。A区は西室北縁部269m²、B区は北円堂院北面回廊の一部138m²、そしてC区は北円堂院南面内庭部44m²である。西室南半は2013年(第516次)に、北円堂の回廊部分は、南面・東面と北面の一部を2011年(第483次)に調査している。A区は西室の規模の確定と小子房の様相把握、B区は北面回廊未調査部分の様相把握、C区は灯籠や参道の痕跡の有無の確認を調査目的とした。調査は2014年9月29日に着手し、2015年1月16日に終了した。

2 西室北縁部の調査

西室の概要と既往の調査

西室の概要 興福寺は、中金堂と講堂の西・北・東をコの字型に取り囲む三面僧房を有しており、西僧房は「西室」、北僧房は「北室」、東僧房は「中室」と呼ばれている。西室は大房と小子房からなる。西室の建立年代は、「興福寺流記」等の史料から720年代と考えられる。建立以後8度罹災したとみられ、最後の焼失は享保2年(1717)で、以後再建されることになった。また、江戸時代中頃の絵画資料には、西室大房は描かれるものの小子房は描かれていないものがあり、小子房は大房より早く廃絶したと考えられる。

既往の調査と復元 西室の建物規模については「興福寺流記」など複数の史料に記述がみられるが、史料により異なる点も多い。西室大房の従来の復元は「興福寺流記」と地表に露出している礎石の実測をもとにしたも

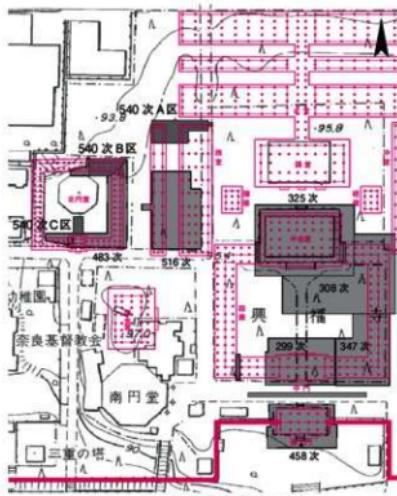


図298 第540次調査区位置図 1:2500

ので、大岡實による案¹⁾と鈴木嘉吉による案²⁾がある。大房について、両案とも梁行方向は4間、総長45尺とするが、大岡案は桁行9間、総長は202.5尺、柱間寸法は22.5尺等間とし、北室との規則性を重視する。鈴木案は、桁行11間、総長は210尺、柱間寸法は北6間は22.5尺、南5間は15尺とする。鈴木案は1955年にガス管理設工事で確認された西室大房の東・南・北面の基壇外装を基にしていた。2013年度調査(第516次)では、大房SB10450の建物規模は、桁行10間、梁行4間で、南北62.54m(212尺)、東西11.80m(40尺)、柱間寸法は桁行の南端2間が各4.72m(16尺)、以北が6.64m(22.5尺)等間、梁行は2.95m(10尺)等間に復元されている。また、側柱心から地覆石外縁までの距離は、南面で2.10m、東面で2.70mとする(『紀要2014』)。

地形と基本層序

調査前の地形は、礎石が露出している調査区東半部分では概ね平坦で、調査区の西部では西に向かって標高を下げる。調査区東面は興福寺現境内の南北参道の位置にあたり、西室大房SB10450の東側柱筋想定位置は参道の路面上にある。

基本層序は、上から表土、褐色砂質土(土師器片を多く含む)、明黄褐色粘土あるいは黄褐色砂礫土の地山である。調査区中央付近にある南北溝群SD10601~10604より東方、西室大房の基壇の範囲では、基本的には地山上

面で遺構を検出した。同溝群より西方では、大部分で中世以降の整地土ないし土坑が認められ、その上面で遺構を検出した。遺構検出面の標高は、調査区東端で約95.2m、西端で約94.7mである。

検出遺構

検出遺構は、礎石建物1棟、掘立柱建物1棟、南北溝4条、円形土坑1基、方形土坑4基、土器類土坑1基、埋甕土坑11基、その他の土坑20基以上、カマド6基、近世道路1条である(図299)。これらは、①西室創建期から掘立柱建物廃絶までの1期、②掘立柱建物廃絶後から西室大房廃絶までの2期、③西室廃絶前後以降の3期の、3つの時期の遺構群に大きく区分できる。以下、それぞれの時期ごとに概要を述べる。

①1期

礎石建物(西室大房)1棟、掘立柱建物(小子房か)1棟で構成される。

礎石建物SB10450(西室大房) 桁行10間、梁行4間の南北棟礎石建物で、その北端の、桁行1間半分を検出した。柱間寸法は、桁行約6.6m(22.5尺)、梁行は中央2間が約3.2m(11尺)、その他は約3.0m(10尺)である(基準尺は1尺=0.295mとする)。桁行方向の親柱礎石間に間柱の礎石を2基ずつ配し、それぞれの柱間は約2.2m(7.5尺)である。親柱礎石位置では据付穴、抜取穴を検出した。礎石は安山岩や花崗岩の自然石による。安山岩の礎石は、長軸0.9~1.1m、短軸0.7~0.85m、成0.6~0.7mである。据付穴は径1.3~1.5mの隅丸方形ないし格円形で、深さは検出面から30cm程度である。安山岩の礎石はいずれも据え替えの痕跡はなく、遺物も出土しない(図300)。ただし、花崗岩の1石(ハ・十一)は、長軸0.8m、短軸0.65m、成20cmで安山岩の礎石よりも薄く、やや小さい。礎石の下方に古い礎石の抜取穴と据付穴を確認した(図302)。後世に据え替えられたと考えられるが、抜取穴からの遺物は出土せず、その時期は不明である。また口列の礎石は、当所位置より若干西方(現参道の西線)へ動かされている。この所見は第516次の調査成果と一致する。また、イ・十一の礎石のみ抜き取られており、抜取穴(径0.7m前後)には凝灰岩の切石が捨て込まれていた。間柱の礎石は、残存しているものは8基中2基のみで、大きさは径0.5~0.6m、高さ25cmである。そのほかの礎石想定位置では、調査区際や土層畔の断面で礎石の据付痕跡

を検出した。据付穴は径0.7m、深さは検出面から10cm程度。間柱の据付穴からも、遺物は出土していない。

基壇 磂石建物SB10450の基壇は、地山削り出しで造られている。第516次調査では、基壇南縁で上面にわずかな積み土を認めているが、今回の調査では確認できなかった。基壇北面では、基壇外装の地覆石と羽目石を検出した。大房北妻の礎石心から地覆石外面までの距離は約1.9m(6.5尺)である。これと、第516次調査で検出した基壇南面の地覆石との外側距離は約66.5m(225尺)で、南北の基壇規模が確定した。一方、基壇の東面と西面では、後世の遺構や攪乱によって削平を受け、基壇外装は確認できなかった。

基壇の東面は後世の參道造成で削平されており、西面は存在しないか、後述の南北溝群により削平を受けているため、その痕跡すら確認できなかった。北面では地覆石と羽目石のみを確認し、犬走りや雨落溝などは認められなかった。基壇外装の石材は、すべて二上山産凝灰岩の切石である。大房礎石ハ列より東方では、凝灰岩2石が上下に重なり、地覆石と羽目石と考えられるが、上方にのる凝灰岩が下方の凝灰岩よりも基壇の外に傾く(図304・305)。一方、ハ列より西方では、地覆石のみが残存し、地覆石上面には羽目石をのせる仕口を残す。地覆石の底面には瓦片が混じる整地土が敷き込まれており、後世に据え替えた可能性が高い。

掘立柱建物SB10440 大房西側柱の約2m西方には数条の南北溝群があり、この溝埋土を除去して南北棟掘立柱建物の柱穴を検出した。柱位置や柱間寸法から、第516次調査で検出した掘立柱建物と一連の建物と考えられる。建物全体規模は桁行10間、梁行2間で、今回の調査では、その北端にあたる。礎石建物SB10450と梁行方向の柱筋を揃え、またSB10450と同様、親柱と間柱がある。検出したのは、東側柱の柱穴5基と、棟通りの位置にあたる柱穴の2基(底面のみ)である(図301)。そのほかの柱穴は、後世の土坑群により削平されている。親柱の桁行の柱間寸法は、約6.6mである。梁行の柱間寸法は、この調査区では確定できないが、底面付近を検出した棟通りの柱穴や第516次の調査成果に基づくと、約2.6mと考えられる。建物規模は、桁行はSB10450と同じ約62.5m(212尺)、梁行は約52.6m(8.5尺)に復元できる。親柱の柱穴掘方は一辺約0.8mで、深さは検出面から約0.8m、

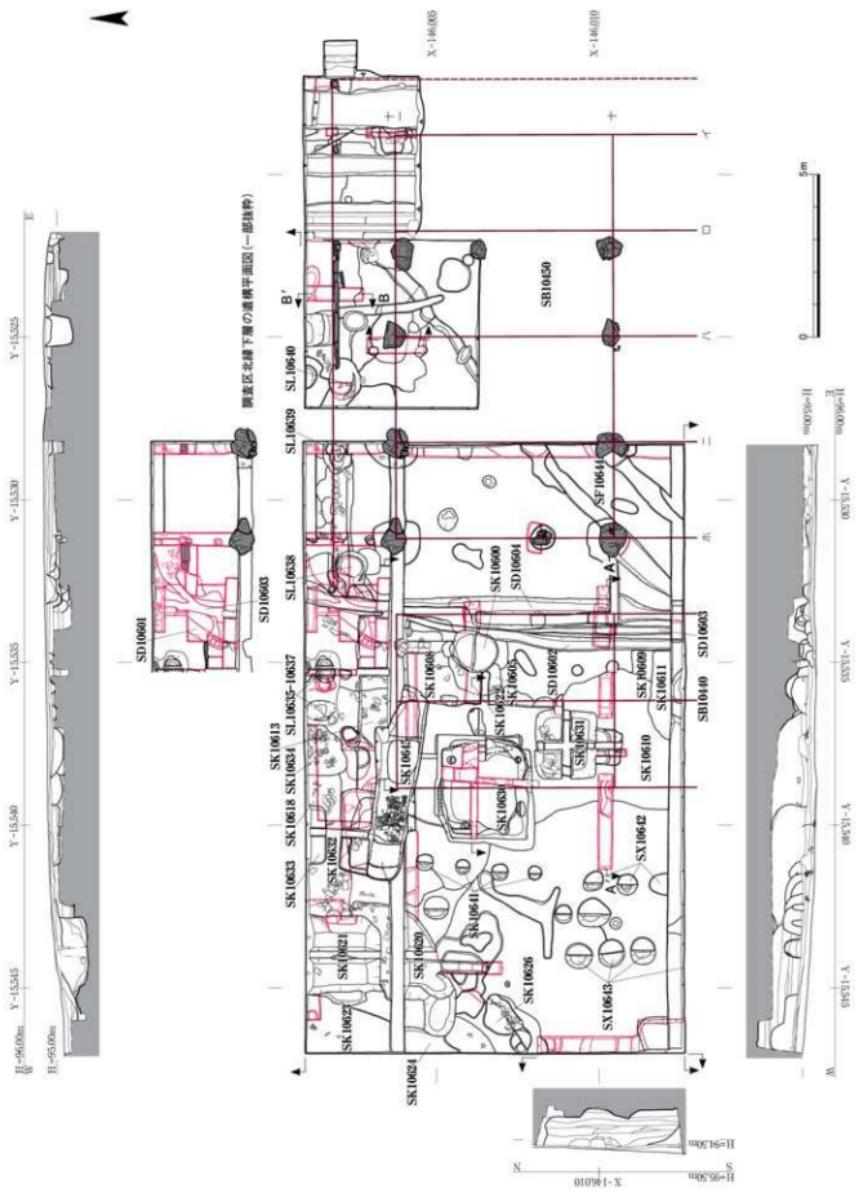


図299 第540次調査A区(西室北縁部)遺構図・土層図 1:150

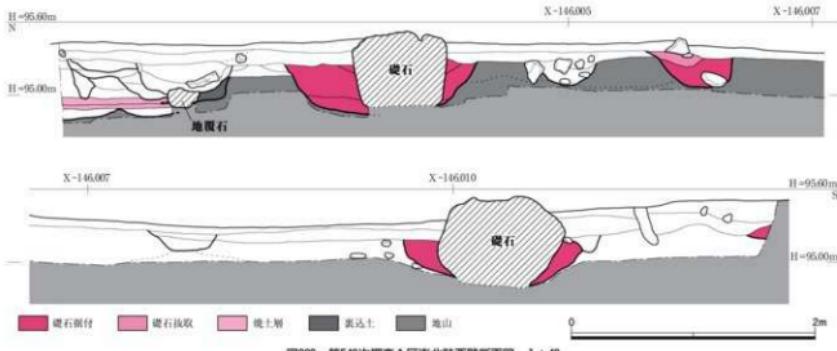


図300 第540次調査A区南北壁西壁断面図 1:40

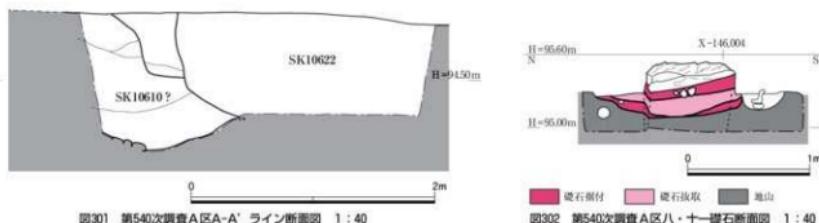
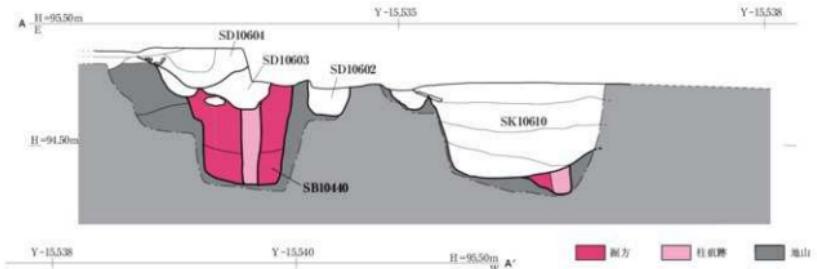


図301 第540次調査A区A-A' ライン断面図 1:40

図302 第540次調査A区八・十一壁断面図 1:40

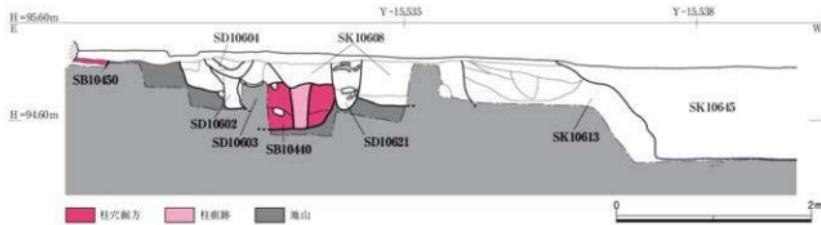


図303 第540次調査A区東西壁北壁断面図 1:50

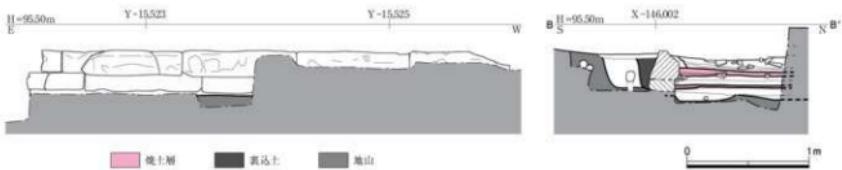


図304 基壇外装立面図(左)および基壇外装周辺土層図(右) 1:40



図305 西室大房基壇外装(北東から)

同柱の柱穴掘方は一辺0.5~0.8mで、深さは検出面から約40cmである。親柱の柱穴では柱痕跡を残す(図301・303)。いずれの掘方からも遺物は出土していない。この建物の東側柱筋と、SB10450の西側柱筋との間の距離は約2.5mである。

②時期

礎石建物SB10450は存続し、その西方に南北溝4条、円形土坑1基、土坑20基以上が展開する。

南北溝SD10601~10604 SB10450の西方2~3mに南北溝を4条検出した。SD10601は瓦暗渠で、調査区北端付近で東に斜行する。それ以外は素掘溝である。幅40~50cm、深さ20~40cm。これらの南北溝は、いずれもSB10450基壇の西北隅付近で基壇に沿って折れる様相が認められないため、地覆石の抜取穴や据付穴とは考えにくい。掘立柱建物SB10440廃絶後にSB10450の雨落溝や同窓の排水溝などとして機能していたと考えられる。

円形土坑SK10600 径約1.2m、深さ約2.5mのほぼ正円形の土坑。埋土は大きく複数の単位に分けられ、検出面より50cm下から底面までの約2mの間に、数枚の砂層を挟んで、14世紀前半に位置付けられる赤土器を多量に含む(図306)。土坑の底面には平瓦を数枚敷く。井戸の可能性もあるが湧水ではなく、廃棄土坑として利用されたと考えられる。

土坑SK10605~10625 南北溝SD10601~10604よりも西には、土器や瓦を多量に含む廃棄土坑群が広がる。大きなもので径10m以上、深さ1.5m以上、小さなもの

で径40cm前後と多様である。調査区中央では土器の廃棄土坑が多く、西方では瓦の廃棄土坑が多い。また、SK10610とSK10622は調査区南西部の一帯に広がる土坑あるいは整地で、深さは両者とも1.5m以上ある。土坑は複雑に重複し、全体の把握は困難だが平安時代から江戸時代にかけて断続的に掘削が繰り返されていたとみられる。調査区西部のSK10619やSK10620からは、奈良時代から平安時代の瓦や土器が出土した。また、調査区中央部の土器の廃棄土坑SK10605は、平安時代中頃に位置付けられる。これらが最も古い土坑群で、特に後者は掘立柱建物SB10440の廃絶年代にも関わる。その他の土坑で年代がわかるものには、SK10613(17世紀前半)がある。

③構造

方形土坑4基、土師器廃棄土坑1基、竈5基、埋甕土坑11基、長方形土坑1基、近世道路がある。

方形土坑SK10630~10633 方形土坑を4基検出した。SK10633は調査区の北端にあり、さらに北に続く。またSK10632は長方形土坑SK10645に壊されているため、部分的な検出にとどまる。両土坑とも一辺1.8m前後の方形で、深さ約30cm。SK10630は、一辺2.6m前後のほぼ正方形で、深さは約40m。3回の改修が認められる。形態は竪穴建物状で、白色粘土の貼床をもつ。詳細に調査した最も新しいものでは、貼床とその下の多量の土師器を重ねて埋めた土器敷きを確認し、貼床を掘り込む小穴を4基確認した(図307)。小穴はいずれも径15cm前後、深さ10cmほどで柱穴かどうか判然としない。貼床と土器敷きは2時期分が認識できる(図309)。上層の貼床は厚さ10cm前後、土器敷きは厚さ5cm前後で、下層の貼床は厚さ15cm前後、土器敷きは厚さ10~15cmである。土坑埋土および土器敷きの土器の年代は、いずれも17世紀後半から18世紀前半である。この年代観によると、SK10630の廃絶は、西室大房焼失の年代(1717年)よりも前である可能性がある。SK10631は長軸約2.1m、短軸約1.9m、深さ約0.9mで、他の方形土坑より深い。これらの方形土坑からは、土器が比較的多く出土するのみである。方形土坑相互の形態が少しづつ異なるのですべて同じ性格とはいいくらいが、一辺1.8~2.6mという規模や、あきらかに床面を意識したSK10630の状況から、何らかの貯蔵施

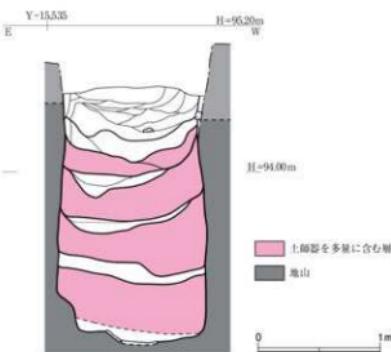


図306 円形土坑SK10600土師器投棄状況（左）と断面図（右） 1:40



図307 方形土坑SK10630（西から）

図308 窓SL10635～10637と土師器廃棄土坑SK10634（北から）

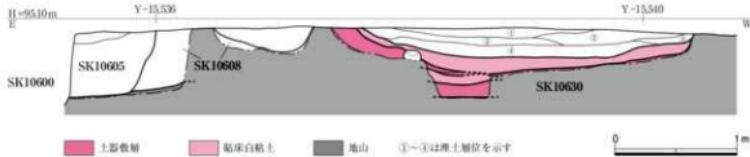


図309 方形土坑SK10630とその周辺の断面図（北から） 1:40

設と推察される。

土師器廃棄土坑SK10634 径約1.5m、深さ30cm程度の円形土坑。完形の土師器が多量に出土した（図308）。廃棄土坑と考えられる。土師器は18世紀中頃のものと考えられる。

竈SL10635～10640 調査区北端付近で6基確認した。これらのうち、SL10638～10640は西室大房SB10450の基礎外装を壊す。竈の平面は長軸0.7～0.9m、短軸0.5～0.7mの小梢円形で、一端が開き、この部分が焚口と考えられる。底面には木炭片が広がり、側壁は被熱により赤化する。ただし、側壁の立ち上がりは後世にはほとんど削平する。

されている。形態的には大きく次の2つに分かれる。すなわち、竈SL10635・10636は、それぞれ2基が一連となり、平面形状がメガネ状になる。SL10638～10640はそれぞれ1基単独である。両者は、焚口と煙り出しの方向が異なり、前者はその方向が西→東（SL10635・10636）と南→北（SL10637）があるのに対して、後者は西→東のみである。前者の2連竈は、SL10637が新しい。

埋甕土坑群SX10641～10643 調査区の西南部で確認した。11基検出し（1基は調査区南壁にかかる）、3基から4基を1単位とし、南北に並ぶ。土坑の大きさは、径0.5～0.8m、深さ30～50cmで、うち2基から陶質の甕が出

土し、1点はほぼ完形であった。

長方形土坑SK10645 調査区の中央やや北寄りで検出した。長軸約5.5m、短軸約1.1m、深さ約1.2mで、長軸が北西—南東方向に向く。短軸は緩やかな傾斜で立ち上がり、斜面を階段状に成形している。底面には瓦片を敷く。同形態の土坑は、第516次調査でも2基検出している。出土遺物にガラス瓶など近現代の遺物を含む。太平洋戦争時の防空壕と考えられる。

近世道路SF10644 調査区の東端部に北東—南西方向の斜行溝2条と、これに挟まれる小礫敷面を検出した。これは「奈良町絵図」(19世紀前半)などの資料から北円堂への参道と考えられる。

(芝原次郎)

出土遺物

土器・陶磁器 整理用コンテナに約80箱の土器・陶磁器が出土した。平安・鎌倉時代に遡る遺物も少數認められるが、多くは江戸時代のもので、特に土師器皿が目立つ。以下、主要遺構からの出土品について記す(図310)。
土坑SK10620出土土器 土師器皿(1~4)のはか、白色土器の椀(5)と緑釉陶器の小片(6)が出土した。土師器皿には、口縁部が「て」の字状とも形容される独特の形状を呈する一群(1~2)と、外反する一群(3~4)があり、後者は口径15cm前後の大型品と口径11cm前後の小型品が認められる。緑釉陶器は器形を特定することが難しいが、内面が二次的に被熱していると見受けられ、香炉の体部と推定される。土師器皿の形態的特徴から、11世紀末ないし12世紀初頭頃の遺物群と考えられる。

土坑SK10605出土土器 土師器皿(7~12)を主体とするが、少量の瓦器椀・皿をともなう。土師器皿は、基本的に口縁部外面に2段のナデ調整が施されているもので、口径15cm前後と口径11cm弱の大小2群に法量分化する。SK10620出土品と比べると、概して口縁部が内側する傾向にあり、後出的要素が強く認められるが、外反する口縁部を有する個体も少數含まれている。12世紀前半頃のものと考えられる。

円形土坑SK10600出土土器 南都の中世土器に特徴的な、赤褐色の胎土を有する皿(13~30)がまとまって出土した。径高指数(口径+器高×100)25未満の浅手の一群(13~28)と、径高指数30前後の深手の一群(29~30)に大別でき、浅手の一群は口径9cm前後と口径12cm前後の大小2群に法量分化する。深手の一群にも口径10

cm前後の小型品と、口径12cm弱の大型品があるが、浅手の一群と比べて極端に個体数が少ない。胎土の上で顯著な違いは認められず、いずれも口縁部外面に1段もしくは2段のナデ調整を施す点で共通するが、深手の一群は全般的に丁寧に作られている。曆年代を推定させる共伴遺物を欠くが、土師器皿の様相が近似する奈良市教育委員会平城京第559次調査SK638・639出土品³⁾の中に、京都近郊産と目される土師器皿がともなっていることが手がかりとなる。SK638・639出土の京都近郊産土師器皿は、貞和元年(1345)に光明天皇から寺地を賜り、京都六条堀川に創建された本國寺の造営に際して埋められたと考えられる平安京楊梅小路南側溝出土品⁴⁾との類似性が高く、概ね14世紀前半のものと考えられるので、SK10600出土土器についても、ほぼ同時期のものと考えることが許されよう。

方形土坑SK10630出土土器 4層に分かれる埋土のうち、ほとんど遺物を含まない③層を挟んで、下層の④層と上層の①・②層からの出土があり、複数個体で破片が接合できた①・②層出土品については一括する。④層出土品には、土師器皿(31~35)・肥前地域産の白磁碗(36)・鉄釉壺(37)・信楽焼の擂鉢(38)・瓦器擂鉢(39)があり、①・②層出土品には、土師器皿(40~44)・肥前地域産の施釉陶器碗(45・46)と染付磁器碗(48)・信楽焼の擂鉢(47)などがある。31・34は灯明皿として用いられたらしく、口縁部に煤が付着している。①・②層出土の土師器皿は、口径がやや小型化している点に④層出土品よりも年代的に後出する要素を見いだすことができるが、共伴した陶器に際立った年代差は認められない。①・②層から出土した信楽焼擂鉢(47)、内野山窯系の緑釉陶器碗(45)、高台内に「富永」の印銘をもつ京焼風陶器碗(46)といった国産施釉陶器類は、宝永5年(1707)の大火にともなう整地層に覆われていた平安京左京北辺四坊穴蔵SF1387出土品⁵⁾と高い共通性を示しており、18世紀初頭頃のものと考えられる。なお、図示していないが、SK10630の貼床下からは大量の土師器皿が出土しており、形質的には④層出土品との近似性が高いように見受けられる。

土坑SK10634出土土器 ほとんどが土師器皿(49~63)で占められているが、肥前地域産の白磁碗(64)などがわずかにともなう。土師器皿の胎土は、概して緻密で、

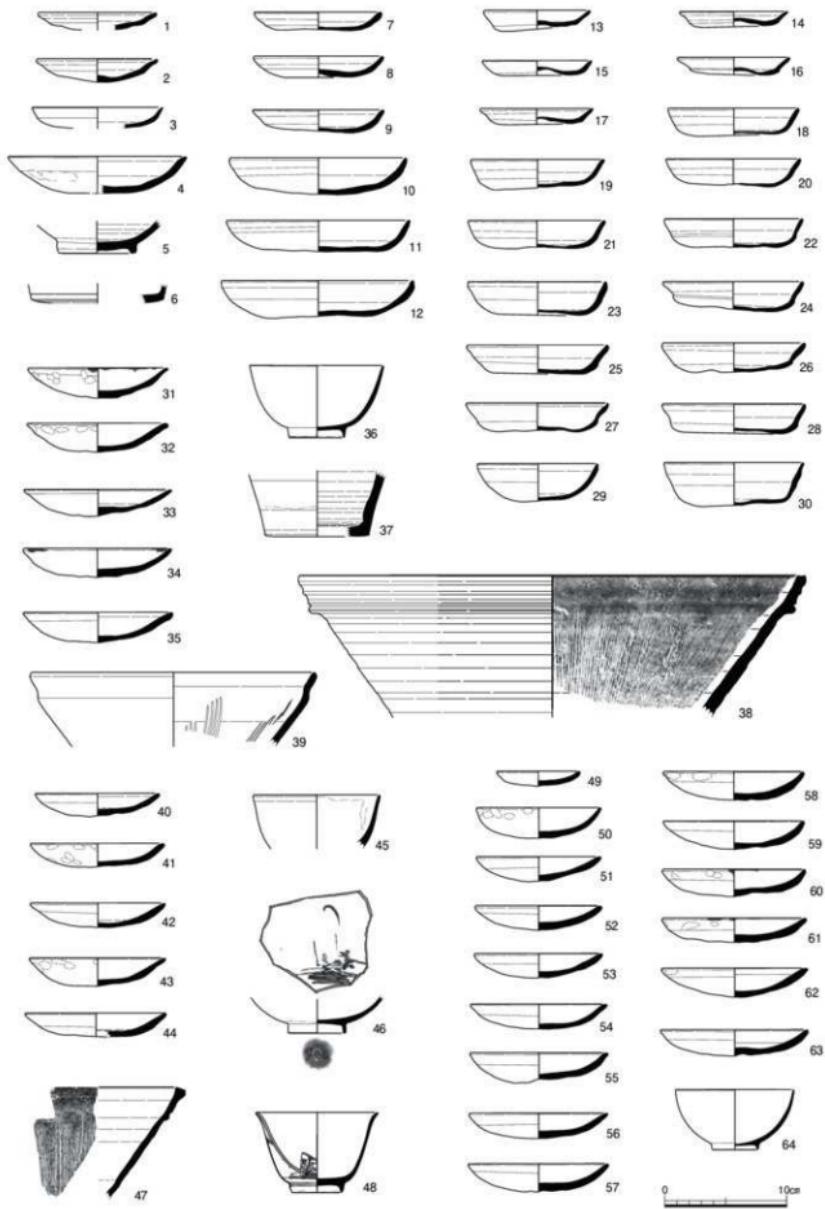


図310 第540次調査A区出土土器 1:4

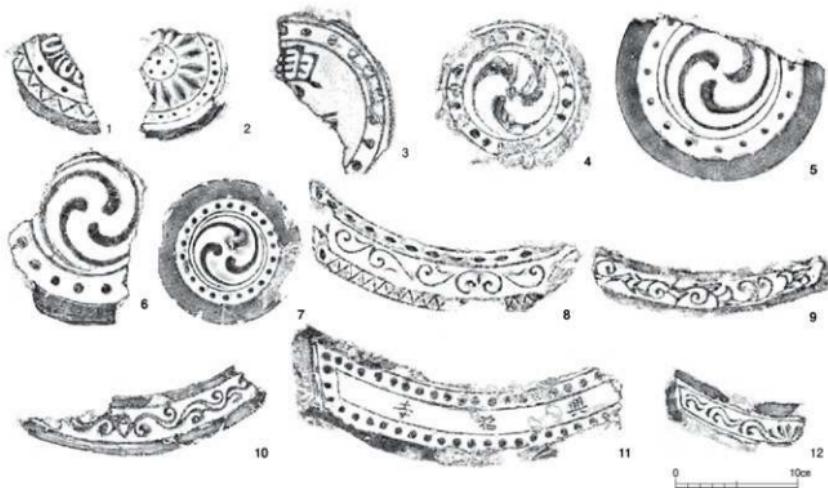


図311 第540次調査A区出土軒瓦 1:4

淡い黄橙褐色を呈するものが多い。法量的には、口径7cm前後の小型品、口径10.5cm前後の中型品、口径12cm前後の大型品に分けることができ、大型品の口径は方形土坑SK10630の①・②層出土品に近似するが、口縁部内面に残るナデ痕跡の幅が極端に狭くなっている点に違いを見いだすことができる。伴出の白磁碗も、SK10630④層出土品と比べると、全体に浅手で、高台も低いなど、伊万里焼とも呼ばれる肥前地産の磁器碗としては、18世紀半ば以降の特徴を示す。

(尾野義裕)

瓦磚類 古代から近世の瓦磚類が出土した。中世の瓦が主体であり、奈良時代のものは少ない。また、出土した軒瓦の型式は分散しており、いずれの時期においても西室で用いられた軒瓦の組合せは特定できなかった。

図311の1～7は軒丸瓦。1は複弁蓮華文。外区に線鋸齒文と珠文を配す。平安時代前期。2は単弁蓮華文。外縁が素文で外区に珠文を配す。平安時代前期。3は鎌倉時代の「興福寺」銘軒丸瓦。1～3は興福寺食堂の調査で同範出土例がある。4～7は左三巴文軒丸瓦。4は中央に珠点をもつ。平安時代末から鎌倉時代。5～7は鎌倉時代から室町時代。8～12は軒平瓦。8は6671A。奈良時代初頭の興福寺の創建瓦である。9は植物文軒平瓦。平安時代。10は均整唐草文で中心飾りに菱形の文様をもつ。平安時代後期。11は「興福寺」銘軒平瓦。10・11は興福寺食堂の調査で同範出土例がある。12は均整唐草文で中心飾りに半截した蓮華文をおく。室町時代。

出土位置に関しては、1・8が土坑SK10621、3は

土坑SK10614、6・9・12は方形土坑SK10630、10は土坑SK10618、11は竈SL10638（竈内に廃棄）、それ以外は、中世以降の整地土から出土した。

(石田由紀子)

金属製品・錢貨 鉄釘が51点出土した。いずれも小片で、頭部形状がわかるものはほとんどない。遺構に関わるものとして、土坑SK10618から鉄角釘2点、土坑SK10621から鉄角釘2点、円形土坑SK10600から鉄角釘1点、SK10630から鉄角釘2点、鉄丸釘10点、SK10632から鉄角釘11点、鉄丸釘2点がある。また、包含層からではあるが、銅製の垂木先金具片と思われる板状品が1点出土した。長さ約3cm程度で、全体形状は不明である。錢貨では、SB10450の礎石（ニ・十一）の周辺で寛永通寶6点と崇寧通寶1点が出土した。

(芝)

ま と め

礎石建物SB10450（西室大房）の規模の確定 西室大房の建物規模および基壇の南北規模があきらかとなった。建物は、桁行10間、梁行4間の南北約62.5m(212尺)、東西約12.4m(42尺)の南北棟礎石建物である。梁行の柱間寸法は中央2間が約3.2m(11尺)でそれ以外が約3.0m(10尺)、桁行の柱間寸法は、南2間分が約4.8m(16尺)で、それ以外が約6.6m(22.5尺)である。「紀要2014」では、梁行規模を295m(10尺)等間と報告していたが、今回の調査成果では、上述の規模とするのがより正確である。基壇規模は南北が約66.5m(225尺)で、基壇の出は南北それぞれ約1.9m(6.5尺)である。東西の基壇規模は不明だが、東面の基壇の出は、南北両面と同様に約1.9

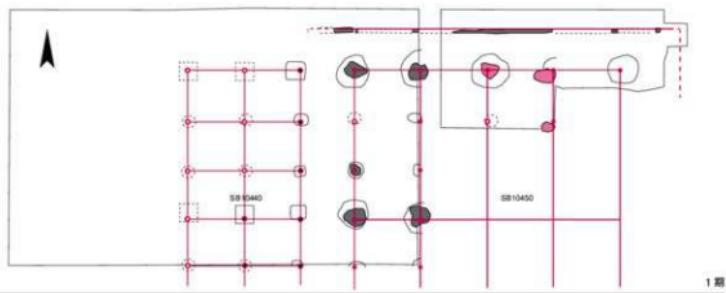


図312 第540次調査A区遺構変遷図

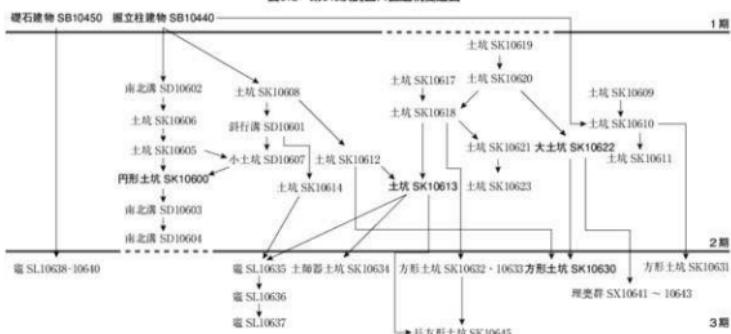


図313 第540次調査A区遺構変遷図(遺構番号)

m (6.5尺) である可能性が高い。

掘立柱建物SB10440の確認 西室大房SB10450の約25m西に並列して掘立柱建物SB10440を確認した(図312上)。今回の調査区では、後世の土坑群あるいは整地で削平を受け、規模の確定は難しいが、第516次調査の成果をあわせると、桁行10間、梁行2間である可能性が高い。建物の位置や規模から小子房の可能性が考えられるが、SB10450に近接しすぎており、一般的な大房と小子房の関係と異なる点に問題を残している。

掘立柱建物SB10440廃絶後の遺構群の確認 SB10440の柱穴に重複する土坑の年代からは、平安時代末(12世紀後半)にはSB10440は廃絶したことが確認され、その後、西室大房の西方には瓦や土器の廃棄土坑群が形成される。調査区の中央部には土器の廃棄土坑が多く、調査区西方には瓦の廃棄土坑が多い。これらは重複関係から図312・313のように変遷し、出土遺物から平安時代後半から江戸時代前半に位置付けられる。

近世遺構群の確認 西室大房SB10450の焼失(1717年)に前後して、竈や方形土坑、埋葬などの施設群が造られる(図312下)。方形土坑は何らかの貯蔵施設と考えられる。これらの遺構群からの出土土器は概ね18世紀以降のものであるが、方形土坑SK10630の出土土器の年代観によると、その構築がSB10450焼失を遡る可能性もある。いずれにしても、こうした近世遺構がまとまって検出されたことはなく、享保年間に大部分の堂宇が焼失して以降の境内の様相を知る上で貴重な成果といえる。(芝)

3 北円堂院回廊の調査

調査の目的と経過

2011年に、北円堂の南面・東面回廊および北面回廊の階段部分周辺を調査しており(第483次)、回廊の礎石抜取穴、据付穴、基境外装およびその抜取溝などを確認している⁶⁾。第483次調査では、北面回廊の東半部(桁行4間分)について、カシやマツの大樹があったため調査をおこなっていなかった。しかし、復元整備とともにあって樹木を伐採したところ、樹根付近の北面回廊礎石推定位に安山岩の巨礎が顔を出していたため、未調査部分の調査をおこなった。

地形と基本層序

基本層序は調査区の東西で異なる。東部では、上から

表土、暗褐色砂質土、地山(明褐色砂礫土)となるが、西は、暗褐色粘質土の下位に褐色粘質土、黄褐色粘質土と砂質土が互層となる基壇版築土、暗褐色粘土を複数重ねた造成土が続き、地山(赤褐色砂質土)となる。表土から地山までの高さは調査区東方では約30cmであるのに対して、調査区西方では約1.9mであり、地山は西に向かって大きく標高を下げる。この傾斜変換点は、Y=-15.574付近である。遺構検出面の標高は約94.9mである。

検出遺構

今回の調査では、北円堂院北面回廊および近世・近代の土坑群10基を検出した(図314-a)。

北面回廊SC9955 存在を想定していた8基の礎石抜取穴のうち、検出したのは南側柱の2基(SPI10660・10661)で、南側柱の残り2基はカシ樹根下あるいはその近くにあり、検出できなかった。また、北側柱のすべての礎石は後世の土坑群に壊され、確認できなかった。調査前に樹根付近にみえていた安山岩巨礎は、ほぼ礎石想定位置にはあるものの、後世に動かされた痕跡が認められた(図314-c)。検出した抜取穴の平面形はほぼ円形で径0.6×0.8mほど、深さは検出面から約20cm。抜取穴からは瓦片が少量出土した。2基の柱間寸法は、従来の想定どおり9.6尺とみられる⁷⁾。

基 壇 基壇築成の方法は、調査区の東西で異なる。東半では、基本的に地山の明黄褐色混じり土を削り出して造る。一方、西半ではこの地山が西に向かって急激に標高を下げる。調査区の西端では、GL-1.9m(標高93.4m)で地山を確認した。この地山上に、褐色土や暗褐色土などを比較的厚く積む(約1.1m)。その後、地覆石よりも約1m外側まで版築を施し、地覆石を据えたのち基壇の高まり部分に版築をおこなう(図314-d)。掘込地業は施さない。基壇部分の版築は、黄褐色粘土と黄褐色砂質土が5cmほどの厚さで互層となる。基壇版築の総厚は最も残存する調査区西端で約0.7mである。後述する近世以降の土坑群によって基壇北半は完全に壊されている。

基壇外装 基壇外装は北面回廊南面の一部で、地覆石と羽目石を確認した(図314-b・315)。これは1975・76年の境内防災設備工事にともなう発掘調査で確認していたもので、今回は再検出となる。地覆石は5石、羽目石は1石残り、前者は幅30~50cm、奥行15~20cm、成12~15

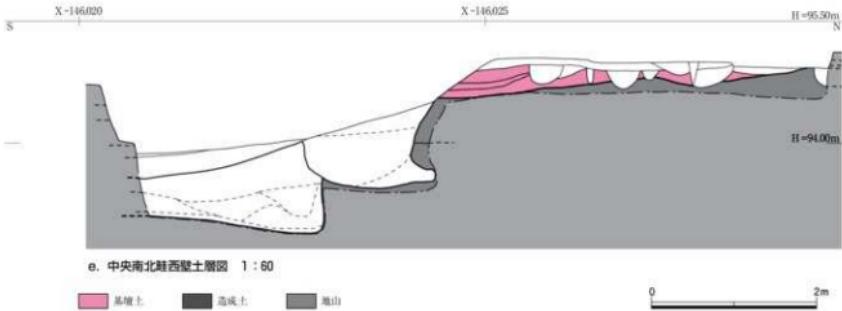
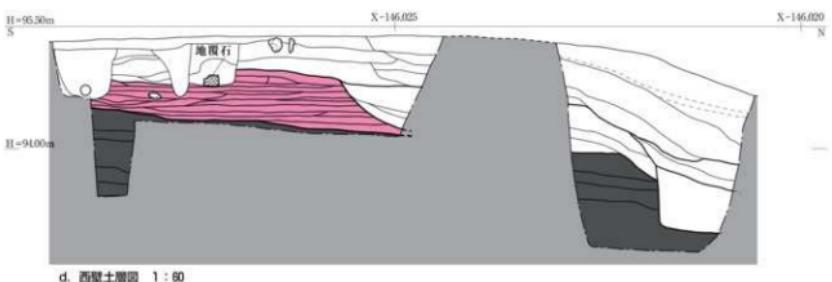
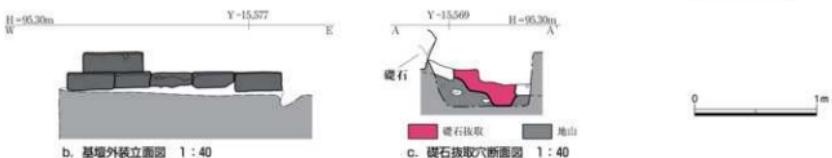
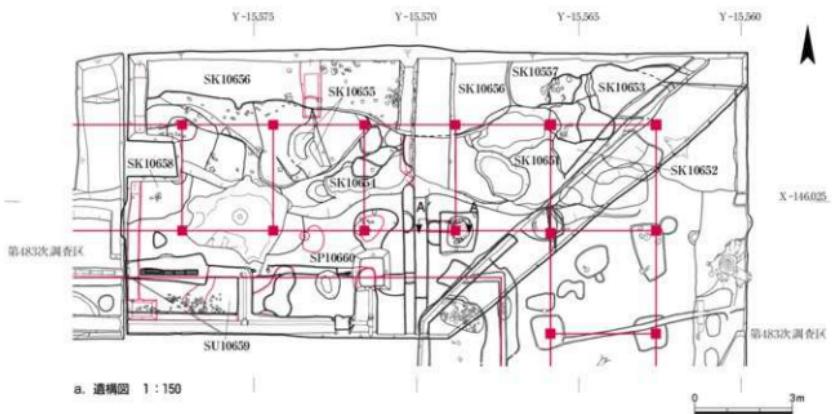


図314 第540次調査日区(北丹堂北面回廊)透構図・土層図・立面図・断面図



図315 北面回廊基壇外装検出状況（南西から）



図316 北面回廊北壁を壊す近世土坑群検出状況（北西から）

cm、後者は1石が幅48cm、奥行12cm、高さ18cmである。いずれも地獄谷産凝灰岩の切石を用いる。これらの切石が残っていない部分では、抜取溝を確認した。しかし、地覆石の破片らしき凝灰岩片が残存する部分では、据付痕跡を確認できなかった。これは、上述のように基壇築成の過程で溝などを掘らずに地覆石を据えたためと考えられる。

瓦器SU10659 調査区西南部の基壇外装の南で検出された。基壇土の土層で検出し、径3m程度の範囲に瓦がまばらに広がる。中世の土器や瓦器を含む。

近世・近代の土坑群SK10651～10658 調査区北半に大小10基の土坑を検出した（図316）。大きなものは、調査区外にのび、深さは約2mに達し、小さなものは1m前後、深さ0.5m程度で、これらが重複して掘られている。これらには多量の土器と瓦を含む。特に、SK10651からは、多数の土器、瓦のほか、鉄釘などの金属製品、貝殻など食物残滓が出土した。遺物からこれらの土坑のほとんどは近世以降のものである。この上面には、大正年間の銭貨を含む造成土（黒色土）がのる。（芝）

出土遺物

土 器 B区からは整理用コンテナに30箱あまりの土器・陶器が出土した。瓦器SU10659などから、中世に

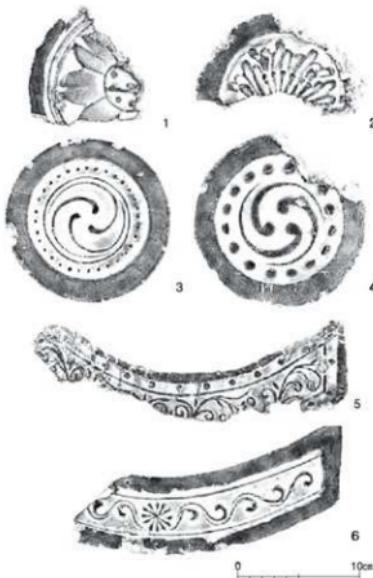


図317 第540次調査B区出土軒瓦 1:4

遡る土器や瓦器の細片が出土しているが、廃仏毀釈に関連して明治時代初期にまとめて廃棄されたとみられる陶器が圧倒的多数を占めている。（尾野）

瓦磚類 多量の瓦磚類が出土した。瓦磚類は近世から近代にかけてのものがほとんどで、古代のものはごくわずかである。特に土坑SK10651、SK10656からは近世から近代までの瓦が多く出土した。

図317の1は素弁蓮華文軒丸瓦。平安時代。2は興福寺一乘院所用の一乘院蓮華文軒丸瓦。3は左三巴文軒丸瓦。内区の巴文が非常に細く、外区の珠文も小さい。4は右三巴文軒丸瓦。2～4は江戸時代。5は均整唐草文軒平瓦。平安時代前期。6は均整唐草文で中心飾りに蓮華をおく。室町時代。1が基壇上にのる包含層、2～4・6は土坑SK10656、5はSK10656の上にのる黒色土から出土した。（石田）

金属製品・錢貨 近世土坑群から鉄釘などが出土した。遺構に関わるものとして、土坑SK10651からは銅キセル雁首1点、貝形銅製品1点、鉄角釘4点が、土坑SK10656からは鉄角釘28点、鉄丸釘3点、鉄錠5点、鉄座金11点がある。図318は、貝形銅製品である。厚さ0.5mmの銅板を用いて、イタヤガイ科の貝殻を模して作られたものと考えられる。中央右寄りに0.5mmの小孔を2つ

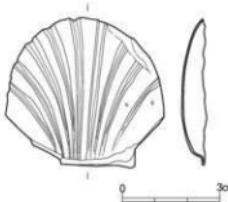


図318 第540次調査B区出土貝型銅製品 2:3

穿つ。縫縫用であろう。縫4.6cm、横5.0cm。

錢貨では、近世土坑群から延喜造寶1点、寛永通寶が3点、世高通寶1点出土した。また、近世土坑群の上にのる黒色土から一錢銅貨（大正11年）が出土した。（芝）

動物遺存体 土坑SK10651やそれを覆う黒色土から、57点の動物遺存体が出土した（図319）。SK10651からはマシジミ13点、アカガイ6点、ハマグリ5点、シジミ科3点、アワビ属1点、バイ1点、種不明の巻貝1点を同定した。貝類以外にも、マダイの歯骨、種は不明であるが鳥類の上腕骨骨幹部が出土している。黒色土からはハマグリ10点、アカガイ8点、マシジミ3点、シジミ科2点、クロアワビ1点、アワビ属1点を同定した。出土した動物遺存体は食用とされる種ばかりで、鳥類の上腕骨には解体痕跡も多数認められたことから、食糧残滓と考えられる。大型の個体が多いのが特徴的であり、殻長12.1cmのアカガイや殻長13.5cmのクロアワビも認められた。マシジミ、ハマグリ、アカガイは貝合わせができる個体も多く認められ、廃棄単位の保存性が高いことが示唆される。また、SK10651と黒色土の動物遺存体は平面的に同じような場所から出土しており、様相も共通することから、同じ遺構に由来した資料群の可能性が考えられる。

（山崎 健）

ま と め

北面回廊基壇の造成過程が判明 北面回廊は、調査区の東半では地山削り出しで基壇を造るのに対して、西半では比較的厚い暗褐色粘質土を数回に分けて積んだ後、黄褐色粘質土と砂質土の互層からなる基壇土を版築によって造成していることがあきらかとなった。これらの造成は、造成土・基壇土とともに遺物をまったく含まないことから、少なくとも回廊創建時、すなわち北円堂創建時に遡る可能性が高い。地山の落ち込みの傾斜変換点は、北円堂基壇のやや東であり、北円堂創建にともなって大規模な造成と整地がおこなわれたと考えられる。

北面回廊の礎石抜取穴の確認 基壇上面では2基の礎石抜取穴を確認した。ただし出土遺物が少なく、抜き取られた時期を確定することはできなかった。北面回廊の柱



図319 第540次調査B区出土貝類

配置や規模はこれまでの所見と変更がない。

北面回廊基壇北側の土坑群の確認 北面回廊の基壇北辺は、近世以降の土坑群によって大きく削平されている。これらの土坑群には、土器、瓦のほか、食糧残滓と考えられる貝などが出土した。出土遺物は大部分が19世紀中頃以降のもので、明治期の廃仏毀釈に関わるものと考えられる。（芝）

3 北円堂南面の調査

調査の目的

先述のように、2011年度の調査（第483次）では回廊の調査を実施したが、その際、北円堂院南面内部は未調査であった。今回の調査では、灯籠や参道の確認を目的として、北円堂基壇の階段幅で階段と回廊南門の間に約8×5mの調査区を設定した。

検出構造

灯籠基礎据付穴3基、出庇の礎石4基、昭和の北円堂修理時の足場穴2基を検出した（図320）。参道の構造は確認できなかった。

灯籠基礎据付穴SP10671～10673 北円堂南面に3基検出した。SP10671は南面階段の中軸ライン上にほぼのり、階段最下段の踏石南端から約3.2m（11尺）の位置で検出した。またその他の2基は、SP10671と東西軸を描え、SP10671から西に約2.5mの位置でSP10672を、東に約2.1mの位置でSP10673を検出した。位置と大きさから、いずれも灯籠の据付穴と考えられる。SP10671は径0.6×0.9m、深さ25cm（図321）、SP10672は径0.6m、深さ20cmである（図322）。SP10673は、調査当初に設定したサブトレーナにより、正確な大きさは分からずが、SP10672と

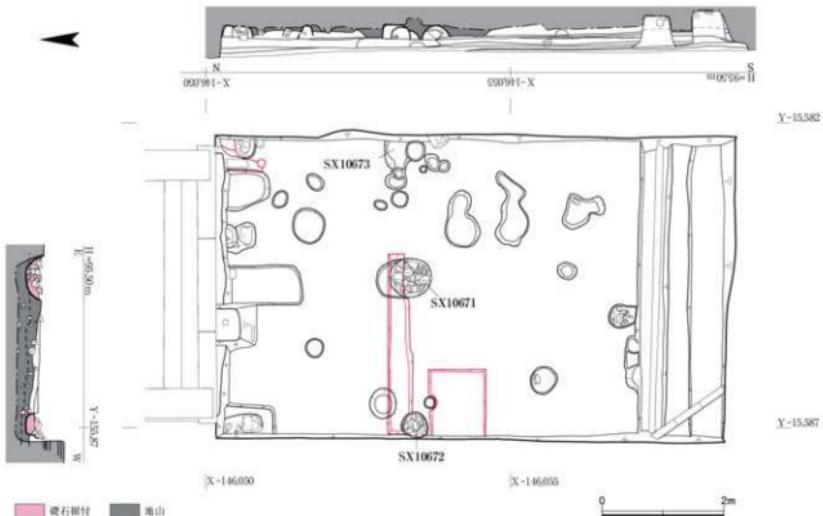


図320 第540次調査C区（北円堂南面内庭部）遺構図・土層図 1:80



図321 SP10671検出状況（北東から）



図322 SP10672検出状況（東から）

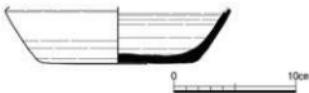


図323 第540次調査C区出土土器 1:4

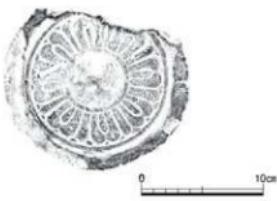


図324 第540次調査C区出土軒丸瓦 1:4

ほぼ同規模と考えられる。3つの据付穴には径5~10cm前後の円窪（花崗岩、チャート、流紋岩）が充填されており、SP10671からは奈良時代の須恵器平瓶が出土した。

その他、調査区北端には、出庇の礫石が東西に4基並び、そのやや南に北円堂修理時の足場穴と考えられる小穴が認められる。

出土遺物

土 器 整理用コンテナに2箱分の土器、陶磁器が出土したのみで、灯籠基礎据付穴SP10671から出土した須恵器（図323）以外にめぼしい遺物はない。SP10671出土の須恵器は、頸部を欠いているが平瓶とみられ、肩部に強い屈曲をもつ独特の形状から、奈良時代のものと考え

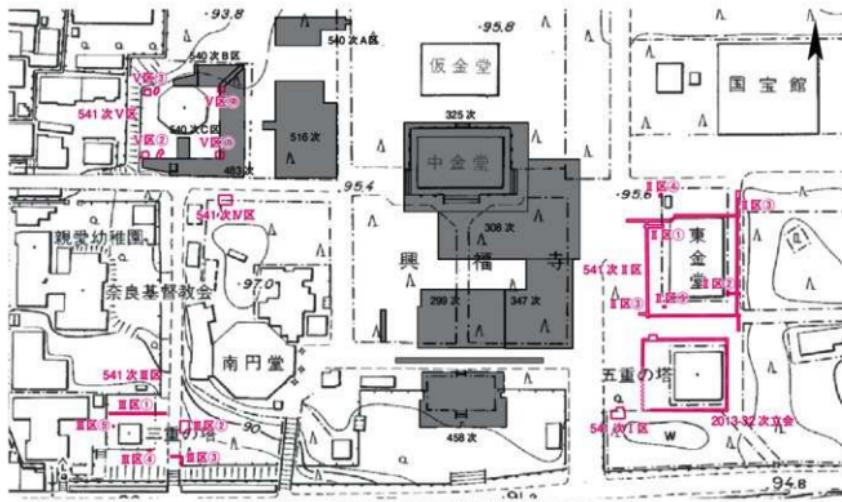


図325 第541次調査区・第2013-32次立会位置図 1:2000

られる。

瓦磧類 出土量は少なく、軒瓦に関しては造構とともにものではなかった。図324は、単弁八弁蓮華文軒丸瓦。平安時代後期のもので興福寺食堂の調査でも同范出土例がある。整地土より出土した。

(石田)

金属製品 鉄角釘3点、鉄丸釘25点が出土した。いずれも表土あるいは擾乱からの出土である。

(芝)

まとめ

北円堂南面に灯籠基礎据付穴とみられる小土坑を3基検出した。これらは北円堂南面階段の南端から約3.2mの位置に東西に並ぶ。これらは既存の資料などでは知られていないものだが、今回の調査により、北円堂院に灯籠が付属していたことがあきらかとなった。

4 境内防災工事にともなう調査

調査の概要と経過

興福寺では、2013年度以降、1970年代に設置した防災設備（放水銃やそれに水を供給する水道管など）の取り替えや新規放水銃設置にともなう水道管などの埋設といった工事（境内防災工事）をおこなっている。第541次調査は、この工事にともなうものである。工事には、既設管を撤去して同所に新規管を設置する工程と、新たに水道管などを埋設するため掘削をおこなう工程があり、調査は新規掘削となる箇所と、主として東金堂周辺の既設管撤去部分を対象とした。境内各所に合計十数ヶ所の調査対象地区が発生したため、それらを便宜的にI～V区

(尾野)

に分割し、また①～⑤の枝番号を付した（図325）。調査面積は合計約270m²で、2014年10月7日に調査を開始し、2015年2月12日に終了した。なお、2014年3月に工事立会として対応した際にも五重塔周辺で造構を確認したため（第2013-32次）、あわせてここで報告する。

基本層序

いずれの調査区も、上から（i）表土、（ii）現代の造成土、（iii）中世以降の包含層、（iv）地山、の順である。ただし、（ii）と（iii）の間に近世または近代の舗装（旧表土）、（iii）と（iv）の間に古代にさかのばる可能性のある整地土層（地山由来の土による整地と日され遺物をほとんど含まない層）などが確認できるトレチモもある。

なお、北円堂周辺のV区では、東側の①・④と西側の②・③とで土層が大きく異なるが、これについては「まとめ」で後述する。

五重塔周辺の検出遺構

五重塔南西のI区において、排水設備SX10680を検出した（図326）。花崗岩製の会所橋1基（SX10681）と陶質の水管暗渠2系統（東西方向のSD10682および北東ー南西方向のSD10683）からなる。SD10682の据付掘方埋土からガラス片が出土したことから、近代に属する造構と考えられる。水管の接続法や水管上面の標高から、東から西に向かって水を流し、会所橋で屈曲させて南西方向に排水していたことがわかる。

会所橋SX10681は、平面が0.9×0.9mほど、高さが0.7mほどで、底石1枚・側石4枚・蓋石2枚からなる。い

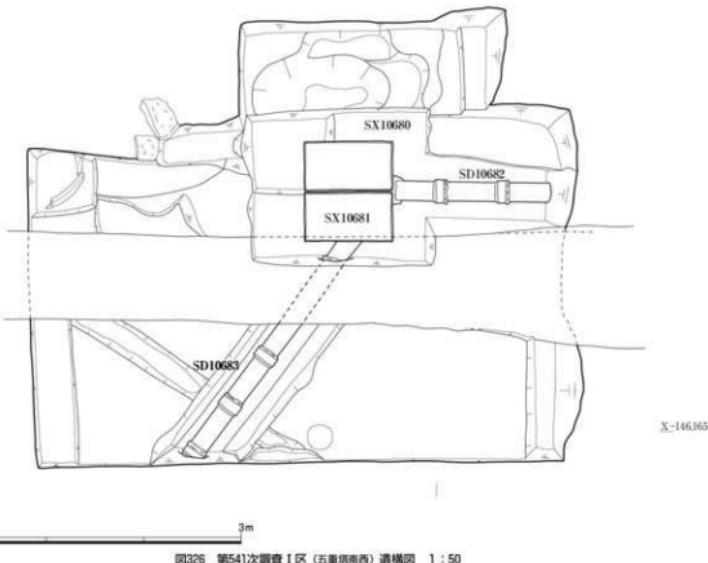


図326 第541次調査Ⅰ区(五重塔南西)遺構図 1:50

ずれも厚さは10cmほど。側石は左右両辺の上半または下半を切り欠く仕口を造る。目地はモルタルと思われる物質でふさいでいる。会所枡SX10681の上面はGL-1.2m(H=93.65m)ほどで、土管暗渠SD10682・10683の据付掘方はGL-2.0m(H=93.00m)ほどまで掘り込まれている。

土管暗渠SD10682・10683の土管は外径20cmほどで、1個の長さは0.6mほどである。SD10682は約1.7m分、SD10683は約2.8m分を検出した。土管どうしや会所枡SX10681との目地は、やはりモルタルとみられる物質でふさいでいる。

また、第2013-32次立会では、五重塔の東面にて南北柱穴SA10711、南面にて東西柱穴SA10712を検出した。いずれも既設水道管を撤去したのちに断面観察にて確認したものである。ともに柱間寸法は約3.6m(12尺)等間。SA10711の柱穴は6基、SA10712の柱穴は7基を確認した。いずれも砂利層(表土)直下の整地土層上面から掘り込まれており、近世後期以降に属すると思われる。柱穴の直径は40~60cmほどで、底面は未確認。SA10711・10712とも、五重塔を囲う一連の堀のような

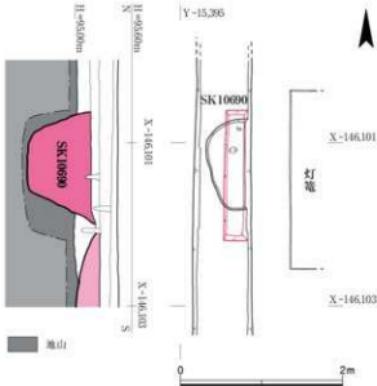


図327 第541次調査Ⅱ区③(東金堂西)遺構図・断面図 1:50

施設の一部であろう。

東金堂周辺の検出遺構

東金堂の四周をめぐるⅡ区③のうち、東金堂の東西中軸線の西延長上において、大型の土坑SK10690を検出し

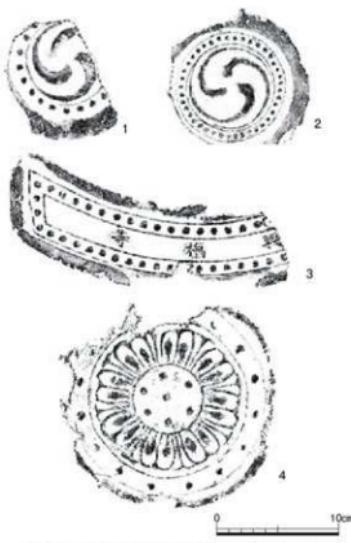


図328 第541次調査・第2013-32次立会出土軒瓦 1:4

た（国327）。検出面で、直径約1.4m、深さ約0.8mである。検出面の標高は95.10mほどで、地山由来の整地土とみられる黄灰褐色粘質土層を掘り込む。埋土から遺物は出土しておらず、時期は未詳。現在、SK10690の直上やや東側には東金堂に付随する灯籠が据えられており、これに先行する施設の遺構であると考えられる。（山本祥隆）

出土遺物

土器 第541次調査では整理用コンテナ3箱分の土器が出土した。内訳は、土師器、須恵器、瓦器、陶磁器からなり、古代から近現代まで多岐にわたる。このうち三重塔北方のⅢ区①では、中世後半の土師器皿がまとまって出土した。これら土師器皿は、口径が7cm前後、8cm前後、10cm前後の3種類が認められるほか、胎土の色調が赤褐色・灰白色・褐色と、こちらも3種類以上に分類が可能である。（青木敬）

瓦磚類 第541次調査では軒丸瓦2点、軒平瓦1点のほか、丸瓦・平瓦が整理用コンテナ18箱分出土した。図328の1・2は鎌倉時代の右三巴文軒丸瓦。いずれも三重塔北のⅢ区①より出土。3は鎌倉時代の「興福寺」銘軒平瓦で、興福寺食堂で同范出土例がある。北円堂南西のV区②包含層より出土。また、第2013-32次立会では、奈良時代後半の軒丸瓦6235Jが出土した（4）。五重塔東南部包含層より出土。（石田）

まとめ

第541次調査および第2013-32次立会では、排水設備

SX10680や柱穴列SA10711・10712、土坑SK10690などの遺構を検出した。これらはいずれも近世以降の時期に属するとみられるものの、既存の資料・史料からは知られていなかったものであり、興福寺の歴史を考察するための貴重な資料といえる。

また、各調査区において、整地土層や地山面などを確認し、標高の測定や遺物の採取などを実施した。さらに、東金堂周辺のⅡ区①・②や三重塔周辺のⅢ区③では、近世または近代に属すると思われる砂利敷きの舗装（旧表土）も検出した。これらは、興福寺境内の原地形や各時代の路面などを復原する際の重要なデータとなるであろう。

なお、北円堂周辺のV区では、東側の①・④ではGL-40~50cm（H=94.80m）で地山面を確認したに対し、西側の②・③ではGL-1.8m（H=93.50m）ほどまで掘削したが、造成土層が厚く、地山面を確認できなかった。これから、ちょうど現在の北円堂が建つあたりを境に、その西側（および北側）では地山面が急激に落ち込む地形であったことが推察される。あわせて、北円堂院、特にその西面・北面回廊は、大規模な造成により平坦面を形成した上で建造されたことも指摘できるだろう。とりわけ③トレーニングで確認した造成土層は遺物をほとんど含まない黄褐色土（地山由来）を主体としており、養老5年（721）の北円堂院創建に際してなされた造成の痕跡である可能性もある。以上の見通しは、第483次調査や第540次調査（B区）で得られた知見とも整合する。（山本）

註

- 1) 大岡實『南都七大寺の研究』中央公論美術出版、1966。
- 2) 鈴木嘉吉『奈良時代僧房の研究』奈文研、1957。
- 3) 奈良市教育委員会『南都出土中近世土器資料集—奈良市高天町遺跡（IIJ第559次調査）出土資料一』2014。
- 4) 京都市埋蔵文化財研究所『平安京左京六条二坊五町・猪熊殿跡・本國寺跡』『昭和54年度京都市埋蔵文化財調査概要』2012。
- 5) 京都市埋蔵文化財研究所『平安京左京北辺四坊』2004。
- 6) 大林潤はか『興福寺 第1期境内整備事業にともなう発掘調査概報 VI』2012。
- 7) 前掲註6。

西大寺旧境内出土木材

—第521次

1 はじめに

2014年におこなわれた西大寺旧境内の発掘調査（平城第521次）において、西大寺創建以前の整地層落ち込みSX1135より、建築部材未成品と思われるものを含む木材が4点出土した。調査地は平城京右京一条三坊九坪内にあたり、西大寺金堂院東面回廊SC1120を確認している。SX1135は金堂院東面回廊造成土の下層で確認された大規模な落ち込みで、金堂院造営以前にこれを埋め立て、整地がおこなわれた（『紀要2014』）。SX1135から出土した木材は報告段階では未調査であったが、このたび調査を終えたので報告したい¹⁾。

2 出土木材

木材1 全長1225mm、幅185mm、成220mm。芯持ちで、部材の形状より肘木の未成品とみられる。これに木口から別材の小径丸杭が打ち込まれている。樹種はツガ属、杭がコナラ属アカガシ亜属。側面（出土時上面）はもともと平滑に加工されているが、加工痕跡は不明瞭で工具は不明である。下端は全面チョウナ（もしくはノミ）痕跡が残る。加工痕跡は明瞭で、刃幅55mm程度の直刃で、間隔は15~30mmと比較的細かく、3列平行に規則正しく加工された痕跡が残る。上端は削れ肌で、中央に部分的にチョウナはつりの痕跡が残る。チョウナの刃幅や加工の荒さが下端とは異なる。両木口とも仕上がりは平滑で、ノミの痕跡が残る。杭は径60mmで、木口に面取りを施す。反対の木口には貫通せず、打ち込まれた長さは1m程度とみられる。

古代建築の技法・様式の変遷において、肘木の形態のうち注目すべき特徴として、①下端の曲線、②箒縁の有無、③舌の有無、④木口の切断方法（下角を外へ出すものと垂直に切り落とすもの）があげられる²⁾。木材1は、①下端の曲線は、中心から両木口に向かって大きな弧を描く。②箒縁の有無は、上端が破損しているため不明である。③舌は現状では無い。下端は加工の途中段階ではあるが、この状態から舌を造り出したとも考えにくい。④木口の切断方法は、木口が一部しか残存せず判断は難し

いが、下角を外へ出すものとみられる。この④の特徴は、現存する古代建築では法隆寺経蔵（8世紀初期）にみられるものがもっとも新しいものである。これらの特徴をあわせると、木材1は古代の肘木としてはやや古い様相を示すとみることもできる。しかし、部材は未完成でありかつ破損が大きいため、全体が不明で断定は難しい。

木材2 全長607mm、幅367mm、成215mm。芯持ちで、長方形断面部材の端材とみられる。樹種はヒノキ属。上面・両側面ともチョウナで平坦に仕上げる。元口は刃幅90mm程度のチョウナ（またはノミ）で四角錐状に荒くはつる。

木材3 全長2615mm、径280mm。芯持ちの丸太材。節が多い。樹種はヒノキ属。木口側にエツリ穴を3方向からノミで開け、木口に面取りを施す。元口側の木口にはノコで切断した痕跡が残る。側面にはヨキの刃痕と割れ肌があり混じり、非常に荒くはつたとみられる。

木材4 全長1630mm、径300mm。芯持ちの丸太材。樹種はヒノキ属。元口側にエツリ穴を3方向からノミで開ける。木口側は3面からなる尖った形状。側面とも、やや荒いチョウナ痕跡が残る。

3 まとめ

SX1135から出土した木材4点はいずれも建築に用いられた痕跡はみられないが、部材の未完成1点、端材1点が含まれ、近くで木材加工をおこなっていた可能性が考えられる。このうち木材9556は肘木の未完成で、奈良時代前期の特徴がみられる。これらの木材はSX1135の時期から、西大寺創建以前の建物に関わるものとみられ、その時期にも肘木を用いる建物が周辺でつくられていた可能性を示唆する。また、調査地の100m南西でおこなわれた平城第505次調査でも西大寺創建以前の遺構が3期確認されている。これらの成果は西大寺創建以前の土地利用について重要な示唆を与えるものであり、今後、旧境内域では下層遺構についても慎重な調査をおこなう必要がある。

（番 光・小田裕樹）

註

- 各木材の樹種同定は理文センター星野安治による。なお年輪年代調査も試みたものの、年代が判明した資料はなかった。

2) 奈文碑「山田寺出土建築部材集成」1995、42頁。

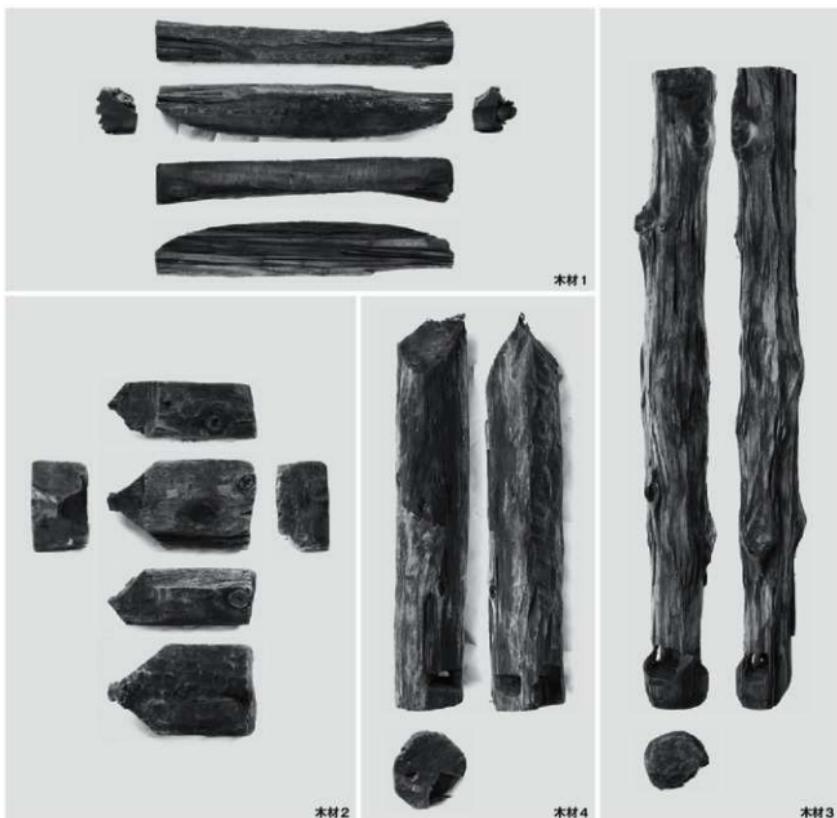


図329 第521次調査出土木材 1:20



木材1 木口に打ち込まれた小杭

木材1 下端チョウナ痕跡

木材4 側面ヨキはつり痕跡

図330 木材1・4細部写真

BULLETIN
Nara National Research Institute
for Cultural Properties
2015

C O N T E N T S

I Research Reports	1
Consideration of the Imperial Audience Hall's Acroterions: Research for Reconstructing the First Imperial Audience Hall Compound, Part 16	3
Details of the Gutter at Internal Corners of the Corridor Roof: Research for Reconstructing the First Imperial Audience Hall Compound, Part 17	6
Consideration of the Railing atop the Brick Retaining Wall: Research for Reconstructing the First Imperial Audience Hall Compound, Part 18	8
Consideration of Fixatives Used in Painting Ancient Architecture: Research for Reconstructing the First Imperial Audience Hall Compound, Part 19	10
Reconstruction of the Quarrying Work Process by 3D Laser Scanning Measurement of Rock Splitting Traces	12
Basic Research on Quarrying and Stone Masonry Techniques of Angkor Monuments	14
Research and Restoration Work at the Western Prasat Top Site, Cambodia, Part 2	16
Current Status and Future Prospects of Intangible Cultural Heritage in Samoa	18
Practical Experience with Hands-on Exhibits for Promoting Recognition and Understanding of Excavated Artifacts	20
Investigation of a Bronze Mirror with a Parrot Design Owned by Sanbuji Temple, Tottori	22
The Zaō Gongen Cult Seen in a Text on the History of Mt. Ishizuchi	24
The Limits of Images of Ancient Architecture: Characteristics of Ancient Architectural Drawings	28
Cultural Landscape in Taiwan	30
The Possibility of Cultural Landscape Studies: A Review of Debate from the Open Workshop on Cultural Landscape Studies	32
Value and Management of Terraced Rice Paddy Landscapes Inscribed on the World Heritage List:	
Comparative Analysis of Sites in the Philippines and Indonesia	34
Towards the Development of Long-term Site Management	36
Garden Remains of Sengoku Period Fortified Residences	38
Scenic Gardens as a Resource in England	40
Research on the Glass Vessel Excavated from the Stone Stupa (<i>sekitōba</i>) of the Omiashi Shrine	42
A Study of Ancient Lamp Oil in Japan	44
A Study of the Harness from the Base Stone of the Pagoda's Central Shaft, Asukadera Temple	46
Pottery with Incised Dotted Lines	50
Re-investigation of Roof Tiles with Incised Characters Recovered at Asukadera Temple	52
Clay Analysis of Roof Tiles Excavated from the Fujiwara Palace and Capital Sites	56
An Examination of Two-colored Glazed Bricks with Incised Linear Designs from the Former	

Precinct of Hokkeji Temple	58
Modest Observations on Shipping Labels for Seaweed from Inaba Province: Revisions and Place Name Identifications	60
Restoration and Design of the Kitaguchihongū Fujisengeninja of the Mid-Edo period	62
Color Material and Structure of Wall Panel Paintings in the Hall of the Moroto Family Residence (Important Cultural Property)	64
Experimental Research on the Preservation of Buried Cultural Properties within the Stone Compartment of a Simulated Tomb: Effect of the Environment Inside the Stone Compartment on the Corrosion of Metal Artifacts	66
Scientific Study of the Material and Structure of a Mozaic Glass Bead from the Asoda Higashi No. 3 Tomb in Kagawa	68
Investigation of the Color Material Used for the Ceiling Boards and the <i>Shirin</i> (Spacer) Boards under the First Story Eaves of the Yakushiji Temple East Pagoda (National Treasure)	70
Utilization of Eagle Feathers in Ancient Japan	72
Wood Utilization for Early Japanese Domestic Violins from the Perspective of Dendrochronology: Focusing on Products Manufactured by Masakichi Suzuki	74
Reexamination of Remains Related to Metallurgy Excavated at the West Monk's Quarters of Kōfukuji Temple	78
Research on the Guanyin Bodhisattva Statue in the Possession of Kōgenji Temple	80
Conservation Treatment of Semi-Built up Ship excavated from the Uruujitokyū Site	82
II Excavations at the Asuka and Fujiwara Palaces and Other Sites	83
1 Excavations at the Fujiwara Palace Site	85
Excavation of the Imperial Audience Hall Compound (No. 182)	86
Excavation in the Eastern Government Office Sector (No. 183)	97
Identification of tree species of wooden tablets (<i>mokkan</i>) from the Fujiwara Palace Site 2 ..	105
A study of high-tin bronze bowls from the Fujiwara Capital	107
2 Excavations in the Fujiwara Capital Site	111
Excavation in the former precinct of Moto Yakushiji Temple (No. 178-11)	112
Excavation in the former precinct of Moto Yakushiji Temple (No. 181-1)	114
A report on early Haji ware recovered from the Wada abandoned temple site	116
3 Excavations in and around the Asuka area	123
Excavation at Toyura Temple (No. 181-8)	124
Excavation in the Environs of Hinokuma Temple (No. 180)	128
Excavation in the Environs of Hinokuma Temple (No. 184)	134
Excavation of the Hinokuma Temple tile kiln (No. 181-4)	135

III Excavations at the Nara Palace and Other Sites	139
1 Excavations at the Nara Palace Site	141
Excavation of the Former Imperial Audience Hall Compound (No. 520)	142
Excavation of the northeastern Administrative Office sector (No. 542)	151
Animal Remains from Pit SK 19189 in the Eastern Administrative Office Sector (No. 440)	157
2 Excavations in the Nara Capital Site and at Nara Temples	159
Excavation in Blocks 1, East First Ward on Third Street (No. 522)	160
Excavation in Nakayama tile kiln (No. 523)	168
Excavation in Block 14, East Second Ward on Second Street (No. 524)	176
Excavation at the Former Precinct of Kairyuouji Temple (No. 525)	184
Excavation at the Former Precinct of Hokkeji Temple (No. 526, 532)	187
Excavation in Blocks 4 West Second Ward on Third Street and 1 West Second Ward on Second Street and Southern First Avenue (No. 530)	191
Excavation in Blocks 11 East Second Ward on Second Street (No. 533)	195
Excavation in Blocks 15 East First Ward on Third Street (No. 534)	201
Excavation of the East Stupa of Yakushiji Temple (No. 536)	204
Excavation at the Former Precinct of Kofukuji Temple (No. 539)	205
Excavation at the Precinct of Kofukuji Temple (No. 540, 541, 2013-32)	212
Wooden Artifacts Recovered from the Former Precinct of Saidaiji Temple (No. 521)	230

奈良文化財研究所紀要
2015

発行日 2015年6月26日

編集発行 独立行政法人国立文化財機構 奈良文化財研究所

奈良市佐紀町247番1
〒630-8577 TEL 0742-30-6753
e-mail jimu@nabunken.go.jp
URL <http://www.nabunken.jp/>

印刷・製本 能登印刷株式会社

BULLETIN
Nara National Research Institute
for Cultural Properties
2015

Independent Administrative Institution
National Institutes for Cultural Heritage
Nara National Research Institute for Cultural Properties
247-1, Saki-chō, Nara-shi, 630-8577, JAPAN
<http://www.nabunken.jp/>